

第Ⅲ章 南街道遺跡の発掘調査

第1節 遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字蛭川字南街道(D地点)から大字吉田林字神明(A地点)・同北久保田(B地点)・同毛無し(C地点)にかけて所在する古墳時代と中世を主体とする集落跡である。遺跡は、標高83mの北東側に向かって緩やかに傾斜する平坦で比較的広い微高地上に立地し、北側には国道462号線を挟んで、同じく古墳時代を主体とする辻堂遺跡(本書第Ⅱ章)が隣接している。この辻堂遺跡と本遺跡は、地形的にも遺構分布の状況から見ても同一遺跡と考えられ、時期的な補完関係をもちながら古墳時代中期～後期終末まで継続する、女堀川中流域南部の中心的大規模集落を形成している。

本遺跡の南東側約400mの生野山残丘上には、本遺跡を見下ろすように、全長60mを測る前方後円墳の生野山銚子塚古墳が6世紀前半頃(金子1975、菅谷1984)に築造されている。また、C地点の南西側約40mには堀によって区画された一辺約60mの方格地割りをもつ中世の毛無し屋敷跡(恋河内1995)がある。

本遺跡のA～D地点で検出された遺構は、堅穴式住居跡46軒・掘立柱建物跡12棟・井戸跡1基・土壇22基・溝跡16条と包含層であり、時期は縄文時代・古墳時代・中世のものが見られる。

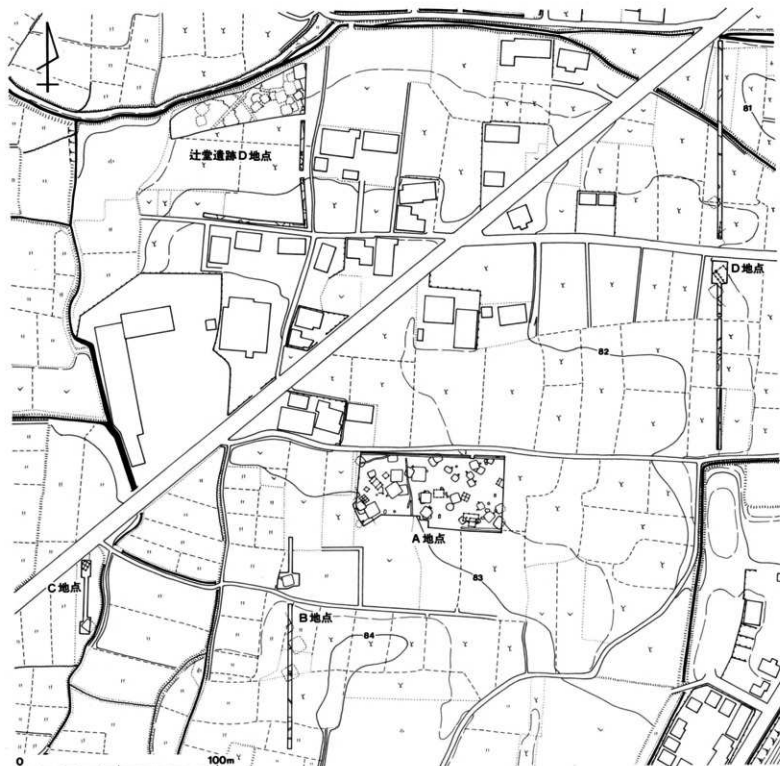
縄文時代の遺構は、土壇2基(第11・12号土壇)と包含層だけであり、これらはいずれもA地点の調査区北東端に位置している。このA地点の北東端は、縄文時代には小規模で緩やかな開析谷があり、中期(勝坂式末)～後期(称名寺式)の土器片(写真図版86)を含む包含層によって埋没している。土壇は、後期のものと考えられ、開析谷の中で2基が重複している。いずれもその性格は不明であるが、第11号土壇では称名寺式土器の破片がまとまって出土している。この他には、古墳時代や中世の遺構の覆土中からも、該期の土器片や石器(写真図版87)が少量出土している。



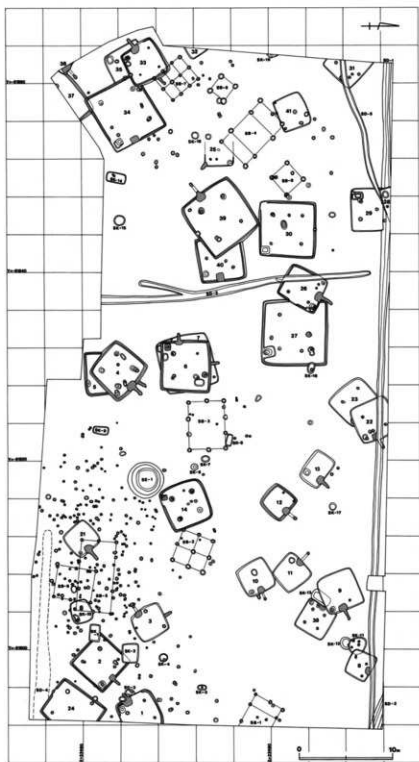


古墳時代の遺構は、竪穴式住居跡45軒・掘立柱建物跡2棟・土塋4基・溝跡3条が検出されている。これらの遺構は、中期(5世紀)前半から後期終末(7世紀後半)にわたる時期のものであるが、B地点の第15号住居跡の覆土中からは前期の土器が混在して出土しており、周辺に小規模な前期集落が存在する可能性が高い。中期の遺構は、A地点西側からB地点北側にかけて11軒の住居跡がまとまって分布しているが、同時期での重複は見られない。形態は、整った方形を呈し、住居の対角線上に4本主柱穴を配するものが多い。前半期の住居跡にはカマドは見られず、住居内の北側寄りに炉を、反対側のコーナー部に貯蔵穴をもつものが一般的である。後半期の住居跡は第40号住居跡だけであるが、比較的整った形態のカマドが付設され、その右側コーナー部に貯蔵穴をもっている。後期の遺構は、住居跡が各地点から検出されており、広範囲に分布する様相が伺える。6世紀初頭の時期を欠くが、それ以降は終末まで継続するようである。これらの住居跡は、南西～北東方向に主軸をとるものが一般的であるが、カマドの位置は住居の南東側以外の各壁に見られる。掘立柱建物跡は、2間×3間の長方形を呈する側柱式と、2間×2間の方形で東柱をもつ総柱式の2棟があり、いずれもA地点中央部に位置している。

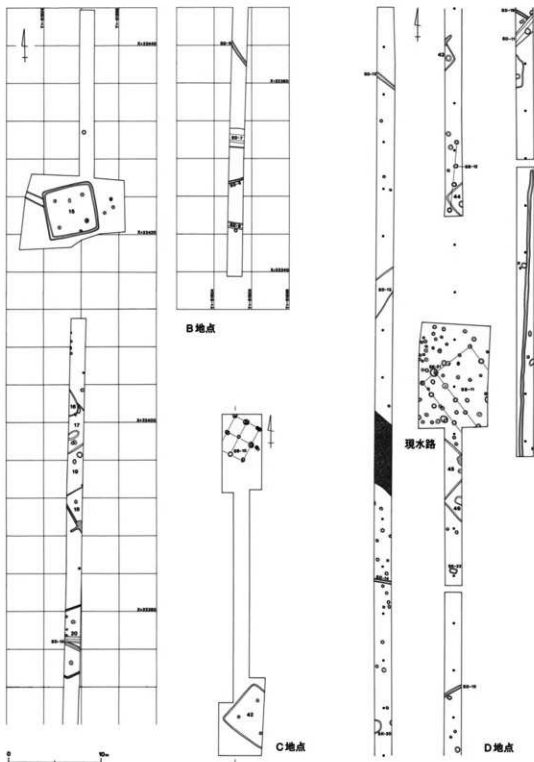
中世の遺構は、掘立柱建物跡10棟・竪穴式住居跡1軒・井戸跡1基・土塋15基・溝跡3条である。これらの遺構は、出土遺物の関係から時期が明確に解るものは少ないが、概ね13世紀中葉～15世紀の長期にわたる集落跡の可能性が高い。建物跡は、側柱式と総柱式のものがあるが、建物の長軸を地形の等高線に沿って北西～南東方向に向けているものが多い。竪穴式住居跡は、コーナー部にカマドをもつ古代からの系譜を引くもので、同様の形態のものは北側約500mに位置する蛭川坊田遺跡でも検出されている。A地点の第1号溝跡とB地点の第10B号溝跡は、条里形地割りの東西方向の坪線にはほぼ一致するもので、本遺跡上の現地表面に見られる条里形地割りの施工時期を知る上で注目されよう。



第91図 南街道遺跡全体図



第92図 南街道遺跡A地点全体図



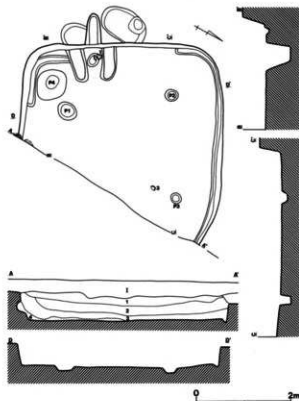
第93図 南街道遺跡B・C・D地点全体図

第2節 検出された遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第94図）

A地点の東端南側寄りに位置し、南西側には第2号住居跡と第24号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈するものと思われ、規模は北西～南東方向が4.35m・南西～北東方向は4.23mまで測れる。主軸方位は、N-117°-Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは60cmある。各壁下には壁溝が見られるが、南西側壁と南東側壁では途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部に比べて周辺部が若干高くなっている。全体に堅くしまっている。ピットは、4箇所検出されている。P1～P3は、配置的には支柱穴と考えられるものであるが、深さは12cm～20cmと比較的浅い。P4は、南側コーナー部に位置する比較的規模の大きなもので、深さは50cmある。その位置や形態から貯蔵穴と考えられるが、中からは何も出土していない。カマドは、当初南東側壁の中央付近に付設されていたものが、南西側壁の中央やや南側寄りに作り替えられたもので、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長144cm・最大幅108cmを測る。袖は、その基部が残存しており、ロームブロックを含む暗褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込



第1号住居跡土層説明

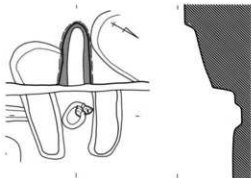
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）



第94図 第1号住居跡

まない形態で、あまり焼けていない。燃焼面は、床面とは同じで平坦をなし、中央部に浅い掘り込みがある。煙道部は、傾斜しながら壁より66cm程外に延びて立ち上がっている。

出土遺物は、土器片が少量出土しただけである。No 1の甕はカマド内より出土し、No 2～No 6の坏は貯蔵穴内(No 4)や覆土中(No 2・3・5・6)から出土している。

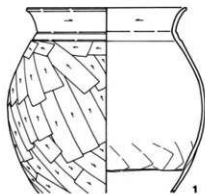


第1号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



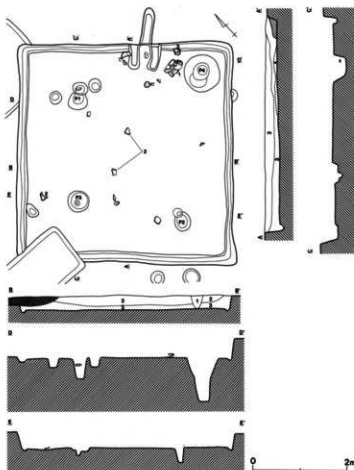
第95図 第1号住居跡カマド



第96図 第1号住居跡出土遺構

第1号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(17.0)、残存高19.5 B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面施ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 1/3。G. カマド内。
2	坏	A. 口縁部径12.2、器高3.4 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 4/5。G. 覆土中。H. 器形はやや歪んでいる。
3	坏	A. 口縁部径11.8、器高3.6 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径11.4、器高3.6 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—淡茶褐色、内—明赤褐色。F. 3/4。G. 貯蔵穴内。
5	坏	A. 口縁部径11.2、器高3.1 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径11.0、器高4.0 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。



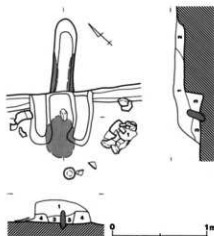
第2号住居跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（B軽石を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（小石・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第2号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

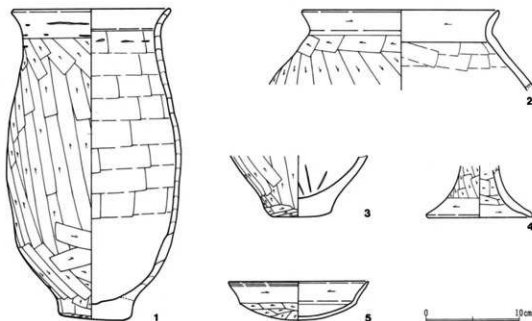
第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第97図 第2号住居跡

第2号住居跡(第97図)

A地点の南東側に位置し、第1号住居跡・第3号住居跡・第24号住居跡が近接している。住居跡の北側コーナー部の上半を第2号土壌に、西側コーナー部を第1号土壌に切られている。平面形は、整った方形を呈し、規模は北東～南西方向が4.62m・北西～南東方向が4.60mある。主軸方位は、 $N-43^{\circ}-E$ をとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは35cmある。各壁下には壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗茶褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅くしまっているが、やや起伏が見られる。ピットは、P1～P4の4箇所が検出されている。P1～P3は、住居のほぼ対角線上に位置するもので、主柱穴と考えられるものであるが、深さは16cm～22cmと比較的浅い。住居東側コーナー部に位置するP4は、貯蔵穴と考えられるもので、直径78cmの円形を呈し、深さは90cmとかなり深い。この他のピットは、いずれも住居埋没後に掘削されたもので、本住居跡に伴わないものである。カマドは、住居北東側壁の中央やや南側寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長134cm・幅67cmを測る。袖は、ローム粒子を主体とする暗茶褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、比較的良く焼けている。燃焼面は、床面とほぼ同じで平坦をなし、中央部に棒状の片岩を使用した支脚が立てられている。煙道部は、ほぼ水平に住居壁より76cm程延びて立ち上がっている。

出土遺物は、カマド周辺や住居中央部の床面付近及び覆土中より、土器片が比較的多く出土している。土器以外では、P3の南東側床面付近より片岩の破片が1個出土しているだけである。



第98図 第2号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径16.8、器高32.9、底径7.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
2	甕	A.口縁部径(21.0) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/2。G.床面上。
3	甕	A.残存高6.5 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.底部のみ。G.床面付近。
4	台付	A.残存高5.5 台端部径(11.4) B.粘土紐積み上げ。C.台部内外面ケズリ。台端部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一黒褐色、内一暗褐色。F.1/3。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部径(14.8)、器高4.1 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.覆土中。

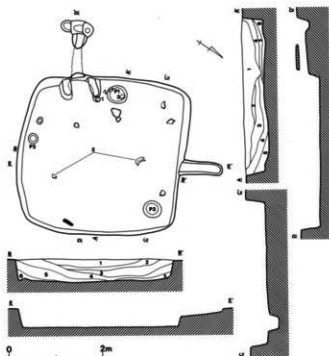
第3号住居跡（第99図）

A地点の南東側に位置し、第2号住居跡が近接している。平面形は、やや不整の方形を呈し、規模は南西～北東方向が3.36m・南東～北西方向が3.58mある。主軸方位は、N-118°-Wをとる。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅くしまっているが、かなり起伏がある。ビットは、4箇所検出されているが、その内のP1～P3が本住居跡に伴うと考えられるものである。いずれも壁際に位置し、深さは10cm～20cmと比較的浅い。カマドは、当初北西側壁の中央付近に付設されていたものが、南西側壁の南側コーナー部寄りの位置に作り替えられたもので、壁に対して若干斜めに付設されている。規模は、長さが140cmまで測れ、幅は88cmある。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築しており、右袖の先端部にはNo1の甕を補強に使用している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、非常に良く焼けている。燃焼面は、床面とはほぼ同じ高さとその上の第5層の2面あり、いずれもほぼ平坦である。煙道部は、ほぼ水平に住居壁より90cm以上延びているが、先端部を中世のビットに切られている。本住居跡の覆土は、ロームブロックを含む暗黄褐色土と焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色土が互層をなしており、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

出土遺物は、土器片が少量出土しただけである。土器以外では、P1の東側より比較的大きく扁平な自然石が1個出土しているだけである。

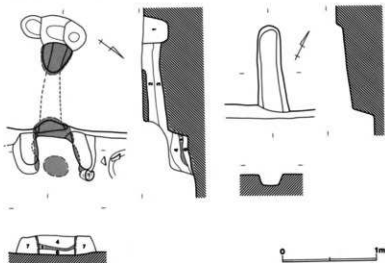
第3号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(22.6)、残存高31.3 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.カマド袖先端。
2	甕	A.口縁部径(18.4) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一明橙褐色、内一暗灰褐色。F.1/2。G.覆土中。
3	甕	A.口縁部径(19.0) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/4。G.P1内。
4	坏	A.口縁部径(11.2) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/4。G.覆土中。



第3号住居跡土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロック・小石を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒褐色土層（ロームブロック・焼土粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：黒褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

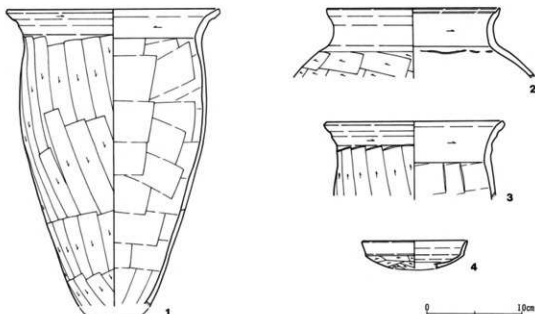


第3号住居跡カマド土層説明

- 第1層：淡灰色土層（B軽石を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第99図 第3号住居跡

- 第4層：黒灰色土層（ロームブロック・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：黒褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

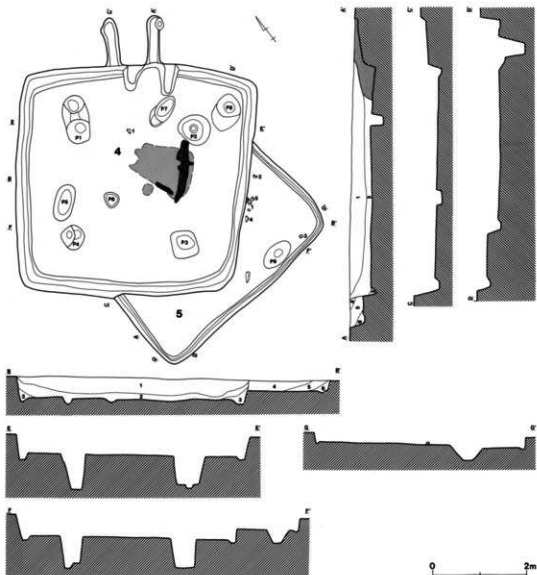


第100図 第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡（第101図）

A地点の中央部南端に位置し、重複する第5号住居跡を切っている。北側には第6号住居跡と第7号住居跡が近接している。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は南東～北西方向が4.95m・南西～北東方向が5.04mある。主軸方位は、N-41°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは46cmある。各壁下には幅20cm・深さ10cm程度の壁溝が、途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に非常に堅くしまっている。ピットは、8箇所検出されている。住居の対角線上に位置するP1～P4は、支柱穴と考えられるもので、深さはいずれも70cm前後ある。P8は、深さが55cmあり、東側コーナー部に位置する。位置的には貯蔵穴の可能性も考えられるが、規模が小さくピット状の形態を呈している。この他のピットは、いずれも不整形を呈するものでその性格は不明である。カマドは、北東側壁の中央付近に壁に対してほぼ直角に付設されている。本カマドの左側には、隣接して旧カマドの煙道部が見られる。規模は、全長170cm・最大幅115cmを測る。袖は、ローム粒子を含む暗褐色土を直接壁に貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、全体に非常に良く焼けている。燃焼面は、焼土層（カマド第4層）が厚く堆積しており、平坦で床面とほぼ同じ高さである。煙道部は、傾斜しながら直線的に壁外に1m程延びている。本住居跡は、住居中央部の床面に比較的広範囲にわたって火熱により赤色化した部分が見られ、また炭化材や覆土中に焼土粒子と炭化粒子を顕著に含んでいることから、火災により焼失したものと考えられる。

出土遺物は、少量の土器片や土鍬及び耳環などが出土しているが、いずれも覆土中から出土したもので、本住居跡に直接伴うものではない。

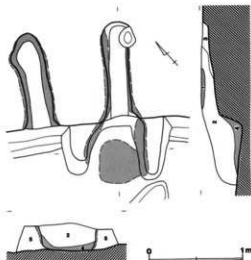


第101図 第4・5号住居跡

第4・5号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

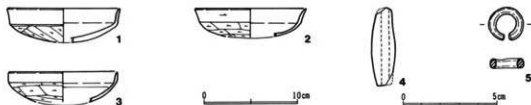




第102図 第4号住居跡カマド

第4号住居跡カマド土層説明

- 第1層：赤褐色土層（焼土層。）
- 第2層：暗灰褐色土層（鉄斑・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土ブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）



第103図 第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径(12.0)、器高(3.6) C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径(11.8) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一黒褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径(11.6) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
4	土 錘	A. 長さ4.1、幅1.3、重さ11g C. 外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
5	耳 飾	A. 直径1.8、厚さ0.5、重さ6g C. 銅地銀貼り。F. 完形。G. 覆土中。

第5号住居跡（第101図）

A地点の中央部南端に位置する。重複する第4号住居跡に住居の北側半分を切られているため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、南西～北東方向が4.63m・南東～北西方向は2.43mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。残存する各壁下には、幅15cm・深さ5cm程度の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体にやや軟弱である。ピットは、南側壁際より1箇所(P9)検出されているが、その性

格は不明である。

出土遺物は、住居の床面上や覆土中より、土器片が少量出土しただけである。



第104図 第5号住居跡出土遺物

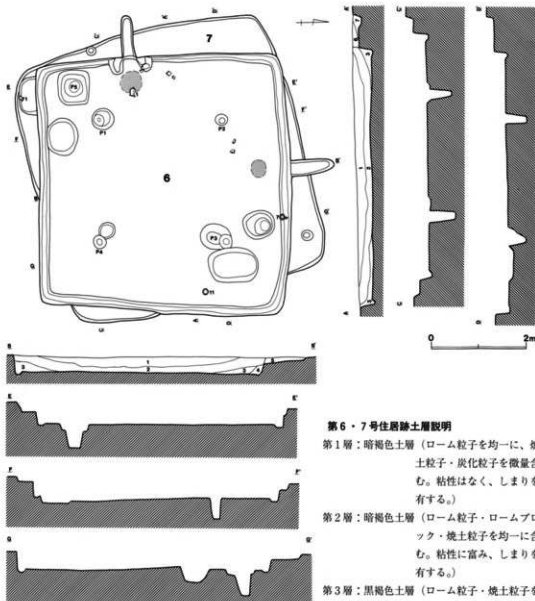
第5号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁径(13.8) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
2	高 坏	A. 残存高6.8 B. 粘土紐巻き上げ。C. 脚部及び脚端部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 脚柱部のみ。G. 覆土中。
3	小形 壺	A. 底径5.0 C. 胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。
4	小形 壺	A. 底径4.2 C. 胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 2/3。G. 床面上。
5	小形 壺	A. 底径6.2 C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡黄褐色、内一淡褐色。F. 1/2。G. 覆土中。

第6号住居跡(第105図)

A地点の中央部に位置し、重複する第7号住居跡を切っている。南側には第4号住居跡と第5号住居跡が、東側には第3号掘立柱建物跡が近接している。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は東西方向が5.47m・南北方向が5.40mある。主軸方位は、N-90°-Wをとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。各壁下には幅20cm前後・深さ5cm程度の壁溝が、途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅くしまっている。ピットは、8箇所検出されているが、本住居跡に伴うのはP1～P5の5箇所である。住居の対角線上に位置するP1～P4は、主柱穴と考えられるもので、深さは40cm～55cmある。P5は、カマド左側の南西側コーナー部に位置し、貯蔵穴と考えられる。形態は長方形を呈し、深さは50cmで2段に掘られている。カマドは、西側壁の中央やや南寄りに、壁に対してほぼ直角に付設されている。北側壁の中央部に、旧カマドの煙道部や燃焼面の痕跡が見られることから、本カマドは作り替えられたものである。規模は、全長170cm程度・最大幅92cmを測る。袖は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築しているが、先端部はすでに崩壊している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、良く焼けている。燃焼面は、床面とほぼ同じ高さであるが、奥壁に向かってやや傾斜している。煙道部は、傾斜しながら直線的に壁外に84cm程延びている。

出土遺物は、カマド燃焼面上よりNo1の甕が、北東側壁際の床面上よりNo7とNo11の坏が出土している。この他の土器は、すべて覆土中から出土したものである。



第105図 第6・7号住居跡

第6・7号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

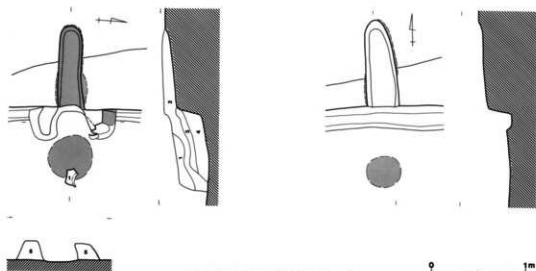
第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第6層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第7層：黒灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）





第106図 第6号住居跡カマド

第6号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（ロームブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

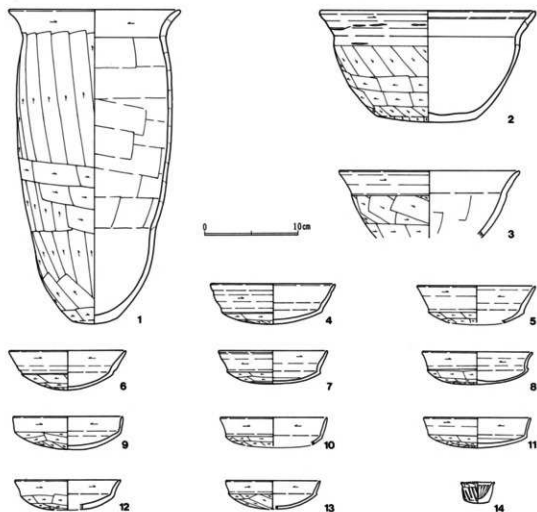
第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(18.2)、器高(33.8)、底径4.7 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面薙ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外—明橙褐色、内—暗褐色。F. 1/2。G. 床面上。H. 胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。外面は二次焼成により荒れている。
2	鉢	A. 口縁部径23.0、器高11.7、底径10.8 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 外面は二次焼成により荒れている。
3	鉢	A. 口縁部径(19.2) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面薙ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径13.2、器高4.3 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡黄褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径(12.6) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径(12.4)、器高4.2 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、黒色粒。E. 外—淡橙褐色、内—淡褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径11.6、器高3.5 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 完形。G. 床面付近。
8	坏	A. 口縁部径11.8、器高3.5 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 4/5。G. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径(11.6)、器高3.6 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 2/3。G. 覆土中。



第107図 第6号住居跡出土遺物

10	坏	A. 口縁部径11.4 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
11	坏	A. 口縁部径11.4、器高3.1 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—明橙褐色。F. 4/5。G. 床面上。
12	坏	A. 口縁部径(11.1)、器高3.1 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、片岩粒。E. 内外—暗橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
13	坏	A. 口縁部径(10.0)、器高3.0 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
14	ミニチュア	A. 口縁部径3.6、器高2.2、底径2.7 B. 手捏ね。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 外面に線刻あり。

第7号住居跡（第105図）

A地点の中央部に位置する。重複する第6号住居跡に遺構の大半を切られているため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は北西～南東方向が5.84m・北東～南西方向が5.86mある。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cm程度ある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際のためやや軟弱である。本住居跡に伴うピットは、南側コーナー部に位置するP6だけである。規模が大きな土壇状の形態を呈するものであり、貯蔵穴の可能性もあるが、深さは15cm程度と浅い。

出土遺物は、土器片が数片出土しただけであるが、南側コーナー部の壁際からNo1の小形丸底甕が出土している。



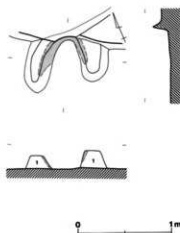
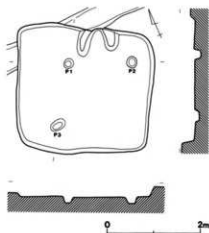
第108図 第7号住居跡出土遺物

第7号住居跡出土遺物観察表

1	小形丸底甕	A. 口縁部径8.0、器高7.1、底径3.7 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒、黑色粒。E. 外一明茶褐色、内一淡茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。H. 外面に黒斑あり。
---	-------	--

第8号住居跡（第109図）

A地点の北東側に位置し、重複する第11号土壇を切り、中世の第1号溝跡に切られている。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は北東～南西方向が2.76m・北西～南東方向が2.90mある。主軸方位は、N-27°-Eをとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦をなし、比較的軟弱である。ピットは、P1～P3の3箇所検出されている。いずれも20cm前後の小規模なもので、深さは8cm～13cmと浅い。配置的には主柱穴の可能性もあるが、明細は不



第109図 第8号住居跡

第8号住居跡カマド土層説明

第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

明である。カマドは、北東側壁の中央やや東寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長63cm・最大幅88cmを測る。袖は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、比較的良く焼けている。燃焼面は、平坦で床面とほぼ同じである。

出土遺物は、覆土中より土器片がごく少量出土しただけである。



第110図 第8号
住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(12.6) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
---	---	---

第9号住居跡 (第112図)

A地点の北東側に位置し、重複する第38号住居跡と第13号土壌を切っている。東側には第8号住居跡が、南側には第11号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は北東～南西方向が4.12m・北西～南東方向が4.22mある。主軸方位は、N-65°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に堅くしまっている。ピットは、2箇所検出されている。P1は、直径22cmの円形を呈し、深さは6cmと浅い小規模なものである。P2は、貯蔵穴と考えられるもので、東側コーナー部に位置する。深さは36cmあり、2段に掘られている。カマドは、北東側壁の中央やや南寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長180cm・最大幅102cmを測る。袖は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、比較的良く焼けている。燃焼面は、床面とほぼ同じ第1面とカマド第2層の第2面があり、第1面は平坦であるが、第2面は煙道部に向かって傾斜している。煙道部は、ほぼ水平で直線的に120cm程壁外に延びている。

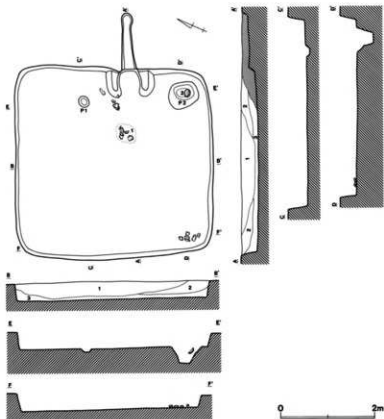
出土遺物は、カマド周辺や貯蔵穴内より、土器が少量出土している。土器以外では、南側コーナー部壁際の床面上より、長さ10cm前後の片岩が6個まとまって出土している。



第111図 第9号住居跡出土遺物

第9号住居跡出土遺物観察表

1	鉢	A.口縁部径20.4、器高7.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面木口状工具によるヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.2/3。G.床面付近。
2	鉢	A.口縁部径17.2、器高8.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。G.貯蔵穴内。H.外面に黒斑あり。
3	坏	A.口縁部径(11.6)、器高(3.0) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。

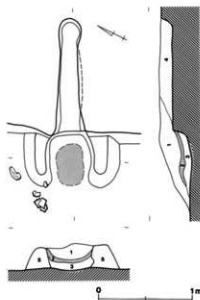


第9号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子・小石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第9号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗茶褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

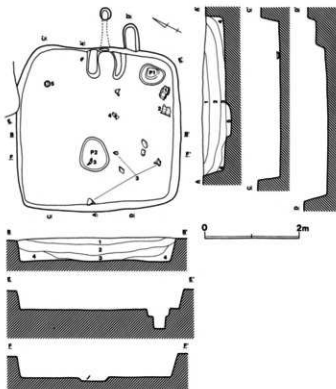
第4層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第112図 第9号住居跡

第10号住居跡（第113図）

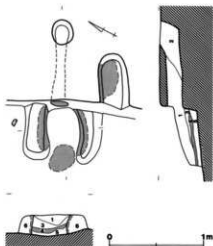
A地点の東側に位置する。本住居跡の北西側壁の一部は第11号住居跡と重複しているが、切り合い関係は明確にできなかった。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は北東～南西方向が3.52m・北西～南東方向が3.51mある。主軸方位は、N-62°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体に平坦で、堅くしまっている。ピットは、2箇所検出されている。P1は、東側コーナー部に位置し、貯蔵穴と考えられるものである。やや規模の大きな不整形を呈し、深さは42cmと深く2段に掘られている。P2は、深さ12cmで底面が平坦な土壌状の形態を呈するもので、覆土がロームブロックを均一に含む暗黄褐色土（第5層）の単一層で埋土の可能性もあり、床下土壌であった可能性が高い。カマドは、北東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。カマドの右側には、隣接して旧カマドの煙道部が見られ、本カマドは新しく作り替えられたものであることが解る。規模は、全長152cm・最大幅83cmを測る。袖は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を壁に直接貼り付けて構築している。燃烧部は、壁を掘り込まない形態で、比較的良く焼けている。燃烧面は、床面とほぼ同じ高さの第1面とカマド第4層の第2面があり、第1面は平坦であるが、第2面は高く煙道部に向かって緩やかに傾斜している。煙道部は、ほぼ水平で直線的に84cm程壁外に延びて立ち上がっている。



第113図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡土層説明

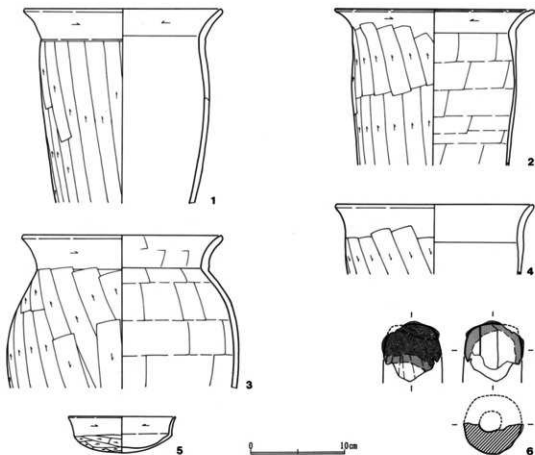
- 第1層：暗茶褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第10号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第5層：暗灰色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第114図 第10号住居跡カマド



第115図 第10号住居跡出土遺物

出土遺物は、床面上より甕(Na1・2)や坏(Na5)等の土器が置かれたような状態で出土し、覆土中からは羽口の破片が1片(Na6)出土している。

第10号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(21.2)、残存高20.5 B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 2/3。G. 床面上。
2	甕	A. 口縁部径(21.2)、残存高16.5 B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/3。G. 床面上。
3	甕	A. 口縁部径21.4、残存高16.1 B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。G. 床面上。
4	鉢	A. 口縁部径(21.0) B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一暗橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径11.4、器高3.8 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗橙褐色、内一明橙褐色。F. 完形。G. 床面上。
6	羽口	A. 残存長6.3、直径6.1 C. 外面ケズリの後ナデ。内面ナデ。D. 赤色粒。E. 外一暗茶褐色、内一橙褐色。F. 端部破片。G. 覆土中。H. 端部外面は加熱による発泡と溶解が著しく、黒色化している。

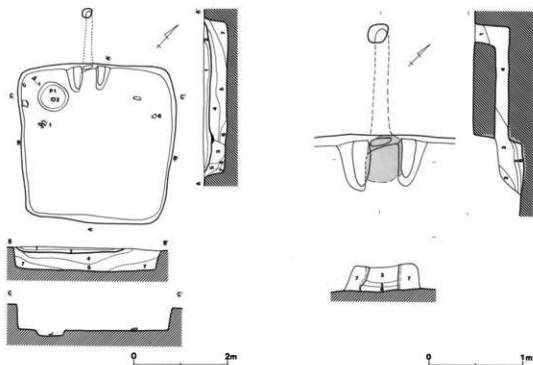
第11号住居跡(第116図)

A地点の東側に位置する。本住居跡の南側コーナー部は、第10号住居跡と重複しているが、切り合い関係は明確にできなかった。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は北西～南東方向と北東～南西方向はいずれも3.40mある。主軸方位は、N-42°-Wをとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦である。住居中央部は堅くしまっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、西側コーナー部に規模が大きく円形を呈する土壌状のもの(P1)が1箇所検出されている。深さは13cmと浅く、底面は平坦である。カマドは、北西側壁の中央やや南西寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長180cm・最大幅94cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃烧部は、壁を掘り込まない形態で、全体に良く焼けている。燃烧面は、床面より若干窪む第1面とカマド第5層の第2面があり、第2面は煙道部に向かって緩やかに傾斜している。煙道部は、ほぼ水平で直線的に118cm程壁外に延び、そこから垂直に立ち上がっている。本住居跡の覆土の堆積は、自然堆積の様相を示しているが、上層の第2層下端には炭化物層が全面に薄く堆積している。その上の第1層と第2層中には焼土粒子が顕著に見られることから、住居廃絶後の覆土埋没中の窪みを利用して、その中で火を焚いた何だかの行為が行われたことが伺える。

出土遺物は、覆土中を主体に土器や砥石(Na6)の破片が出土している。これらの大半は、上層の第1層と第2層から出土しており、覆土中で火を焚いた何だかの行為が行われた後に、投棄されたものと思われる。本住居跡に伴うと考えられる遺物は、P1内から出土したNa2の坏だけである。

第11号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(18.6)、推定高(32.7) B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
---	---	--



第116図 第11号住居跡

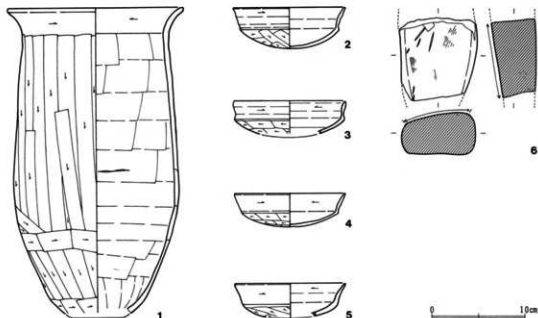
第11号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第7層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第11号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：黒褐色土層（焼土ブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

2	坏	A. 口縁径12.0、器高4.4 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 4/5。G. P 1内。
3	坏	A. 口縁径(11.8) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/4。G. 覆土中。



第117図 第11号住居跡出土遺物

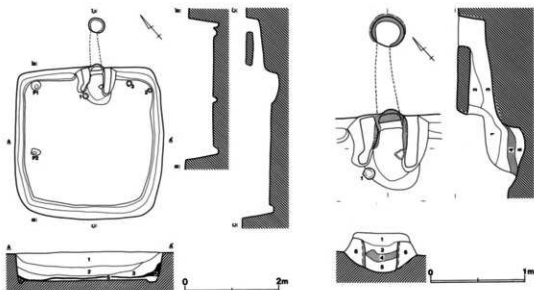
4	坏	A. 口縁部径11.8、器高3.5 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 完形。G. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径(11.8) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
6	砥石	A. 残存長8.8、最大幅8.2、厚さ4.6、重さ(571g) C. 表面は良く磨られており、刃物による傷が見られる。D. 砂岩。F. 約1/2。G. 覆土中。

第12号住居跡 (第118図)

A地点の中央部東寄りに位置し、東側には第10号住居跡と第11号住居跡が、北西側には第13号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は北東～南西方向が3.25m・北西～南東方向が3.15mある。主軸方位は、N-42°-Eをとる。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは58cmある。各壁下には幅15cm・深さ3cm～10cmの壁溝が、途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、2箇所検出されているが、いずれも小規模で深さが10cm程度の浅いものであり、その性格は不明である。カマドは、北東側壁の中央付近に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長184cm・最大幅88cmを測る。袖は、ロームブロックを微量含む暗灰色粘土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、全体に良く焼けている。燃焼面は、カマド第4層と第5層を埋め戻して、焚口から煙道部に向かって傾斜させている。煙道部は、やや傾斜して直線的に1m程壁外に延び、そこから垂直に立ち上がっている。本住居跡の覆土の堆積は、自然堆積の様相を示しているが、第5層上面には第4層の炭化物層が全面に薄く被覆している。上層の第3層中には焼土粒子が顕著に見られることから、第5層

堆積後に火を焚いたことが伺え、第10号住居跡の覆土中の炭化物層のあり方と類似している。

出土遺物は、比較的少量であるが、カマド周辺の床面上から完形に近い坏が3個体(Nq 1～3)出土している。



第118図 第12号住居跡

第12号住居跡土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：黒色土層（炭化物層。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第12号住居跡カマド土層説明

第1層：暗灰褐色土層（暗灰色粘土・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に、焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：赤褐色土層（焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6層：暗灰色粘土層（暗灰色粘土を主体に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）



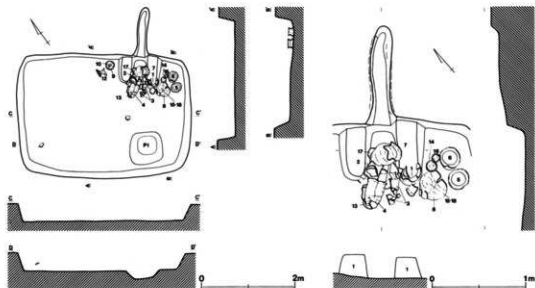
第119図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土物観察表

1	坏	A. 口縁部径11.2、器高3.3 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. はは完形。G. 床面上。
2	坏	A. 口縁部径11.0、器高3.5 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 完形。G. 床面上。
3	坏	A. 口縁部径11.2、器高3.1 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. はは完形。G. 床面上。H. 内面にタール状の黒色付着物あり。

第13号住居跡（第120図）

A地点の中央部北寄りに位置し、北西側には第22号住居跡と第23号住居跡が、南東側には第12号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈し、規模は北東～南西方向が2.66m・北西～南東方向が3.70mある。主軸方位は、N-35°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、1箇所検出されている。P1は、70cm×70cmのやや丸みをもつ方形を呈し、底面は平坦で深さは20cmある。カマドは、北東側壁の東側コーナー部寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長170cm・最大幅92cmを測る。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土（カマド第1層）を、壁に直接貼り付けて構築しており、右側袖の先端にはNo1の甕を伏せて補強に使っている。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、内寸は33cmと比較的狭い。燃焼面は、床面より若干低く、あまり良く焼けていない。中央部の左寄りの位置にNo17の坏を伏せて支脚に転用しており、その上にNo7の甕が1个体据えられている。その前にはNo2とNo3の甕が、横転した状態で重なって出土しているが、燃焼部の規模から見て、甕の3個掛けや縦2個掛けは不可能であるため、これらの甕はカマド天井部に置かれてい



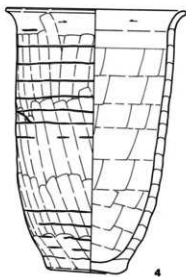
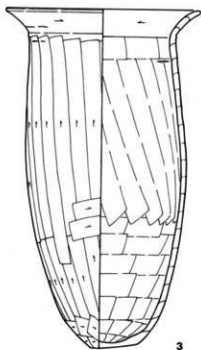
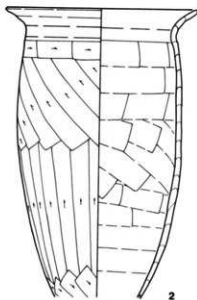
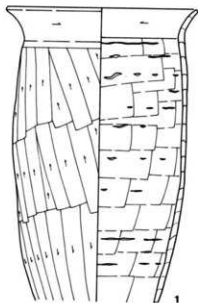
第120図 第13号住居跡

たものが、カマド天井部の崩壊に伴って中に落ち込んだものと推測される。煙道部は、やや傾斜しながら直線的に108cm壁外に延びている。

出土遺物は、カマド内やその周辺の床面上より完形に近い土器が比較的多く出土しており、その出土状態から見て、これらの土器はすべて住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられ、良好な一括資料と言える。カマド内には、支脚に転用されたNa17の坏やその上に据えられたNa7の甕及び袖の補強に使われたNa1の甕が見られ、焚口付近にはNa2～4の甕とNa13の坏が重なって出土している。カマド左側には、横転したNa12の高坏の側に、鉢(Na10)の上に多孔の小形瓶(Na9)を重ねて置いている。カマド右側の東側コーナー部には、坏(Na14・16)や台などに転用されたと推測される甕の上半部(Na5・6)が並べて置かれている。また、その側にはNa15とNa18の坏が正位で重ねられ、その上にNa8の甕の大きな破片が被せられている。

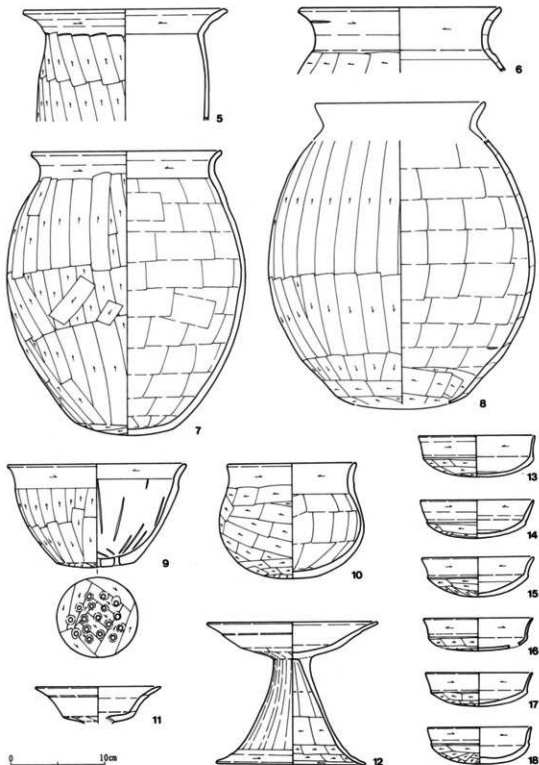
第13号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径20.2、器高31.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D.赤色粒、片岩粒。E.内外一淡褐色。F.4/5。G.カマド袖先端部補強。
2	甕	A.口縁部径20.2、器高30.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D.白色粒、片岩粒。E.内外一淡褐色。F.4/5。G.カマド内。
3	甕	A.口縁部径20.6、器高36.0、底径5.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。G.カマド内。
4	甕	A.口縁部径19.0、器高28.1、底径8.4 B.粘土紐輪積み。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面匳ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一明茶褐色、内一暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.底部外面木炭痕。内面に煤の付着あり。
5	甕	A.口縁部径21.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、片岩粒。E.内外一淡褐色。F.胴部上半のみ。G.床面上。
6	甕	A.口縁部径21.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、片岩粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部のみ。G.床面上。H.二次焼成により荒れている。
7	甕	A.口縁部径20.1、器高30.0、底径10.3 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一暗褐色。F.完形。G.カマド内。
8	甕	A.残存高28.0 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。G.床面上。H.胴部外面に黒斑あり。
9	小形瓶	A.口縁部径18.8、器高10.9、底径8.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.完形。G.No10の鉢の上に重なって出土。H.底部穿孔は多孔。
10	鉢	A.口縁部径13.6、器高12.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面匳ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一暗褐色。F.完形。G.床面上。
11	高坏	A.口縁部径(13.2) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.1/3。G.覆土中。
12	高坏	A.口縁部径18.0、器高15.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部及び坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.完形。G.床面上。
13	坏	A.口縁部径12.4、器高4.4 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。G.床面上。
14	坏	A.口縁部径12.0、器高4.0 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.完形。G.床面上。



0 10cm

第121図 第13号住居跡出土遺物 (1)



第122图 第13号住居跡出土遺物(2)

15	坏	A.口縁部径11.9、器高4.2 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外—暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.二次焼成により荒れている。
16	坏	A.口縁部径11.6、器高(3.5) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒。E.内外—淡橙褐色。F.2/3。G.床面上。
17	坏	A.口縁部径11.4、器高3.6 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒。E.内外—淡橙褐色。F.完形。G.床面上。
18	坏	A.口縁部径11.0、器高4.0 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡橙褐色。F.完形。G.床面上。H.底部外面に黒斑あり。

第14号住居跡 (第123図)

A地点の中央部やや東側寄りに位置し、南西側には中世の第1号井戸跡が近接している。住居跡の北東側壁の一部を第2号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈し、規模は北西—南東方向が4.85m・北東—南西方向が4.82mある。主軸方位は、N-22°-Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。各壁下には幅15cm・深さ5cm前後の壁溝が巡っているが、南側コーナー部の貯蔵穴(P5)付近は途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦である。住居中央部は堅くしまっているが、主柱穴より外側の周辺部はやや軟弱である。ビットは、6箇所検出されている。P1~P4

は、主柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に位置している。柱穴掘り方は比較的規模が大きく、深さはP1が50cmと深い、P2~P4は15cm前後で極端に浅く、中から土器が多く出土している。P5は、貯蔵穴と考えられるもので、南側コーナー部に位置している。65cm×54cmの長方形を呈し、深さは42cmで2段に掘られている。中からはNo2の完形の壺が正位で出土している。P6とP7は、いずれも小規模で深さ10cm前後の浅いものであり、その性格は不明である。炉は、主柱穴P1・P2間の中央に位置する。床面が焼けているだけの



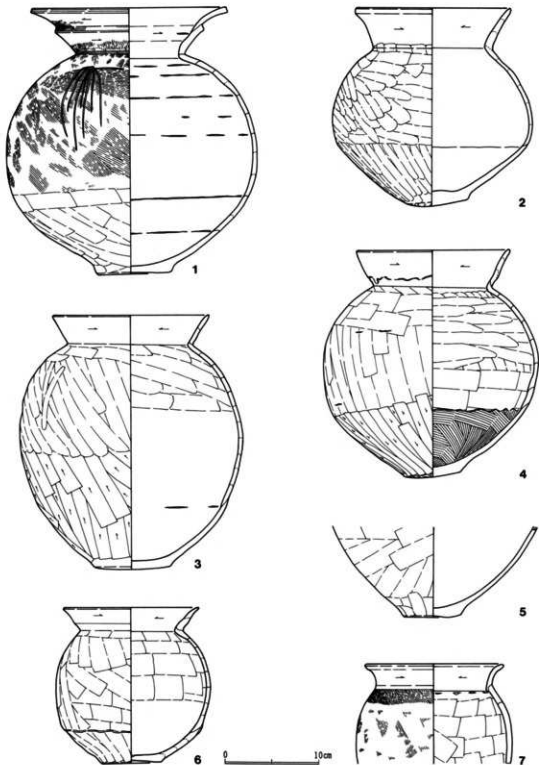
第123図 第14号住居跡

地床炉であるが、非常に良く焼けて硬化している。その南東側の住居中央部の床面上にも円形に焼けた箇所が見られるが、主炉ほどには焼けていない。

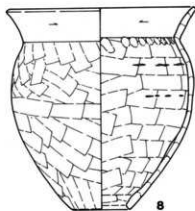
出土遺物は、住居内周辺部の床面上や主柱穴内及び貯蔵穴内より、壺・甕・大形甕・小形甕・高坏・台付鉢・碗・小形丸底甕などの完形に近い土器が多数出土しており、土器以外ではP4の北西側の床面上より鉄製の刀子(No22)が、南東側壁際中央の床面上より叩石(No23)が出土している。これらの出土遺物は、その出土状態から見て住居廃絶に伴って遺棄されたものと考えられ、良好な一括資料と言える。

第14号住居跡出土遺物観察表

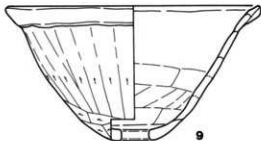
1	壺	A.口縁部径(20.8)、器高28.2、底径8.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面上半ハケの後ナデ、下半ケズリの後ナデ。胴部内面丁寧なナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.4/5。G.床面上。H.胴部外面寛幅文様あり。
2	壺	A.口縁部径16.4、器高20.9、底径6.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面丁寧なナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.外面に黒斑あり。
3	甕	A.口縁部径16.6、器高27.0、底径8.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ。内面ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、小石。E.外一淡茶褐色、内一明褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.外面は二次焼成により荒れている。
4	甕	A.口縁部径16.2、器高24.1、底径5.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ハケの後上半ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
5	甕	A.底径6.1 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、小石。E.外一赤茶褐色、内一暗褐色。F.1/4。G.床面上。
6	小形甕	A.口縁部径14.4、器高16.5、底径6.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面寛ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
7	小形甕	A.口縁部径(14.6) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面寛ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.床面上。
8	大形甕	A.口縁部径20.0、器高21.3、底径6.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.内外一茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
9	小形甕	A.口縁部径27.0、器高14.2、底径4.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面寛ナデ。D.片岩粒、小石。E.外一淡褐色、内一淡黄褐色。F.3/4。G.床面上。H.二次焼成を受けて内外面ともかなり荒れている。
10	小形甕	A.口縁部径22.8、器高11.3、底径6.3 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ハケ。底部外面ナデ。D.白色粒。E.外一淡茶褐色、内一茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.外面中位は荒れている。
11	高坏	A.口縁部径(19.0)、器高15.9 B.粘土紐積み上げ(脚部巻き上げ)。C.外面及び口縁部内面ナデ。脚部内面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明褐色。F.3/4。G.床面上。
12	高坏	A.口縁部径(16.0) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡褐色。F.1/2。G.床面上。
13	高坏	A.口縁部径17.2、器高15.9 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリ、内面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。



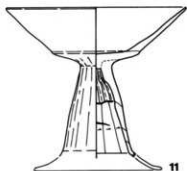
第124図 第14号住居跡出土遺物 (1)



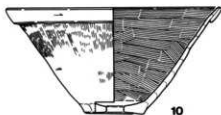
8



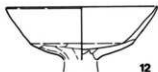
9



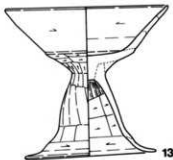
11



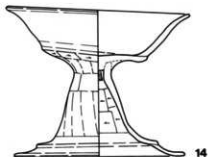
10



12



13



14

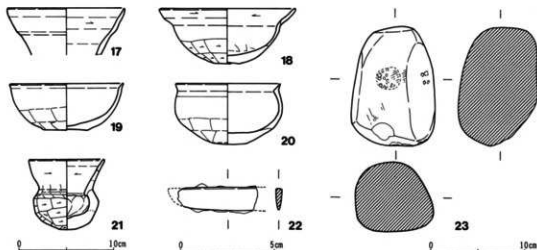


15



16

第125図 第14号住居跡出土遺物 (2)



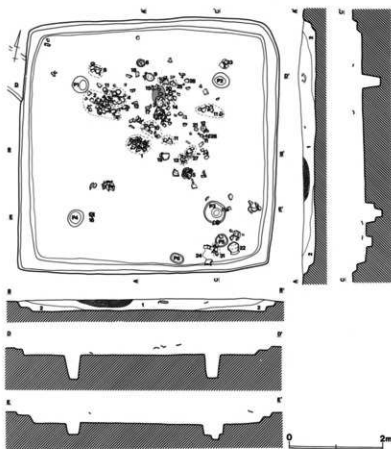
第126図 第14号住居跡出土遺物 (3)

14	高 坏	A.口縁部径19.4、器高15.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外—淡橙褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.坏部内面斑点状剥落顕著。
15	台付鉢	A.口縁部径12.1、器高18.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部及び台部外面ケズリの後ミガキ。胴部内面ナデ。台部内面ナデ。台端部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外—茶褐色。F.4/5。G.床面上。
16	台付鉢	A.口縁部径13.6、器高13.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部及び台部外面ケズリの後丁寧なナデ。胴部及び台部内面ナデ。台端部内外面ヨコナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外—茶褐色。F.3/4。G.床面上。
17	小形壺	A.口縁部径(12.4) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—暗橙褐色。F.1/2。G.覆土中。
18	碗	A.口縁部径14.4、器高6.0、底径2.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.内外—明橙褐色。F.2/3。G.床面上。
19	碗	A.口縁部径(10.0)、器高5.0、底径4.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外—暗橙褐色。F.2/3。G.床面上。
20	碗	A.口縁部径(11.0)、器高6.3、底径3.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面丁寧なナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.内外—茶褐色。F.2/3。G.床面上。
21	小形丸底壺	A.口縁部径(8.0)、器高7.5、底径1.5 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.外—淡褐色、内—淡茶褐色。F.3/4。G.床面上。
22	鉄製品 (刀子)	A.残存長4.3、幅1.2 B.背部は平坦をなし、刃部は先端に向かって細くなる。C.錆は進行し、地金内部に及んでいる。F.両端欠失。G.床面上。
23	叩 石	A.長さ12.5、幅9.0、厚さ8.5、重さ1455g C.表面中央部・側面・下端面の一部に敲打痕あり。上端面と表面の一部に擦痕あり。F.完形。G.床面上。

第15号住居跡（第127図）

B地点の北側に位置し、南側約16mには第16号住居跡がある。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は南北方向が5.40m・東西方向が5.52mある。主軸方位は、N-13°-Wをとる。壁は、2段になっており、床面から約8cm上で幅15cm～20cmの地山を掘り残した平坦なテラスをもつ。いずれの壁も、直線的で緩やかに傾斜して立ち上がっている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、6箇所検出されている。P1～P4は、支柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に位置している。いずれも直径40cm前後の円形を呈し、深さは25cm～50cmある。P5とP6は、住居の南東側に位置し、いずれも小規模で深さが10cm程度の浅いものであり、その性格は不明である。炉は、支柱穴P1・P2間中央のやや東寄りに位置する。床面が焼けて赤色化しているだけの地床炉で、硬化する程までには焼けていない。

出土遺物は、住居跡中央部の覆土中より多量の土器がまとまって出土している。これらの土器は、住居廃絶後の覆土埋没過程に投棄されたものであるが、多量の和泉式土器(第128・129図)に混じって、少量の五領式土器(第130図)が混在している。



第15号住居跡土層説明

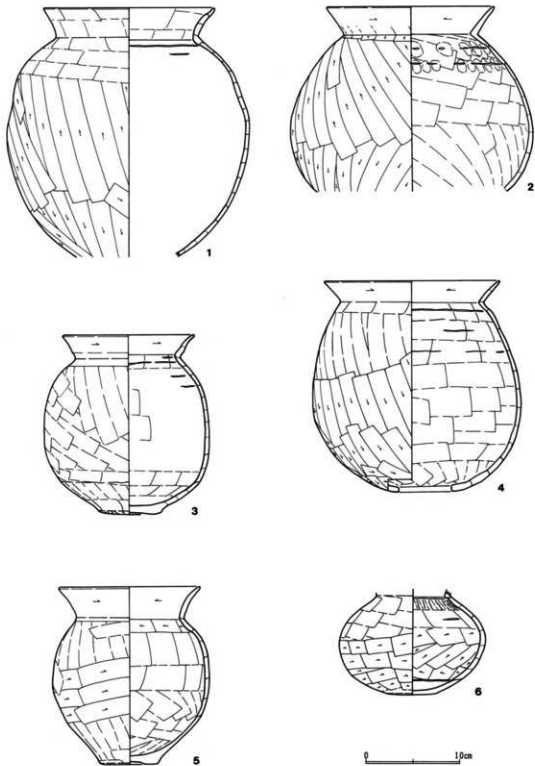
第1層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

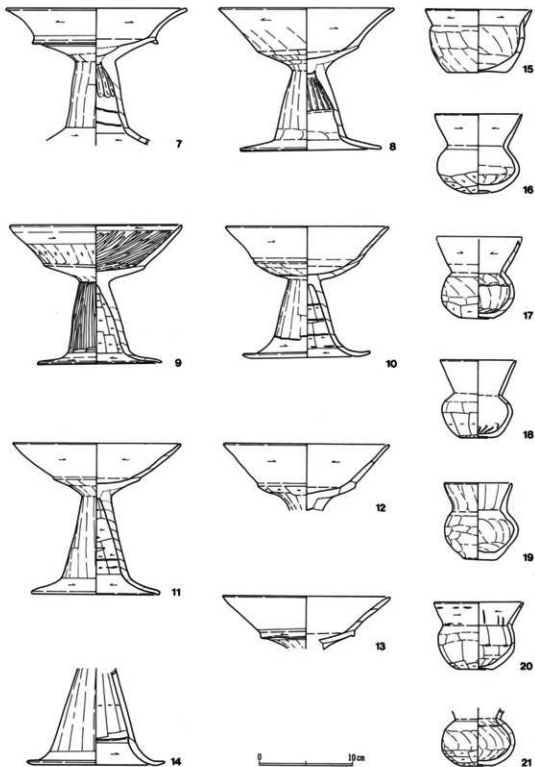
第127図 第15号住居跡

第15号住居跡出土遺物観察表

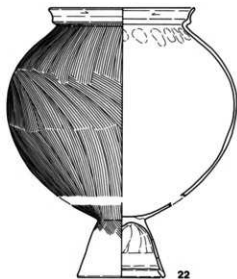
1	甕	A.口縁部径18.0、残存高26.4 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面寛ナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.2/3。G.覆土中。
2	甕	A.口縁部径17.6、残存高19.5 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
3	小形甕	A.口縁部径14.0、器高19.0、底径6.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.4/5。G.覆土中。
4	大形瓶	A.口縁部径18.6、器高22.3、底径5.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.4/5。G.覆土中。H.底部穿孔は焼成前。
5	小形甕	A.口縁部径14.0、器高18.7、底径6.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ、下半ケズリの後ナデ、中位ケズリ。内面ナデの後上端部ケズリ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
6	小形壺	A.残存高11.1、底径(4.8) B.粘土紐積み上げ。C.胴部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ケズリの後上半ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.2/3。G.覆土中。
7	高坏	A.口縁部径19.2、残存高14.5 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部及び脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.内外一暗橙褐色。F.2/3。G.覆土中。H.脚部内面シボリ目。
8	高坏	A.口縁部径18.6、器高15.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部及び脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.3/4。G.覆土中。H.脚部内面シボリ目。
9	高坏	A.口縁部径18.2、器高14.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ケズリの後上半ヨコナデ、内面ナデの後ミガキ。坏部内外面ナデ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗橙褐色。F.坏部完形、脚部1/2。G.覆土中。
10	高坏	A.口縁部径17.4、器高14.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部及び脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗橙褐色。F.坏部2/3。G.覆土中。H.坏部内面は荒れている。
11	高坏	A.口縁部径(17.8)、器高15.9 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。坏部及び脚部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
12	高坏	A.口縁部径(17.6) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
13	高坏	A.口縁部径17.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.坏部完形。G.覆土中。
14	高坏	A.残存高10.2、脚端部径14.6 B.粘土紐積み上げ。C.脚部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.3/4。G.覆土中。
15	碗	A.口縁部径11.2、器高6.7、底径6.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
16	小形丸底甕	A.口縁部径9.2、器高8.4、底径2.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一橙褐色。F.3/4。G.覆土中。
17	小形丸底甕	A.残存高8.4、底径3.3 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.2/3。G.覆土中。
18	小形丸底甕	A.口縁部径8.0、器高8.2、底径4.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
19	小形丸底甕	A.口縁部径(7.2)、器高8.1、底径3.4 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面寛ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗橙褐色。F.1/2。G.覆土中。



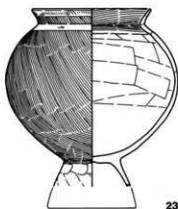
第128図 第15号住居跡出土遺物 (1)



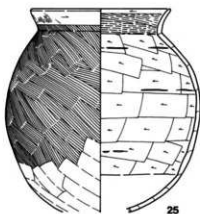
第129図 第15号住居跡出土遺物 (2)



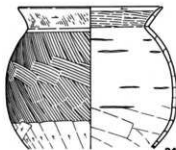
22



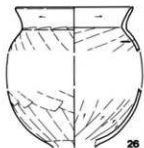
23



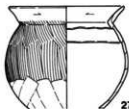
25



24



26



27



28



29



30



31



第130図 第15号住居跡出土遺物 (3)

20	小形丸底甕	A.口縁部径9.4、器高7.1、底径3.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.完形。G.覆土中。
21	小形丸底甕	A.残存高6.2、底径2.3 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外一暗橙褐色。F.胴部のみ。G.覆土中。
22	台付甕	A.口縁部径15.4、推定高28.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後上半ハケ、内面指ナデの後下半ナデ。D.片岩粒、赤色粒。E.外一淡黄褐色、内一黒褐色。F.1/2。G.覆土中。
23	台付甕	A.口縁部径(12.6)、残存高18.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面上半寛ナデ下半ナデ。台部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.覆土中。H.外面は二次焼成により荒れている。
24	台付甕	A.口縁部径15.2、残存高15.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面上半ハケ下半ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.3/4。G.覆土中。H.外面に煤の付着あり。
25	台付甕	A.口縁部径14.8、残存高21.5 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面上半ハケ下半ケズリの後ナデ、内面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.3/4。G.覆土中。H.外面は二次焼成により荒れている。
26	台付甕	A.口縁部径12.4 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
27	小形甕	A.口縁部径12.2、残存高10.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
28	台付甕	A.残存高7.1、台端部径10.2 B.粘土紐積み上げ。C.台部外面ハケの後ナデ、内面寛ナデの後下半ハケ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.覆土中。
29	台付甕	A.残存高6.1、台端部径9.4 B.粘土紐積み上げ。C.台部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.台部のみ。G.覆土中。
30	鉢	A.口縁部径(12.2)、残存高6.4 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
31	器台	A.口縁部径8.6、器高8.0、台端部径12.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ハケの後ミガキ、内面ミガキ。台部外面ハケの後ミガキ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.完形。G.覆土中。H.脚部穿孔は3箇所。

第16号住居跡 (第132図)

B地点の中央部に位置し、重複する第17号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。

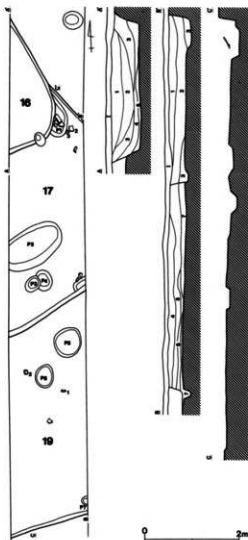


第131図 第16号
住居跡出土遺物

出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

第16号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径11.0、器高3.1 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.2/3。G.覆土中。
---	---	---



第132図 第16・17・19号住居跡

第16号住居跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第17・19号住居跡土層説明

<第17号住居跡>

- 第1層：暗灰色土層（ローム粒子・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗灰褐色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

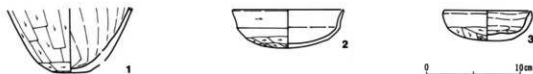
<第19号住居跡>

- 第4層：暗灰褐色土層（焼土粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗灰褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：暗灰褐色土層（炭化粒子を多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第7層：灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第17号住居跡（第132図）

B地点の中央部に位置し、住居跡の北側を第16号住居跡に切られ、南側は第19号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡東側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。南東側壁の壁下の一部には、幅20cm・深さ5cm程度の壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土をほぼ平坦に埋め戻した貼床式で、全体にやや軟弱である。ピットは、P1～P4の4箇所検出されているが、規模の大きな土坑状の形態を呈するP2は、本住居跡に伴うものではない。P1とP4は、深さ15cm前後の比較的浅いものであるが、P3は深さが40cmある。

出土遺物は、土器が少量出土しただけである。



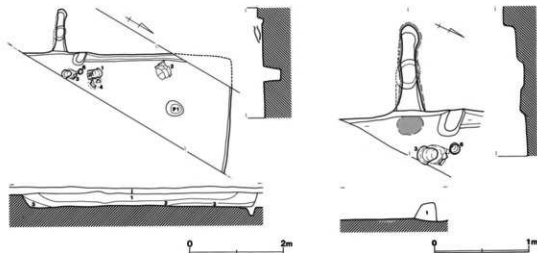
第133図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 残存高6.8、底径4.0 B. 粘土粒積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 3/4。G. P 1内。
2	坏	A. 口縁部径11.8、器高4.0 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/2。G. 床面上。
3	坏	A. 口縁部径9.2、器高3.2 C. 外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一淡茶褐色。F. 3/4。G. 床面上。

第18号住居跡 (第134図)

B地点の中央部に位置し、重複する第19号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居西側の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。調査区内で検出された南西側壁の壁下には、幅15cm・深さ5cm程度の壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、1箇所検出されている。P 1は、主柱穴と考えられるもの



第134図 第18号住居跡

第18号住居跡土層説明

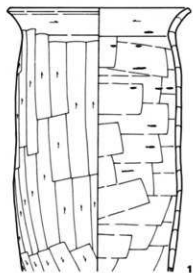
第1層：暗褐色土層（焼土粒子・マンガン塊を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

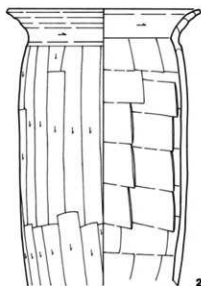
第3層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第18号住居跡カマド土層説明

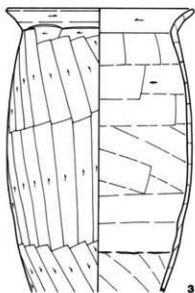
第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



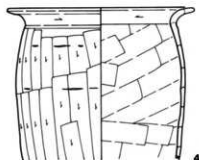
1



2



3



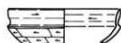
4



5



6



7

0 10cm

第135図 第18号住居跡出土遺物

で、おそらく住居の対角線上に位置するものと思われる。形態は、30cm×40cmの楕円形に近く、深さは38cmある。カマドは、南西側壁にあり、壁に対してほぼ直角に付設されている。袖は、右側袖の一部が残存しているだけで、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土(カマド第1層)を壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、良く焼けている。燃焼面は、床面とはほぼ同じで平坦である。煙道部は、若干傾斜しながら壁外に90cm程延びて立ち上がっている。出土遺物は、カマド周辺の床面上より甕・坏等の土器が出土している。

第18号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(19.4)、残存高27.8 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 3/4。G. 床面上。
2	甕	A. 口縁部径(20.6)、残存高29.3 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。G. 床面上。
3	甕	A. 口縁部径19.8、残存高30.0 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。G. 床面上。
4	甕	A. 口縁部径(19.8)、残存高16.1 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/4。G. 床面上。
5	坏	A. 口縁部径(13.0) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/5。G. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径11.8、器高4.2 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面上。
7	坏	A. 口縁部径(12.0) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/4。G. 覆土中。

第19号住居跡(第132図)

B地点の中央部に位置し、北側を第17号住居跡に南側を第18号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居中央部の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦であるがやや軟弱である。確認面からの深さは32cmある。ピットは、P5～P7の3箇所が検出されている。P5とP6は、いずれも直径が50cm～60cmで比較的規模が大きく、深さが7cmの浅いものである。P7は、南側壁際に位置し深さ15cmの小規模なものである。

出土遺物は、土器片が少量出土しただけである。



第136図 第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(20.0) B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一淡茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
---	---	--

2	坏	A. 口縁部径(12.2)、器高5.2 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径(10.8) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。

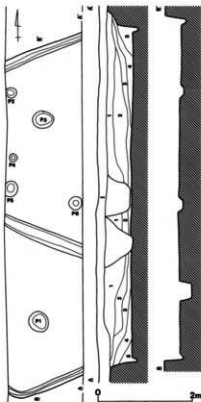
第20号住居跡 (第137図)

B地点の中央部に位置し、北側には第18号住居跡が近接している。住居跡の中央部を第10号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居中央部の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い方形か長方形を呈するものと思われる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。壁下には幅15cm・深さ10cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、6箇所検出されている。P1は、直径40cmの円形を呈し深さが25cmあり、位置的には主柱穴の可能性もある。P2～P6は、いずれも深さが10cm以下の浅いもので、その性格は不明である。

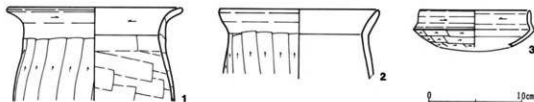
出土遺物は、覆土中を主体に土器片が少量出土しただけである。

第20号住居跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗黄褐色土層（ロームブロック・鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第4層：暗灰褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第137図 第20号住居跡



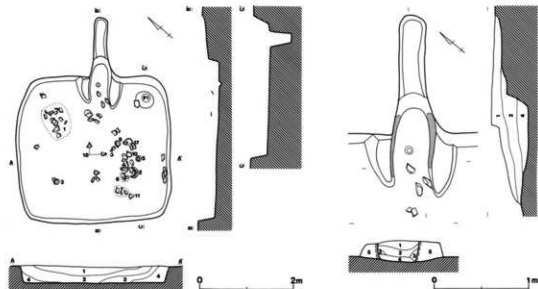
第138図 第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土物観察表

1	甕	A.口縁部径(18.6) B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面莚ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
2	甕	A.口縁部径(17.0) B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一明茶褐色、内一淡褐色。F.1/4。G.覆土中。
3	坏	A.口縁部径(11.6) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/4。G.覆土中。

第21号住居跡 (第139図)

A地点の中央部やや南東側寄りに位置し、中世の第5号掘立柱建物跡と重複している。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈し、規模は北東～南西が3.12m・北西～南東方向が3.30mある。主軸方位は、N-49°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦であ



第139図 第21号住居跡

第21号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（焼土粒子を多量に、炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：黒褐色土層（炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第21号住居跡カマド土層説明

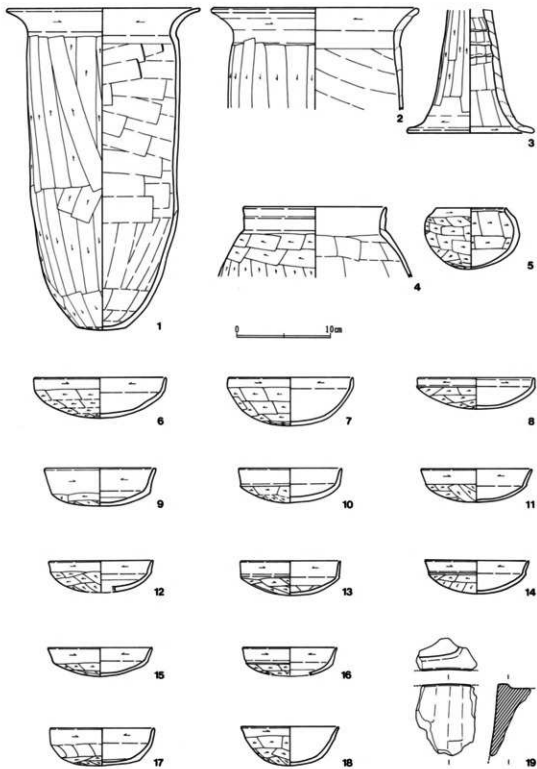
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
 第4層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

るが東側に向かって若干傾斜している。ピットは、1箇所検出されている。P1は、東側コーナー部に位置し、40cm×34cmの不整形形を呈し、深さは46cmある。カマドは、北東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長194cm・最大幅96cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。焼焼部は、壁を約45cm程掘り込んでい。焼焼面は、床面よりも5cm程度低く平坦である。ほぼ中央には、直径8cm・深さ4cmの小ピットがあり、支脚の据え穴と考えられる。煙道部は、焼焼部奥壁から82cmほど傾斜しながら直線的に延びている。

出土遺物は、土器が比較的多く出土している。No1とNo2の甕及びNo3の高坏脚部は、床面上から出土している。その他の土器と壁状の土製品(No19)は、住居中央部の覆土中からまとまって出土しており、住居廃絶後に投棄されたものである。土器以外では、南東側壁際の床面上より、長さ15cm前後の片岩が5個まとめて置かれたような状態で出土している。

第21号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径20.6、器高34.0、底径5.1 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面薙ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.4/5。G.床面上。
2	甕	A.口縁部径22.0 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.口縁部のみ。G.床面上。
3	高 坏	A.残存高13.1、脚端部径(13.4) B.粘土経巻き上げ。C.脚部外面ナデの後ケズリ、内面薙ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.床面上。
4	甕	A.口縁部径(15.2) B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面薙ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/4。G.覆土中。
5	小形無蓋甕	A.口縁部径7.4、器高6.5 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
6	坏	A.口縁部径(14.0)、器高4.3 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.覆土中。
7	坏	A.口縁部径13.0、器高5.1 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.覆土中。
8	坏	A.口縁部径12.4、器高3.3 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.覆土中。
9	坏	A.口縁部径11.8、器高4.0 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒、赤色粒。E.外一淡褐色、内一淡褐色。F.2/3。G.覆土中。
10	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.7 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.3/4。G.覆土中。
11	坏	A.口縁部径(11.8)、器高3.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
12	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.7 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。G.覆土中。
13	坏	A.口縁部径10.6、器高3.7 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面薙ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。G.覆土中。
14	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。G.覆土中。
15	坏	A.口縁部径(11.0)、器高3.0 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.1/4。G.覆土中。



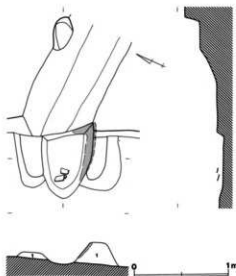
第140図 第21号住居跡出土遺物

16	坏	A. 口縁部径(10.0) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
17	坏	A. 口縁部径11.0、器高4.0 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
18	碗	A. 口縁部径10.4、器高4.1 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. はほぼ完形。G. 覆土中。H. 底部外面に黒斑あり。
19	土製品	A. 残存長7.6、残存幅6.5 C. 表面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。

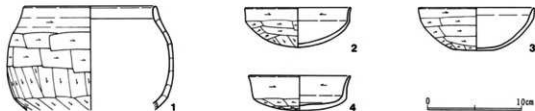
第22号住居跡（第143図）

A地点の中央部北端に位置し、重複する第23号住居跡を切り、中世の第1号溝跡に切られている。住居跡の北側コーナー部は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈するものと推測され、規模は北東～南西方向が4.16m・北西～南西方向が4.31mある。主軸方位は、N-65°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、6箇所検出されている。P1～P4は、主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に位置している。いずれも直径30cm前後の円形を呈し、深さは25cm～35cmある。P5は、東側コーナー部に位置する規模の大きなものであるが、深さは6cmと浅く底面は平坦である。P6は、P2の北側に隣接しているが、深さが7cmの浅いものである。カマドは、北東側壁の中央やや南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長192cm・最大幅112cmを測る。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土(カマド第1層)を、壁に直接貼り付けて構築している。燃烧部は、壁を掘り込まない形態で、あまり良く焼けていない。燃烧面は、床面よりも若干低く平坦である。煙道部は、その大半を第1号溝跡に破壊されているが、壁外に120cm程延びて上方に立ち上がっている。

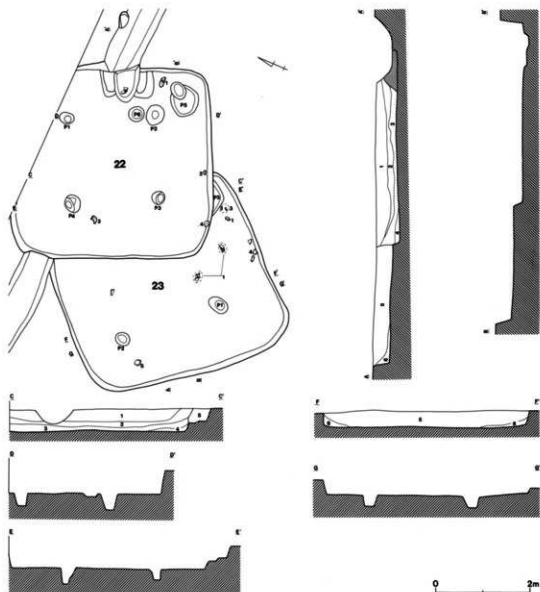
出土遺物は、土器が少量出土しただけである。



第141図 第22号住居跡カマド



第142図 第22号住居跡出土遺物



第143図 第22・23号住居跡

第22・23号住居跡土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：黒褐色土層（ローム粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

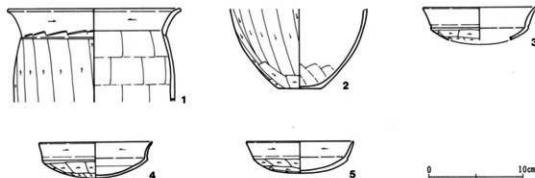
第22号住居跡出土遺物観察表

1	鉢	A.口縁部径(14.0)、残存高10.9 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒。E.内外一淡橙褐色。F.1/2。G.覆土中。
2	坏	A.口縁部径11.2、器高4.1 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明橙褐色。F.2/3。G.覆土中。
3	碗	A.口縁部径12.4、器高4.6、底径4.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.2/3。G.覆土中。
4	坏	A.口縁部径10.8、器高3.6 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.完形。G.覆土中。

第23号住居跡 (第143図)

A地点の中央部北端に位置する。住居跡の北東側を第22号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、コーナー部の丸みが強い方形を呈するものと思われる。規模は、北東～南西方向が4.40mあり、北西～南西方向は4mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは34cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦でしまっている。ビットは、3箇所検出されている。P1とP2は、その位置から主柱穴と考えられる。P3は、東側コーナー部に位置し、大半を第22号住居跡に切られているが、規模の大きな土塊状の形態を呈するものと思われる。深さは5cmあり、底面は平坦である。

出土遺物は、床面上や覆土中より土器が少量出土しただけである。



第144図 第23号住居跡出土遺物

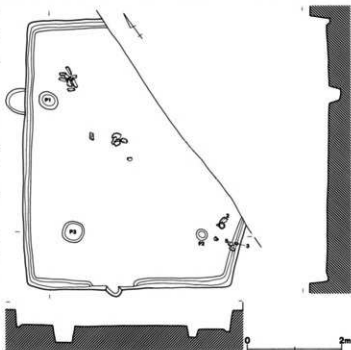
第23号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径18.2 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面庵ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.2/3。G.床面上。H.No2と同一個体。
2	甕	A.底径4.5 B.粘土経積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一暗橙褐色。F.1/4。G.覆土中。H.底部外面木葉痕あり。No1と同一個体。
3	坏	A.口縁部径(12.0) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明橙褐色。F.1/3。G.覆土中。
4	坏	A.口縁部径12.0、器高3.8 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.3/4。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部径11.4、器高3.4 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。H.器形はやや歪んでいる。

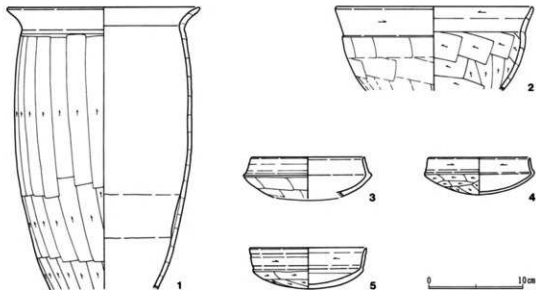
第24号住居跡（第145図）

A地点の南東端に位置し、北側には第1号住居跡が、北西側には第2号住居跡が近接している。

住居跡の東側コーナー部は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、長方形に近い形態を呈すると思われるが、南東側壁はかなり開いている。規模は、北東～南西方向が5.77m・北西～南東方向は4.76mまで測れる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。各壁下には幅10cm・深さ5cm程度の壁溝が巡っているが、南西側壁の中央付近は途切れている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦でしまっている。ピットは、3箇所検出



第145図 第24号住居跡



第146図 第24号住居跡出土遺物

されている。深さは、P 1 と P 2 が24cm、P 3 が36cmある。P 2 と P 3 は、その位置から主柱穴の可能性もあるが、明細は不明である。

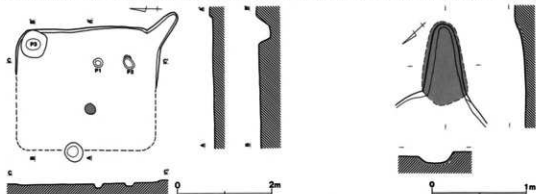
出土遺物は、床面上よりNo 2の鉢が、覆土中よりNo 1の甕やNo 3～No 5の坏などの土器が出土している。土器以外では、住居北側コーナー部寄りの床面上より、長さ20cm前後の片岩が8個まわって出土している。

第24号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(20.4)、残存高30.0 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面施ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
2	鉢	A. 口縁部径(21.0) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/3。G. 床面上。
3	坏	A. 口縁部径(12.0) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径(10.8)、器高3.9 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、片岩粒。E. 内外一明橙褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径(12.4)、器高4.3 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 完形。G. 覆土中。

第25号住居跡 (第147図)

A地点の西側に位置し、東側には第39号住居跡が近接している。第4号掘立柱建物跡と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。遺構の遺存状態が悪く、住居跡の西側半分はすでに削平されているため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、残存している部分から推測すると、コーナー部の丸み強い長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が3.05mあり、東西方向は1.30mまで測れるが、おそらく2.60m位あったものと思われる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは7cmある。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を薄く埋め戻した貼床式で、全体に平坦でしまっている。住居中央部の西側寄りには、床面が円形に焼けている部分が見られ、炉の可能性が高い。ピットは、3箇所検出されている。P 1 は、直径20cmの小規模な円形を呈し、深さは10cmある。P 2 は、26cm×20cmの楕円形に近い形態を呈し、深さは5cmと浅いものであるが、



第147図 第25号住居跡

ビットの縁が焼けている。P3は、北東側コーナー部に位置する比較的規模の大きなものであるが、住居跡の壁を一部切っており、本住居跡に伴うものではないと考えられる。カマドは、南東側コーナー部に付設されている。住居内には、袖の痕跡や天井部の崩壊土が全く見られず、また、壁外に位置する部分しか焼けていないことから、住居壁付近が焚き口で焼焼部は壁外に位置していたものと考えられる。規模は、全長88cm・最大幅45cmを測る。焼焼面は、床面とほとんど同じで非常に良く焼けている。遺物が何もないため本住居跡の時期は不明確であるが、覆土がB軽石を多量に含む暗灰色土であることから、B軽石降下直後の12世紀初頭頃の所産と推測される。

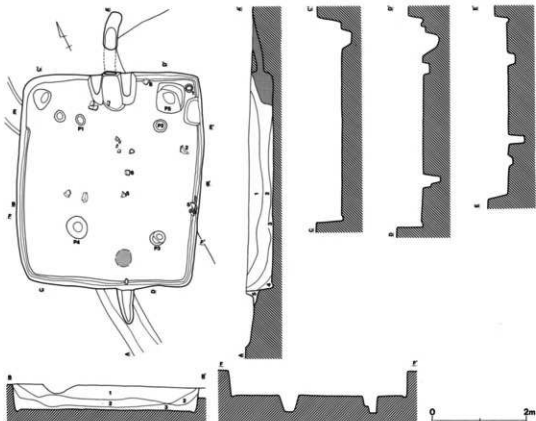
第26号住居跡（第148図）

A地点の中央部に位置し、重複する第27号住居跡を切り、上面を第3号溝跡に切られている。西側には第30号住居跡が近接している。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈し、規模は北東～南西方向が4.50m・北西～南東方向が3.92mある。主軸方位は、N-30°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは52cmある。各壁下には幅10cm・深さ5cm程度の壁溝が巡っているが、カマド左側の北側コーナー部には見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ビットは、7箇所検出されているが、本住居跡にともなうものはP1～P5の5箇所である。P1～P4は、主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に配置されている。いずれも小規模なもので、深さはP2が16cmと他に比べて浅いが、その他の主柱穴は35cm前後ある。P5は、貯蔵穴と考えられるもので、東側コーナー部に位置する。比較的規模の大きな方形を呈し、深さは34cmで2段に掘られている。カマドは、北東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。南西側壁の中央やや南東寄りの位置には、旧カマドの痕跡が見られ、本カマドが新しく作り替えられたものであることが解る。規模は、全長210cm・最大幅104cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。焼焼部は、壁を掘り込まない形態で、比較的良く焼けている。焼焼面は、床面より8cm低く、煙道部に向かってやや傾斜している。煙道部は、傾斜しながら壁外に130cm以上延びている。

出土遺物は、床面上や覆土中より土器が比較的多く出土している。土器以外では、カマド右側の覆土中より剣形模造品の破片が出土しているが、おそらく重複する和泉期の第27号住居跡から混入したものと思われる。

第26号住居跡出土遺物観察表

1	燹	A.口縁部径22.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.4/5。G.床面上。
2	燹	A.口縁部径(22.0) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.床面上。
3	燹	A.口縁部径(18.8) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒。E.外一茶褐色。内一暗茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
4	燹	A.口縁部径(14.2) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.白色粒。E.外一茶褐色。内一暗茶褐色。F.1/4。G.覆土中。

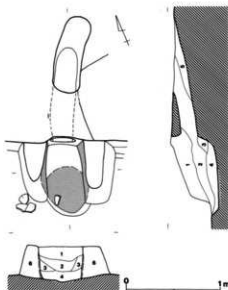


第26号住居跡土層説明

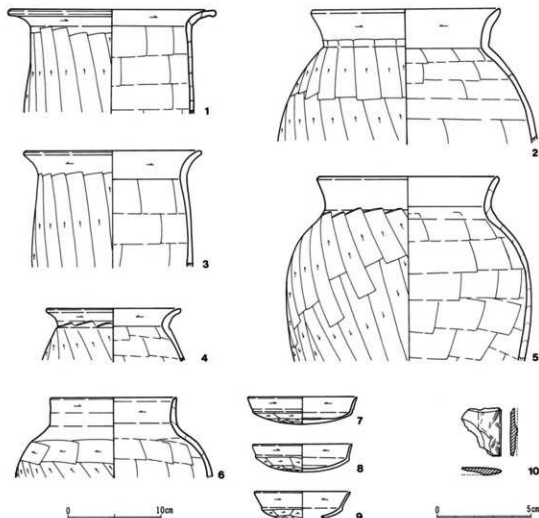
- 第1層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第4層：暗灰褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第5層：暗赤褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第26号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第3層：暗灰褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第4層：暗灰色土層（焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第148図 第26号住居跡

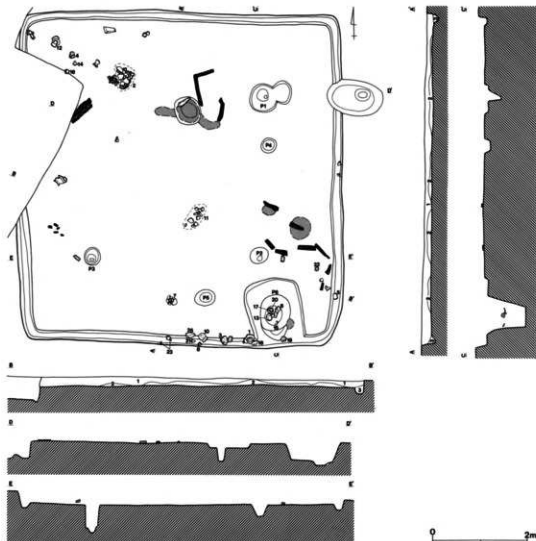


第149図 第26号住居跡出土遺物

5	甕	A. 口縁部径(19.4)、残存高19.5 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/2。G. 床面上。
6	甕	A. 口縁部径(13.4) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/2。G. 床面上。
7	坏	A. 口縁部径11.6、器高2.9 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/2。G. 覆土中。H. 外面に黒斑あり。
8	坏	A. 口縁部径10.6、器高2.9 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面上。
9	坏	A. 口縁部径(10.2) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
10	石製模造品	A. 残存長2.5、残存幅2.1、厚さ0.3 C. 表面研磨。D. 片岩。F. 破片。G. 覆土中。

第27号住居跡（第150図）

A地点の中央部に位置し、重複する第26号住居跡と第16号土壌に切られている。北東側には第22号住居跡と第23号住居跡が、南側には第6号住居跡と第7号住居跡が近接している。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は南北方向が7.10m・東西方向が7.00mある。主軸方位は、ほぼ真北を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。各壁下には幅20cm・深さ10cm程度の壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗



第150図 第27号住居跡

第27号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

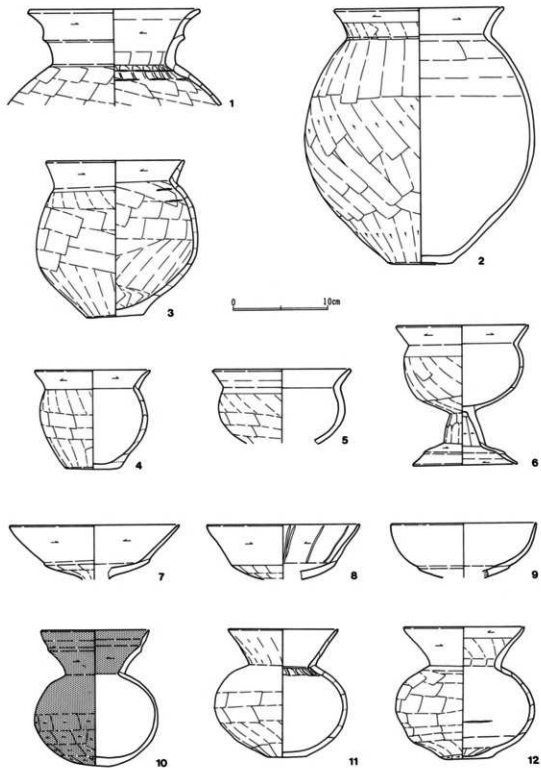
第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、6箇所検出されている。P1～P3は、主柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に位置している。直径30cm前後の円形を呈し、深さは24cm～58cmとややばらついている。P4は、直径32cmの円形を呈し、深さは12cmある。P5は、44cm×32cmの楕円形を呈し、深さは44cmある。P6は、貯蔵穴と考えられるもので、南東側コーナー部に位置している。上面は深さ10cmの規模の大きな長方形に近い形態に掘られており、その中心には長さ70cm前後の不整形の形態で深さ86cmの深い掘り込みを伴っている。炉は、住居中央部の北側寄りに位置し、北側主柱穴間のほぼ中央付近にあたるものと思われる。床面を若干掘り窪めた地皿炉で、60cm×54cmの円形に近い形態を呈している。長さ30cmの片岩を使用した炉石を伴うが、一般的な住居中央部側とは反対の住居壁側に置かれている。本住居跡は、床面が部分的に焼けていたり、炭化材が多く見られることから、焼失したものと考えられる。

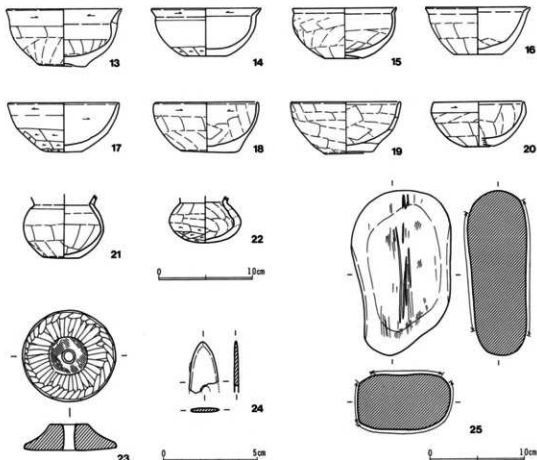
出土物は、床面上や貯蔵穴内より土器が多数出土しており、出土状態からは良好な一括資料と言える。土器以外では、鉄鏃(Na24)・石製紡錘車(Na23)・砥石(Na25)が出土している。また、北側壁際の床面上には、長さ25cm・幅15cmの平坦で大きな石が置かれており、台石として使用されたものと思われる。

第27号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径(18.2) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒、小石。E.内外一淡褐色。F.3/4。G.床面上。
2	甕	A.口縁部径(18.0)、器高27.1、底径6.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.2/3。G.床面上。H.外面は二次焼成により荒れている。
3	小形甕	A.口縁部径14.6、器高16.6、底径6.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒、小石。E.内外一暗褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.外面は二次焼成により荒れており、煤の付着あり。
4	小形甕	A.口縁部径(12.2)、器高10.5、底径5.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部及び底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一淡褐色。F.1/2。G.床面付近。H.外面は二次焼成により荒れている。
5	鉢	A.口縁部径(14.8) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/4。G.壁溝上。
6	台付鉢	A.口縁部径14.0、器高14.9 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面丁寧ナデ。台部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。台端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.2/3。G.貯蔵穴内。
7	高 坏	A.口縁部径(12.2)、器高10.5、底径5.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.3/4。G.床面上。
8	高 坏	A.口縁部径(16.2) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/3。G.壁溝上。H.口縁部内面に粗い放射状暗文を施す。
9	高 坏	A.口縁部径(15.4) B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
10	小形甕	A.口縁部径11.4、器高14.4、底径3.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一明褐色。F.完形。G.床面上。H.外面及び口縁部内面赤彩。
11	小形甕	A.口縁部径(11.6)、器高13.6、底径4.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部及び底部外面ケズリの後丁寧ナデ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.床面上。



第151图 第27号住居跡出土遺物 (1)



第152図 第27号住居跡出土遺物 (2)

12	小形壺	A. 口縁部径12.8、器高14.0、底径4.3 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部及び底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面上。
13	碗	A. 口縁部径12.2、器高6.1、底径5.1 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部及び底部外面ナデ、内面寛ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 3/4。G. 貯藏穴内。
14	碗	A. 口縁部径(11.6)、器高5.0、底径4.6 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下端ケズリ、内面寛ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗橙褐色。F. 1/2。G. 床面付近。
15	碗	A. 口縁部径(11.0)、器高5.3、底径4.0 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 外—淡茶褐色、内—暗褐色。F. 1/3。G. 貯藏穴内。
16	碗	A. 口縁部径(11.0)、器高5.0、底径5.2 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部及び底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外—淡橙褐色。F. 1/3。G. 床面付近。
17	碗	A. 口縁部径11.8、器高5.2、底径3.7 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡赤褐色。F. 完形。G. 貯藏穴内。
18	碗	A. 口縁部径11.0、器高5.3、底径6.0 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 3/4。G. 壁溝上。

19	碗	A.口縁部径11.6、器高5.5、底径5.1 B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.3/4。G.貯蔵穴内。
20	碗	A.口縁部径(9.6)、器高4.7、底径(3.0) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗赤褐色。F.1/4。G.貯蔵穴内。
21	小形丸底壺	A.残存高6.8、底径3.9 B.粘土紐積み上げ。C.頸部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.胴部のみ。G.壁溝内。
22	小形丸底壺	A.残存高5.0 B.粘土紐積み上げ。C.頸部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面指ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.胴部のみ。G.床面上。
23	石製紡錘車	A.直径5.0、高さ1.4、重さ42g C.表裏面とも研磨、側面ケズリ。D.碧玉 F.完形。G.壁溝内。
24	鉄 鍬	A.残存長2.7、幅1.8、厚さ0.2、重さ1.6g F.先端部のみ。G.覆土中。
25	砥 石	A.長さ17.5、幅10.5、厚さ6.3重さ1779g C.表裏面及び両側面は良く磨られており、表裏面には刃物による擦痕が見られる。D.砂岩。F.完形。G.床面上。

第28号住居跡（第153図）

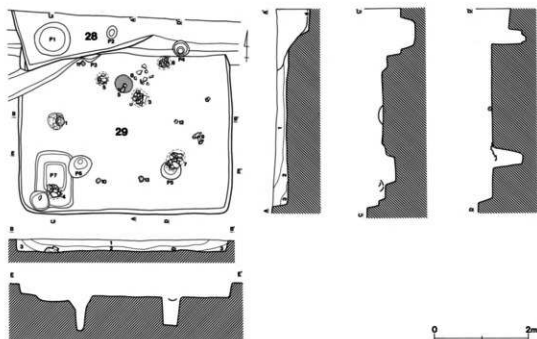
A地点の西側北端に位置し、第1号溝跡と第5号溝跡に切られ、第29号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の南西側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、遺存状態が悪いため明確ではないが、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは70cm程度はあったようである。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、2箇所検出されている。P1は、南西側コーナー部に位置し、直径70cmの規模の大きな円形を呈する。深さは30cmあり、底面は平坦である。P2は、南側壁際に位置し、直径20cm・深さ10cmの小規模なものである。いずれも性格は不明であるが、P1はその位置から貯蔵穴の可能性も考えられる。

出土遺物は、鬼高式土器の破片が数片出土しただけである。

第29号住居跡（第153図）

A地点の西側北端に位置し、南側には第30号住居跡が近接している。住居跡の北側を重複する第1号溝跡・第5号溝跡・第28号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、主柱穴の配置から推測すると、コーナー部の丸みが強い方形を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が4.56mあり、南北方向は3.56mまで測れる。主軸方位は、N-1°-Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、5箇所検出されている。P3～P6は、主柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に位置するものと思われる。形態は、直径40cm～50cmの円形を呈し、深さはいずれも65cm前後ある。P7は、貯蔵穴と考えられるもので、南西側コーナー部に位置し、南西端を後世のピットに切られている。平面形は、規模の大きな長方形を呈し、深さは30cmで2段に掘られている。炉は、住居中央部の北寄りに位置する。単に床面が焼けているだけの地床炉で、比較的良く焼けている。

出土遺物は、床面上や貯蔵穴内より壺・甕・高坏・小形丸底壺・碗等の土器が出土している。これらの土器は、住居の廃絶に伴ってそのまま遺棄されたものと考えられ、良好な一括資料と言える。



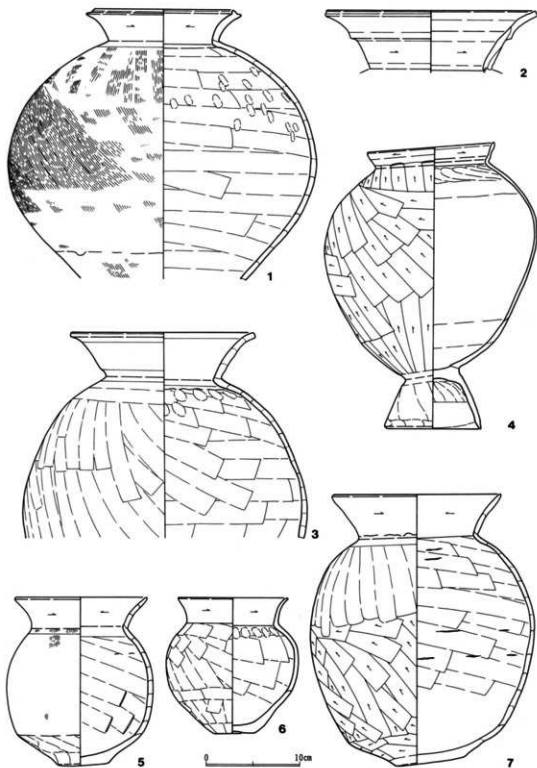
第153図 第28・29号住居跡

第28・29号住居跡土層説明

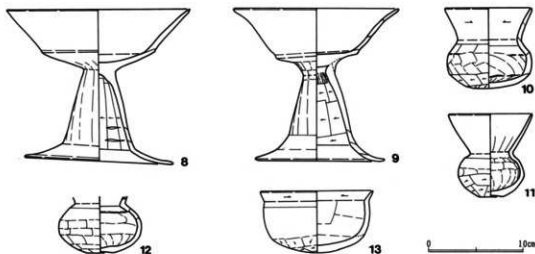
- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第29号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径14.6、残存高28.4 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.3/4。G.床面上。
2	壺	A.口縁部径(22.4) B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
3	壺	A.口縁部径19.6、残存高21.7 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ナデの後口唇部ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.床面上。
4	台付甕	A.口縁部径13.4、器高30.3 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。台部外面ナデ、内面指ナデの後下半ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一暗褐色。F.3/4。G.貯蔵穴内。
5	壺	A.口縁部径14.0、器高17.8、底径5.5 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.4/5。G.床面上。H.外面に黒斑あり。二次焼成により荒れている。
6	小形甕	A.口縁部径11.6、器高14.3、底径4.3 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.3/4。G.床面上。H.二次焼成により荒れている。
7	甕	A.口縁部径17.8、器高28.7、底径7.2 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡黄褐色。F.は完形。G.床面上。H.外面に黒斑あり。二次焼成により荒れている。



第154図 第29号住居跡出土遺物 (1)



第155図 第29号住居跡出土遺物 (2)

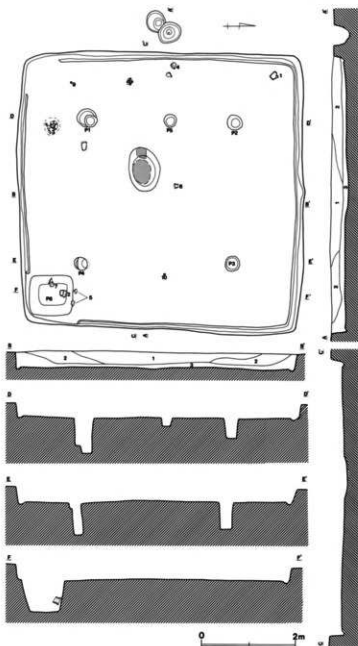
8	高 坏	A. 口縁部径(19.4)、器高16.3 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/2。G. 床面上。
9	高 坏	A. 口縁部径17.6、器高16.1 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
10	小形丸底甕	A. 口縁部径9.2、器高8.5 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗褐色。F. ほぼ完形。G. 床面上。
11	小形丸底甕	A. 口縁部径8.8、器高8.7、底径2.4 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面上。H. 胴部外面に黒斑あり。
12	小形丸底甕	A. 残存高6.0、底径2.8 B. 粘土紐積み上げ。C. 頸部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ。内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 胴部のみ。G. 床面上。
13	碗	A. 口縁部径12.0、器高6.5 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリの後ナデ。内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗橙褐色。F. 3/4。G. 覆土中。

第30号住居跡 (第156図)

A地点の西側に位置し、北側には第28号住居跡と第29号住居跡が、西側には第9号掘立柱建物跡が、東側には第26号住居跡と第27号住居跡が近接し、南側は第39号住居跡と接している。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は東西方向が6.00m・南北方向が6.10mある。主軸方位は、N-89°-Wをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cmある。各壁下には幅15cm弱・深さ5cm程度の壁溝が巡っているが、南西側と南東側の両コーナー部では途切れている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、6箇所検出されている。P1~P4は、主柱穴と考えられるもので、住居の対角線上に位置している。形態は、直径30cm前後の円形を呈し、深さは42cm~76cmある。P5は、主柱穴P1・P2間の中央やや北側寄りに位置している。直径25cmの円形を呈し、深さは28cmある。P6は、貯蔵穴と考えられるもので、南東側コーナー部に位置している。平面形は、92cm×85cmの

方形を呈し、深さは66cmで底面は平坦である。貯蔵穴内からは、No 2の小形甕とNo 7の小形丸底壺が出土している。炉は、住居中央部の西側寄りに位置する。床面を若干掘り窪めた地皿炉で、94cm×67cmの楕円形を呈し、非常に良く焼けている。

出土遺物は、住居内周辺部の床面上や貯蔵穴内より、甕 (No 1・2)・高坏 (No 3)・椀 (No 4～6)・小形丸底壺 (No 7・8) 等の土器が出土している。これらの土器は、その出土状態より住居の廃絶に伴ってそのまま遺棄されたものと考えられる。土器以外では、P 1 東側の床面上で長さ20cmの破損した片岩が出土し、周辺部の床面上から石製模造品が2個出土している。No 9は、剣形模造品に類似した形態のもので未製品の可能性もある。No 10は、片面に稜をもつ剣形模造品である。



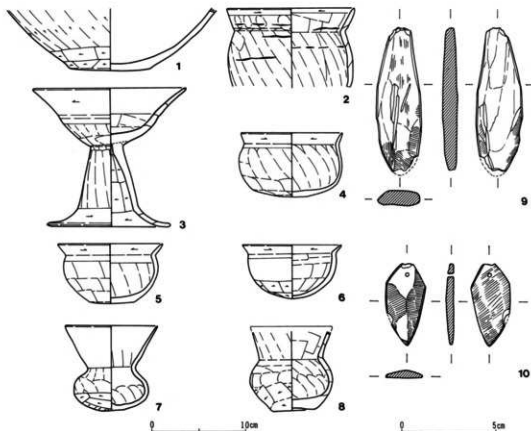
第156図 第30号住居跡

第30号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第30号住居跡出土物観察表

1	要	A. 残存高6.6、底径8.6 B. 粘土経積み上げ。C. 胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗灰褐色。F. 底部のみ。G. 床面付近。
---	---	--



第157図 第30号住居跡出土遺物

2	小形甕	A. 口縁部径13.6 B. 粘土紐輪積み。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一明茶褐色、内一暗褐色。F. 胴部上半のみ。G. 貯蔵穴内。
3	高 杯	A. 口縁部径16.2、器高14.7 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。杯部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. はほぼ完形。G. 床面上。
4	碗	A. 口縁部径10.8、器高6.8 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一黒褐色。F. はほぼ完形。G. 床面上。
5	碗	A. 口縁部径11.2、器高6.3、底径4.7 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部及び底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. はほぼ完形。G. 床面上。
6	碗	A. 口縁部径10.6、器高5.7 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
7	小形丸底甕	A. 口縁部径9.8、器高9.1、底径2.2 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. はほぼ完形。G. 貯蔵穴内。
8	小形丸底甕	A. 残存高8.6、底径4.6 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
9	石製模造品 (削形未製品)	A. 残存長7.6、最大幅2.5、厚さ0.8、重さ24g C. 表裏面の一部に研磨痕が施されている。D. 片岩。F. はほぼ完形。G. 床面上。H. 削形の未製品。
10	石製模造品 (削形)	A. 長さ4.3、最大幅2.1、厚さ0.4、重さ9g C. 表裏面及び側面研磨。D. 片岩。F. 完形。G. 床面上。H. 上端部に穿孔あり。

第31号住居跡（第158図）

A地点の北西端に位置し、重複する第5号溝跡に住居跡中央部の上面を切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われ、規模は北東～南西方向が4.04m・北西～南東方向は3.80mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、6箇所検出されている。P1～P3は、いずれも直径30cm弱の円形を呈し、深さが10cm程度の浅いものであるが、位置的には主柱穴の可能性もある。P4は、貯蔵穴と考えられるもので、南東側壁際のやや東側コーナー部寄りに位置している。74cm×66cmの方形ぎみの形態を呈し、深さは54cmあり、底面は平坦である。上面には板状の炭化材が見られ、大形瓶・高坏・碗等の土器や長さ10cm程度の棒状の自然石が出土している。北東側壁際のやや東側コーナー部寄りで、床面が一部焼けている箇所があるが、炉やカマドの痕跡ではなく、火災と関係するものではないかと思われる。本住居跡の床面直上には多量の焼土と炭化粒子や炭化材の破片が見られることから、本住居跡は火災によって焼失したものと考えられる。

出土遺物は、住居中央部の床面上や貯蔵穴内及びその周辺から、土器が多数出土している。これ



第158図 第31号住居跡

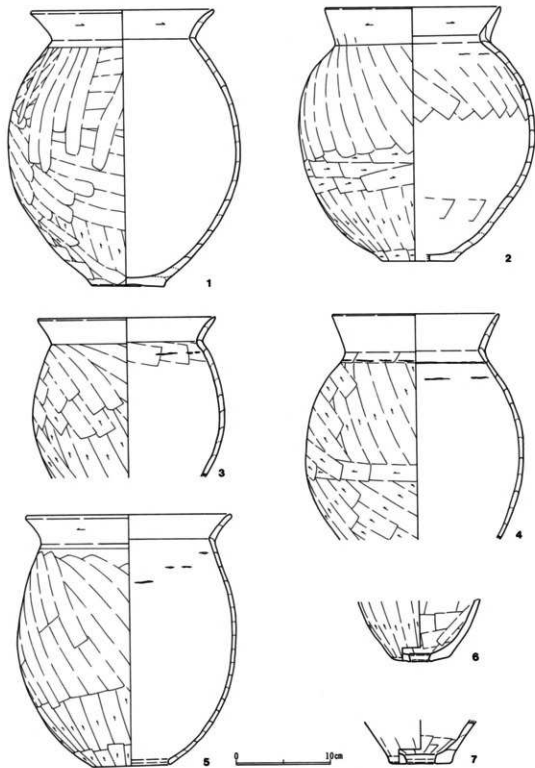
第31号住居跡土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（焼土ブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

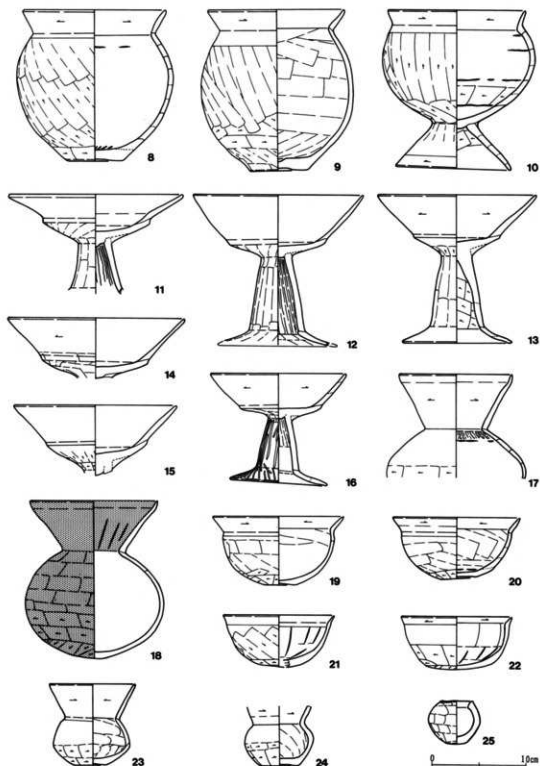
らの土器の多くは、その出土状態から見ておそらく住居の火災に伴って遺棄されたものと考えられ、良好な一括資料と言える。土器以外では、台石として使用されていたと思われる長さ30cmの扁平で大きな緑色片岩が、北東側壁に立て掛けられたような状態で出土している。

第31号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径19.4、器高29.4、底径7.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面丁寧なナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.胴部外面中に煤の付着が顕著に見られる。
2	甕	A.口縁部径18.6、器高27.0、底径(7.7) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一淡茶褐色。F.2/3。G.床面上。H.二次焼成を受けて荒れている。器形はかなり歪んでいる。
3	甕	A.口縁部径18.8、残存高17.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.上半のみ。G.床面上。H.外面は二次焼成を受けて荒れている。
4	甕	A.口縁部径(17.6)、残存高24.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.3/4。G.床面上。H.外面は二次焼成を受けて荒れている。
5	大形瓶	A.口縁部径21.8、器高26.7、底径8.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面丁寧なナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一茶褐色、内一暗褐色。F.ほぼ完形。G.貯蔵穴内。
6	小形瓶	A.残存高6.5、底径6.2、穿孔径2.1 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、小石。E.内外一淡黄褐色。F.底部のみ。G.床面上。
7	小形瓶	A.残存高4.6、底径6.8、穿孔径3.3 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒、小石。E.内外一暗橙褐色。F.1/2。G.床面上。
8	小形甕	A.口縁部径15.2、器高16.0、底径6.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一暗橙褐色。F.3/4。G.床面上。H.二次焼成を受けて荒れている。
9	小形甕	A.口縁部径14.6、器高17.1、底径6.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一暗褐色。F.ほぼ完形。G.床面付近。H.二次焼成を受けて荒れている。
10	台付鉢	A.口縁部径14.6、器高17.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。台部外面ナデ、内面ナデの後上半ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面付近(N04の直上)。H.外面に黒斑あり。
11	高坏	A.口縁部径18.4、残存高10.5 B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ。胴部内面シボリ目。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.2/3。G.覆土中。
12	高坏	A.口縁部径(18.0)、残存高16.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。坏部及び胴部外面ケズリの後丁寧な寛ナデ、胴部内面ナデ。脚端部内外面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.2/3。G.床面上。
13	高坏	A.口縁部径(16.8)、器高15.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部及び胴部外面ケズリの後ナデ、胴部内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡橙褐色。F.坏部1/3、胴部ほぼ完形。G.貯蔵穴上面。
14	高坏	A.口縁部径18.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.坏部完形。G.貯蔵穴内(N05の下)。
15	高坏	A.口縁部径17.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.坏部完形。G.床面付近。



第159図 第31号住居跡出土遺物 (1)



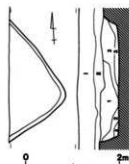
第160図 第31号住居跡出土遺物 (2)

16	高 坏	A. 口縁部径14.4、器高11.9 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。胴部外面ナデの後暗文風のミガキ、胴部内面ナデ。脚端部内外面丁寧ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほは完形。G. 床面上。
17	小 形 壺	A. 口縁部径(12.0) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 3/4。G. 床面上。
18	小 形 壺	A. 口縁部径13.6、器高16.8、底径3.2 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧ナデ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一暗褐色。F. ほは完形。G. 床面上。H. 外面及び口縁部内面赤彩。
19	碗	A. 口縁部径13.8、器高7.2、底径3.4 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面丁寧ナデの後下端ケズリ、内面丁寧ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほは完形。G. 南東側壁面。
20	碗	A. 口縁部径13.4、器高6.6、底径3.7 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面丁寧ナデの後下端ケズリ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 完形。G. 貯蔵穴上面。H. 底部外面摩滅顯著。
21	碗	A. 口縁部径11.8、器高5.4 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ、内面寛ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. ほは完形。G. 覆土中。H. 外面黒斑あり。
22	碗	A. 口縁部径(11.8)、器高5.6 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面寛ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
23	小形丸底壺	A. 口縁部径9.2、器高8.6、底径3.3 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. ほは完形。G. 床面上。H. 胴部外面黒斑あり。
24	小形丸底壺	A. 残存高6.3、底径4.2 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後丁寧ナデ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部のみ。G. 覆土中。
25	小形無頸壺	A. 口縁部径3.2、器高4.6、底径2.1 B. 不明。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. ほは完形。G. 覆土中。

第32号住居跡（第161図）

A地点の西端に位置し、南側には第33号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側コーナー部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦であるがやや軟弱である。

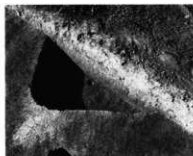
出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が数片出土しただけである。



第161図 第32号住居跡

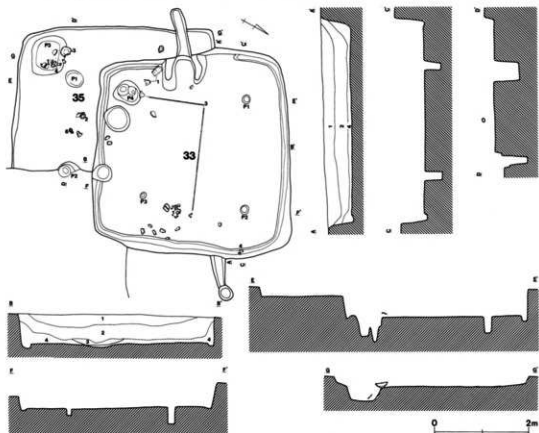
第32号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第33号住居跡(第162図)

A地点の南西端に位置し、北側には第32号住居跡が近接している。重複する第34号住居跡と第35号住居跡を切り、第7号掘立柱建物跡に切られている。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつやや歪んだ長方形を呈し、規模は南西～北東方向が4.40m・北西～南東方向が4.24mある。主軸方位は、N-118°-Wをとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは64cmある。各壁下には幅14cm・深さ5cm程度の壁溝が巡っているが、カマド右側で一部途切れている。床面は、ロームブロックを多量含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、住居内から6箇所検出されているが、本住居跡に伴うものはP1～P4の4箇所である。P1～P3は、主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に位置している。形態は、直径15cm～20cmの小規模な円形を呈し、深さは15cm～38cmある。P4は、カマド左側の南側コーナー部に位置



第162図 第33・35号住居跡

第33号住居跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

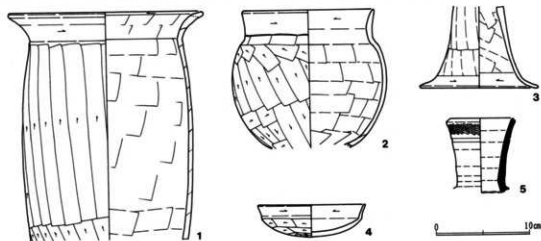
第4層：暗灰色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第163図 第33号住居跡カマド

する深さ20cmの比較的規模の大きなものであるが、深さ20cm～30cmの2つの小ビットを伴っている。カマドは、南西側壁の中央やや南東側寄りに位置し、壁に対して若干斜めに付設されている。北東側壁には旧カマドの煙道部が見られ、本カマドは新しく作り替えられたものであることが解る。規模は、全長170cm・最大幅94cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、全体に良く焼けている。燃焼面は、床面とほぼ同じであるが、若干煙道部に向かって傾斜している。煙道部は、やや傾斜しながら壁外に1m程延びて立ち上がっている。

出土遺物は、住居跡の床面上や覆土中より土器が出土している。土器以外では、北東側壁の壁際床面上から長さ15cm前後の扁平な片岩8個が、やや散らばって出土している。



第164図 第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰色土層（焼土ブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：暗灰色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

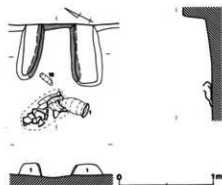
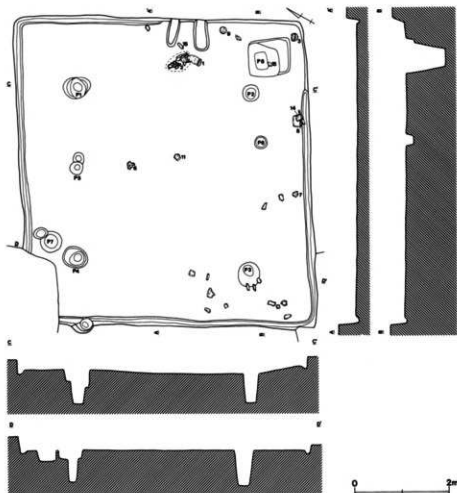
第33号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(20.7)、残存高24.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面遮ナデ。D.白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.床面上。
2	小形甕	A.口縁部径(14.0)、残存高14.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面遮ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
3	高 坏	A.残存高8.7、脚端部径12.6 B.粘土紐積み上げ。C.脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.床面上。
4	坏	A.口縁部径(11.4)、器高3.4 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.2/3。G.覆土中。
5	須恵器 長頸壺	A.口縁部径(7.5)、残存高7.9 B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデの後外面上端部6本歯の櫛描波状文。D.黒色粒、白色粒。E.内外一淡灰色。F.1/3。G.覆土中。H.湖西産。

第34号住居跡(第165図)

A地点の南西端に位置し、重複する第33号住居跡に住居跡の西側コーナー部を切られ、第35号住居跡と第37号住居跡を切っている。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は北東～南西方向が6.53m・北西～南東方向が6.16mある。主軸方位は、N-59°-Eをとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは33cmある。各壁下には幅15cm弱・深さ5cm程度の壁溝が巡っているが、カマド右側の東側コーナー部には見られない。床面は、ロームブロックを多量含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、8箇所検出されている。P1～P4は、主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に位置している。平面形は、直径35cm～55cmの円形や楕円形を呈し、深さは67cm～77cmある。P5とP6は、直径25cmの円形を呈し、深さが15cm～20cmの浅いもので、いずれも主柱穴間に位置している。P7は、P4北側の壁際に位置し、直径45cm・深さ20cm程度のものであるが、本住居跡には伴わない可能性が高い。P8は、貯蔵穴と考えられるもので、東側コーナー部に位置する。90cm×78cmの長方形を呈し、深さは80cmで2段に掘られている。中からはNo15の坏が出土している。カマドは、北東側壁の中央やや南東側寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、燃焼部の全長が67cm・最大幅が90cmを測る。袖は、ローム粒子やロームブロックを含む暗褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、壁面は良く焼けている。燃焼部内からは半切した土製支脚の破片(No16)が横転した状態で出土している。燃焼面は、明確ではないが底面が焼けていないことや支脚の据え穴が見られないことから、床面よりやや高い位置にあったと思われる。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

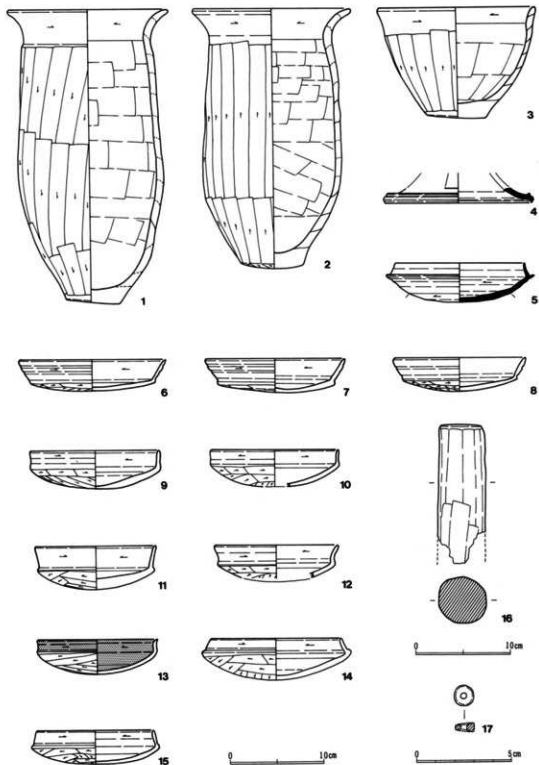
出土遺物は、土器が比較的多く出土している。このうちのNo1とNo2の甕は、いずれもカマド焚口前の床面上に横転した状態で出土しているが、入れ子状に重なっていることから、あるいはカマド焚口部の天井の補強に使われていたものが、天井部の崩壊により前に転落したものである可能性も考えられる。土器以外では、南東側壁際の床面上に長さ30cm・幅15cmの扁平で長方形を呈する大きな片岩が置かれており、おそらく台石として使用されたものと思われる。また、住居南側の床面上には、長さ15cm程度の片岩が6個散在し、また覆土中にも同じような片岩が複数見られる。その他には、覆土中より滑石製の白玉(No17)が1点出土している。



第34号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第165図 第34号住居跡



第166図 第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土遺物観察表

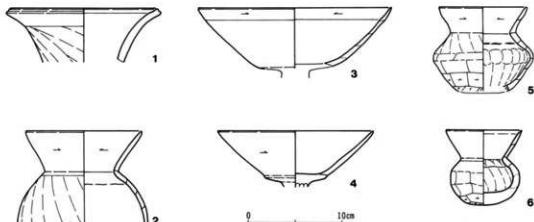
1	甕	A.口縁部径17.0、器高31.1、底径5.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
2	甕	A.口縁部径16.8、器高27.5、底径6.7 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.外面に黒斑あり。
3	鉢	A.口縁部径16.8、器高11.7、底径6.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
4	須恵器 高 坏	A.残存高1.6、脚端部径(15.4) B.ロクロ成形。C.脚部内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.1/6。G.覆土中。H.脚部に透窓あり。
5	須恵器 坏	A.口縁部径13.6、器高4.1 B.ロクロ成形。C.口縁部及び体部上半内外面回転ナデ。底部外面回転匱ケズリ、内面一定方向の指ナデ。D.白色粒。E.内外一暗灰色。F.1/2。G.覆土中。
6	坏	A.口縁部径15.6、器高3.3 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.3/4。G.床面上。
7	坏	A.口縁部径14.8、器高3.6 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.3/4。G.床面上。
8	坏	A.口縁部径(14.0)、器高3.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
9	坏	A.口縁部径13.6、器高4.0 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。G.床面上。H.外面に黒斑あり。
10	坏	A.口縁部径(13.4)、器高3.9 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
11	坏	A.口縁部径(12.8)、器高4.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.床面上。H.外面に黒斑あり。
12	坏	A.口縁部径(13.2) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
13	坏	A.口縁部径(12.8)、器高3.6 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒、黒色粒。E.内外一茶褐色。F.1/3。G.覆土中。H.口縁部外面及び内面赤彩。
14	坏	A.口縁部径(13.6)、器高4.3 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.2/3。G.台石上。
15	坏	A.口縁部径(12.4)、器高3.6 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.貯蔵穴内。
16	土製支脚	A.残存長14.6、幅5.1 C.外面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.2/3。G.カマド内。
17	白 玉	A.直径1.0、厚さ0.5、重さ0.9g C.表裏面未調整。側面研磨。D.滑石。F.完形。G.覆土中。

第35号住居跡 (第162図)

A地点の南西端に位置する。重複する第33号住居跡と第34号住居跡に住居跡の大半を切られているため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形あるいは長方形を呈するものと思われ、規模は北西～南東方向が4.40m・北東～南西方向は3.06mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦でやや軟弱である。ピットは、3箇所検出さ

れている。P1とP2は、支柱穴と考えられるもので、直径35cm程度の円形を呈し、深さはP1が50cm・P2が70cmある。P3は、貯蔵穴と考えられるもので、南側コーナー部に位置している。82cm×72cmのコーナー部が丸い長方形ぎみの形態を呈し、深さは30cmで底面は平坦である。

出土遺物は、貯蔵穴内及びその周辺の床面上や覆土中より、土器が少量出土しただけである。



第167図 第35号住居跡出土遺物

第35号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径(16.4) B.粘土経積み上げ。C.口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面薮ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/3。G.貯蔵穴内。
2	小形壺	A.口縁部径12.4 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.上半のみ。G.床面上。
3	高 坏	A.口縁部径20.6 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.4/5。G.床面上。
4	高 坏	A.口縁部径(16.6) B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/4。G.貯蔵穴内。
5	小形丸底壺	A.口縁部径(9.4)、残存高9.0 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
6	小形丸底壺	A.口縁部径(8.0)、器高8.0 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一黒褐色。F.3/4。G.覆土中。

第36号住居跡 (第169図)

A地点の南西端に位置し、重複する第37号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは55cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、堅くしまっている。カマドは、北東側壁の南側コーナー部寄りに位置し、壁に対してやや斜めに付設されている。規模は、全長188cm・最大幅130cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構



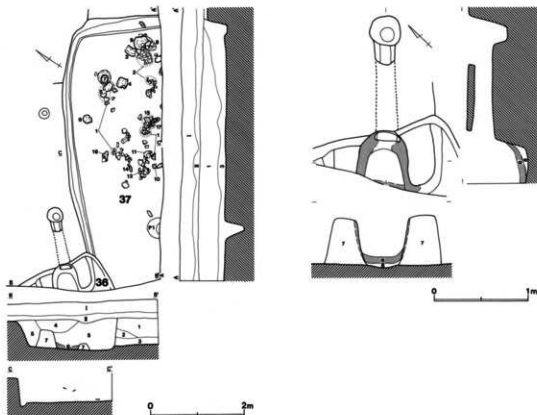
第168図 第36号住居跡出土遺物

築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、全体に良く焼けている。燃焼面(第6層)は、焚口部の床面から煙道部に向かって緩やかに傾斜している。煙道部は、ほぼ水平で壁外に120cm程延びて立ち上がっているが、その立ち上がり部分は1段深くなっている。

出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しただけである。

第36号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径(11.8) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.外—淡褐色、内—暗橙褐色。F.1/5。G.覆土中。
---	---	--



第169図 第36・37号住居跡

第36・37号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

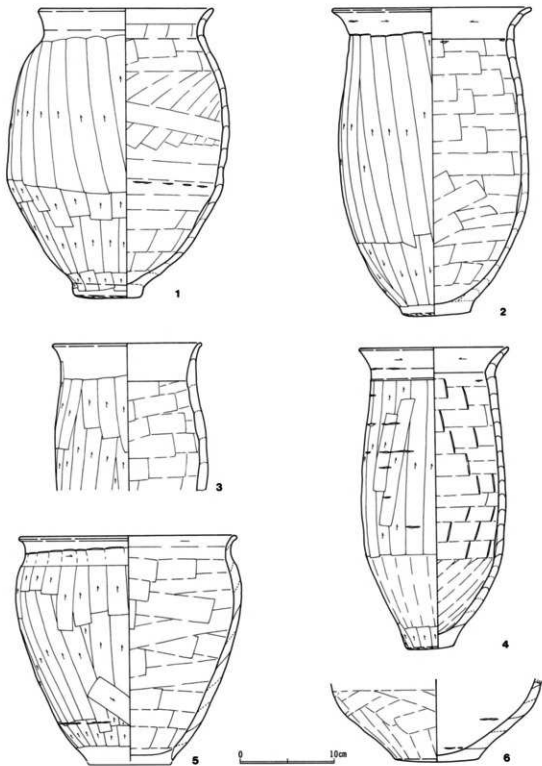
第37号住居跡（第169図）

A地点の南西端に位置し、重複する第34号住居跡と第36号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の北西側だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。壁下には幅15cm・深さ10cm程度の壁溝が通っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、1箇所検出されている。P1は、直径42cmの円形を呈し、深さは42cmあるが、その性格は不明である。カマドは、調査区内では検出されていないが、No2の甕やNo8の大形甕が北東側壁際の床面上から横転した状態で出土しており、それらの南東側の調査区外に存在する可能性が高い。

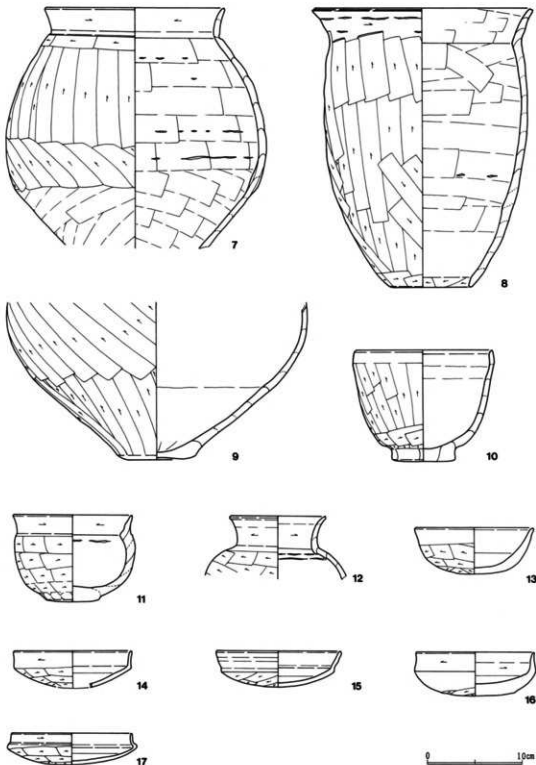
出土遺物は、床面から10cm程度浮いた覆土中を主体に、多くの土器が散乱したような状態で出土している。床面上から出土したものは、北東側壁際のNo2の甕やNo8の大形甕と住居中央部のNo11の鉢だけである。

第37号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁径18.6、器高30.8、底径7.0 B.粘土紐巻き上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡橙褐色、内一明茶褐色。F.3/4。G.覆土中。H.胴部下半に黒斑あり。
2	甕	A.口縁径21.0、器高32.9、底径7.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一茶褐色。F.4/5。G.床面上。
3	甕	A.口縁径15.8、残存高15.6 B.粘土紐輪積み。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.上半部のみ。G.覆土中。
4	甕	A.口縁径15.8、器高32.0、底径5.0 B.粘土紐巻き上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面上半匱ナデ、下半指ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
5	甕	A.口縁径(23.0)、残存高23.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面匱ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一明茶褐色、内一淡橙褐色。F.1/4。G.覆土中。H.外面に黒斑あり。
6	甕	A.底径8.8 B.粘土紐積み上げ。C.外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.底部のみ。G.覆土中。
7	甕	A.口縁径19.2、残存高25.5 B.粘土紐輪積み。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後上平ケズリ、内面匱ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一明茶褐色、内一茶褐色。F.4/5。G.覆土中。H.外面は二次焼成を受けている。外面黒斑あり。
8	大形甕	A.口縁径23.4、器高29.7、底径8.6 C.口縁部外面ヨコナデ、内面匱ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後匱ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外一暗茶褐色、内一茶褐色。F.4/5。G.床面上。
9	甕	A.底径8.2 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.外一茶褐色、内一淡褐色。F.3/4。G.No8上。H.外面に黒斑あり。
10	鉢	A.口縁径(14.4)、器高11.8、底径(6.6) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面弱いヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。H.胴部下半～底部は二次焼成により橙褐色化している。
11	鉢	A.口縁径12.6、器高9.2、底径5.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.2/3。G.床面上。



第170図 第37号住居跡出土遺物 (1)



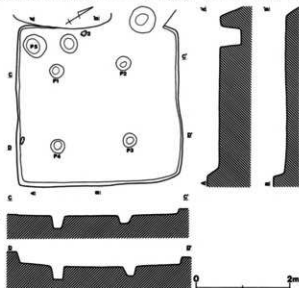
第171図 第37号住居跡出土遺物 (2)

12	壺	A. 口縁部径10.2 B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
13	碗	A. 口縁部径12.6、器高4.9 C. 口縁部内外面篋状工具によるヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。H. 内面に黒色付着物あり。
14	坏	A. 口縁部径(12.6) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
15	坏	A. 口縁部径13.4、器高3.9 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 覆土中。
16	坏	A. 口縁部径12.4、器高4.6 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
17	坏	A. 口縁部径12.7、器高3.3 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。

第38号住居跡 (第172図)

A地点の北東側に位置し、重複する第9号住居跡と第13号土壌に切られている。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は北西～南東方向が3.43m・北東～南西方向が3.54mある。主軸方位は、N-59°-Wをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ビットは、6箇所検出されているが、本住居跡に伴うものはP1～P5である。P1～P4は、主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に位置している。いずれも直径30cm程度の円形を呈し、深さは20cm～30cmある。P5は、西側コーナー部に位置し、50cm×44cmの不整円形を呈し、深さは40cmある。カマドは、すでに残存していなかったが、北西側壁際中央付近の床面上に焼土ブロックが顕著に見られることから、その位置に付設されていたものと考えられる。

出土遺物は、土器片が少量出土している。No2の坏は、北西側壁際の床面上から出土しており、確実に歩本住居跡に伴うものである。土器以外では、南西側壁際の床面上より長さ17cmの片岩が1個出土している。



第172 第38号住居跡



第173図 第38号住居跡出土遺物

第38号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 底部径(6.0) B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径12.0、器高4.2 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 4/5。G. 床面上。
3	鉢	A. 口縁部径(8.6) C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明橙褐色。F. 1/4。G. 覆土中。

第39号住居跡(第174図)

A地点の西側に位置し、重複する第40号住居跡を切っている。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は南西～北東方向が6.80m・南東～北西方向が6.45mある。主軸方位は、N-127°-Wをとる。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは58cmある。各壁下には幅10cm～20cm・深さ5cm～10cm程度の壁溝が途切れずに巡っているが、南東側壁中央部では、方形の張り出しが見られる。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、5箇所検出されている。P1～P4は、主柱穴と考えられるもので、ほぼ住居の対角線上に位置している。直径30cm～40cmの円形を呈し、深さは40cm～60cmある。P5は、南側コーナー部分に位置している。40cm×32cmの長方形ぎみの形態を呈し、深さは70cmとかなり深い。カマドは、南西側壁の中央やや南東寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長228cm・最大幅100cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土(カマド第7層)を、直接壁に貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、全体に良く焼けている。燃焼面は、床面とはほぼ同じで平坦である。煙道部は、若干傾斜しながら壁外に140cm程直線的に延びて立ち上がっており、立ち上がり部からはNo5の甕の破片が出土している。

出土遺物は、覆土中や床面上から土器が多く出土しているが、完形品は比較的少なく破片となっているものがほとんどである。

第39号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(20.6) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗橙褐色。F. 1/4。G. 床面上。
2	甕	A. 口縁部径(19.0) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
3	甕	A. 残存高24.1、底径(4.0) B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 1/2。G. 床面上。

第39・40号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

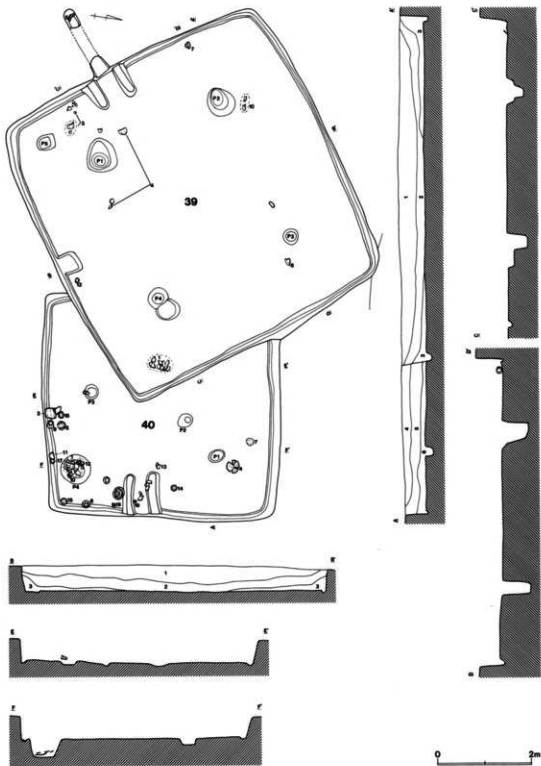
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

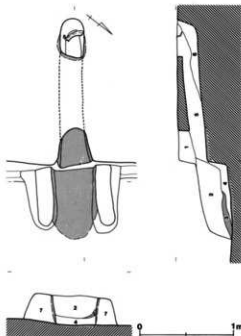
第4層：淡灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



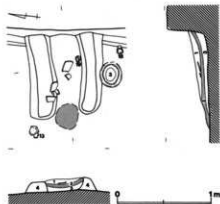
第174図 第39・40号住居跡



第175図 第39号住居跡カマド

第39号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：黒灰色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰色土層（焼土粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

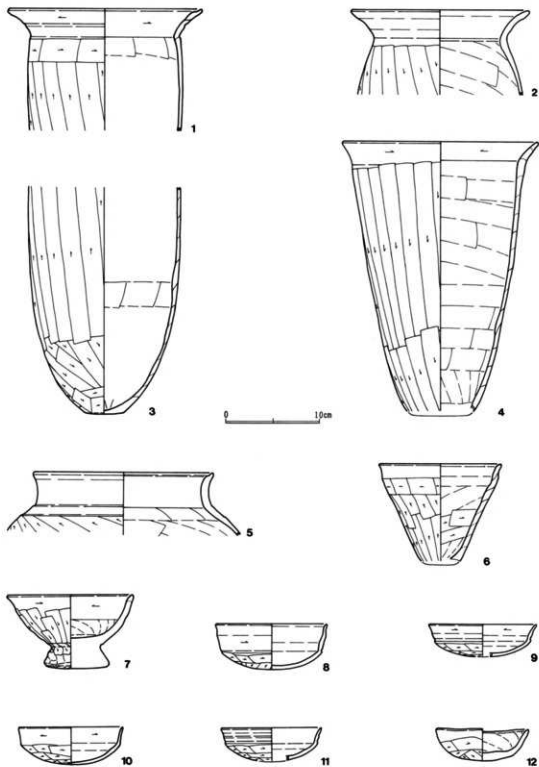


第176図 第40号住居跡カマド

第40号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第4層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

4	堖	A.口縁部径20.8、残存高28.6 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.1/2。G.床面上。
5	堖	A.口縁部径(19.0) B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.1/3。G.煙道部内。
6	鉢	A.口縁部径(13.0)、残存高10.3 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデの後中位ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一暗褐色。F.1/3。G.床面上。
7	台付 碗	A.口縁部径13.4、器高7.8、台端部径6.8 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面寛ナデ。台部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.完形。G.床面上。H.台部外面に黒斑あり。
8	坏	A.口縁部径11.8、器高4.8 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.3/4。G.覆土中。



第177図 第39号住居跡出土遺物

9	坏	A.口縁部径(11.4)、器高3.4 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/2。G.覆土中。
10	坏	A.口縁部径11.0、器高4.0 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
11	坏	A.口縁部径(10.6) C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一淡褐色。F.1/3。G.覆土中。
12	碗	A.口縁部径9.8、器高3.4 B.手捏ね。C.口縁部外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。

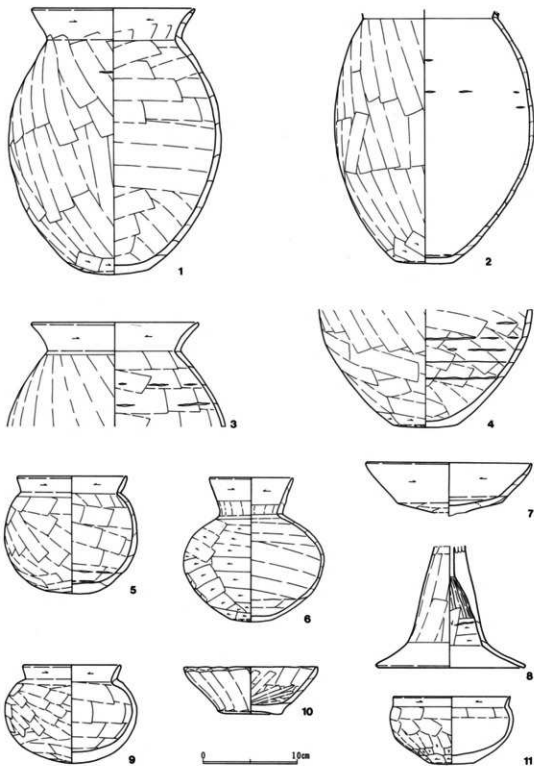
第40号住居跡(第174図)

A地点の西側に位置し、重複する第39号住居跡に切られている。平面形は、比較的整った方形を呈し、規模は東西方向が4.70m・南北方向が5.05mある。主軸方位は、N-83°-Eをとる。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは45cmある。各壁下には幅15cm・深さ5cm程度の壁溝が、途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、4箇所検出されている。P1～P3は、直径30cm前後の円形に近い形態を呈するもので、深さは10cm～20cm程度の浅いものである。P4は、貯蔵穴と考えられるもので、南東側コーナー部に位置している。直径62cmの規模の大きな円形を呈し、深さは60cmあり、中からは土器が多く出土している。カマドは、東側壁の中央やや南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、燃焼部の長さ90cm・最大幅82cmを測る。袖は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土(カマド第4層)を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、比較的良く焼けている。燃焼面(カマド第2層)は、床面より高く、焚口部から煙道部に向かって緩やかに傾斜している。煙道部は、削平されているため不明である。

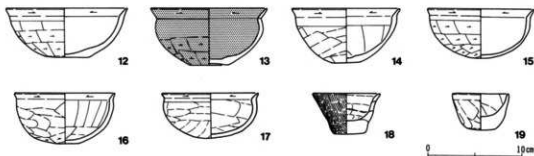
出土遺物は、住居周辺部及び壁際の床面上や貯蔵穴内より、多くの完形に近い土器が出土している。これらの土器は、覆土中から出土したNo8の高坏脚部を除いて、その出土状態より住居の廃絶に伴って遺棄されたものと考えられ、良好な一括資料と言える。

第40号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径17.2、器高28.2、底径6.6 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面匳ナデの後ヨコナデ。胴部外面匳ナデの後下端ケズリ、内面匳ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外一茶褐色、内一暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.貯蔵穴内。
2	甕	A.残存高、26.7底径6.0 B.粘土経積み上げ。C.胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。G.床面上。
3	甕	A.口縁部径17.8 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面匳ナデの後ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面匳ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.上半のみ。G.床面上。
4	甕	A.残存高12.5、底径6.8 B.粘土経積み上げ。C.胴部外面ケズリの後ナデ、内面匳ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一暗褐色。F.胴下半のみ。G.床面上。
5	小形甕	A.口縁部径11.6、器高12.5 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面匳ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一黒褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。H.外面は二次焼成により荒れている。
6	小形壺	A.口縁部径8.8、器高15.3、底径4.5 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面匳ナデの後ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.完形。G.床面上。



第178図 第40号住居跡出土遺物 (1)



第179図 第40号住居跡出土遺物(2)

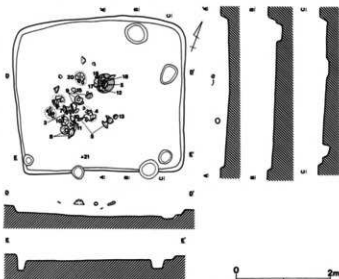
7	高 坏	A.口縁部径17.6 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.坏部完形。G.床面上。
8	高 坏	A.残存高12.9、脚端部径15.8 B.粘土紐巻き上げ。C.脚部外面ケズリの後ナデ、内面シボリの後ケズリ。脚端部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
9	鉢	A.口縁部径10.4、器高10.4 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
10	鉢	A.口縁部径14.0、器高5.0、底径6.9 B.粘土紐積み上げ。C.口唇部外面指押さえ。内外面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。G.貯蔵穴内。
11	碗	A.口縁部径12.4、器高7.1、底径4.7 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.3/4。G.覆土中。
12	碗	A.口縁部径13.4、器高5.2、底径4.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.完形。G.貯蔵穴。
13	碗	A.口縁部径(12.4)、器高6.0、底径4.2 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.2/3。G.床面上。H.内外面とも赤彩。外面に黒斑あり。
14	碗	A.口縁部径11.6、器高5.8、底径3.1 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
15	碗	A.口縁部径11.2、器高5.3 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.完形。G.床面上。
16	碗	A.口縁部径10.6、器高5.4、底径2.6 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.完形。G.床面上。
17	碗	A.口縁部径10.2、器高4.8 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.3/4。G.床面上。
18	ミニチュア	A.口縁部径7.2、器高4.3、底径3.4 B.粘土紐巻き上げ。C.外面ハケ状工具によるナデ、内面ナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.完形。G.床面上。
19	ミニチュア	A.口縁部径6.0、器高3.9、底径2.9 B.手捏ね。C.内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.ほぼ完形。G.カマド内。

第41号住居跡(第180図)

A地点の北西側に位置し、重複する第4号掘立柱建物跡の柱穴に、住居跡の一部を切られている。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形を呈し、規模は南北方向が3.25m・東西方向が3.68mある。主軸方向は明確ではないが、炉の位置から見るとN-23°-Wをとるものと思われる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。床面は、ロームブロックを多量に含む貼床式

で、比較的堅くしまっている。全体に平坦であるが、北西側に向かってやや傾斜している。ピットは、住居内から4箇所検出されているが、いずれも本住居跡に伴うものではなく、覆土中にB軽石を含む中世以降のものである。炉は、住居中央のやや北西側寄りに位置する。単に床面が円形に焼けているだけの地床炉で、硬化するほどには焼けていない。

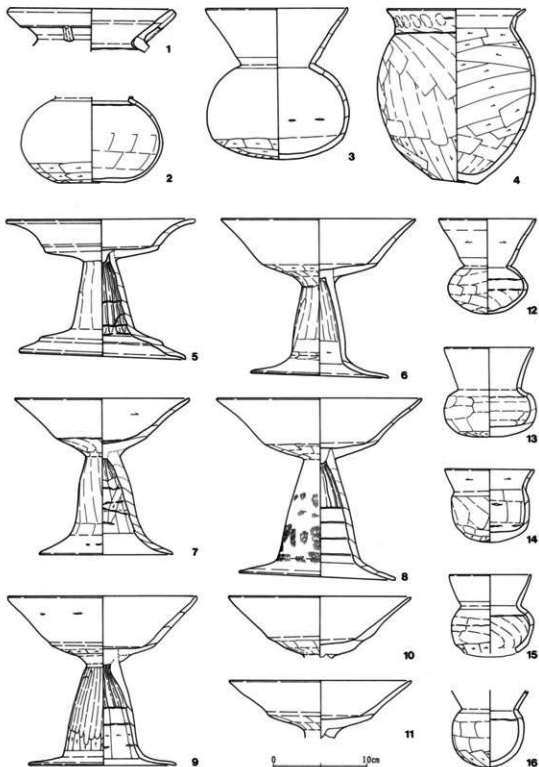
出土遺物は、住居中央部の覆土中より比較的多くの土器がまとまって出土している。これらの土器は、住居焼絶後の覆土埋没過程中に一括投棄されたものであるが、高坏と小形壺類が主体を占めており、同じく覆土中よりNo21の石製模造品が出土していることを考えると、祭祀行為に関係する土器群である可能性が高い。



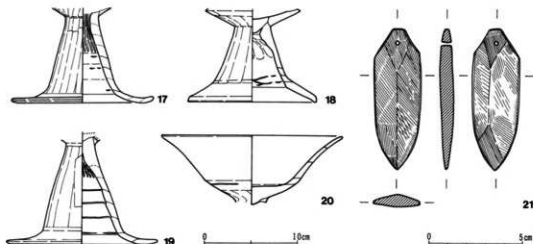
第180図 第41号住居跡

第41号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径(17.8) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡橙褐色。F.2/3。G.覆土中。
2	小形壺	A.残存高9.2、底径6.7 B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面施ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外—暗茶褐色。F.4/5。G.覆土中。
3	小形壺	A.口縁部径15.0、器高16.1 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.3/4。G.覆土中。
4	小形壺	A.口縁部径14.6、器高18.5、底径4.9 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデの後ケズリ。底部外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外—淡褐色、内—黒色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
5	高坏	A.口縁部径20.0、器高14.8 B.粘土紐積み上げ(脚柱部輪積み)。C.口縁部及び脚端部内外面丁寧なナデ。脚柱部外面ケズリの後丁寧なナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
6	高坏	A.口縁部径20.6、器高16.9 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部及び脚端部内外面ヨコナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデの後下半ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.3/4。G.覆土中。
7	高坏	A.口縁部径18.4、器高16.6 B.粘土紐積み上げ(脚柱部巻き上げ)。C.口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。
8	高坏	A.口縁部径21.8、器高19.3 B.粘土紐輪積み。C.口縁部及び脚端部内外面ナデ。坏部外面施ナデ。脚柱部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.4/5。G.覆土中。
9	高坏	A.口縁部径20.0、器高17.9 B.粘土紐輪積み。C.口縁部内外面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。脚柱部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—暗茶褐色。F.ほぼ完形。G.覆土中。



第181図 第41号住居跡出土遺物 (1)



第182図 第41号住居跡出土遺物(2)

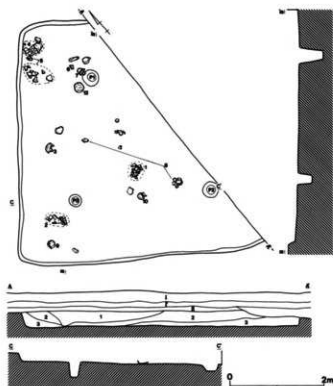
10	高 坏	A. 口縁部径19.4 B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 坏部はほぼ完形。G. 覆土中。
11	高 坏	A. 口縁部径19.4 B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 坏部3/4。G. 覆土中。
12	小形丸底甕	A. 口縁部径(10.2)、器高10.1 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面指ナデの後上半ナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
13	小形丸底甕	A. 口縁部径(9.4)、器高9.5 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。D. 胴部内外面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。E. 内外一淡褐色。F. 3/4。G. 覆土中。H. 底部外面に黒斑あり。
14	小形丸底甕	A. 口縁部径9.4、器高7.7 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面施ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
15	小形丸底甕	A. 口縁部径8.6、残存高8.4 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
16	小形丸底甕	A. 残存高8.2 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一黒褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
17	高 坏	A. 残存高10.1 B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ミガキ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 脚部4/5。G. 覆土中。
18	高 坏	A. 残存高9.8 B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 脚部3/4。G. 覆土中。
19	高 坏	A. 残存高11.4 B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。脚端部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 脚部1/4。G. 覆土中。
20	高 坏	A. 口縁部径19.2 B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 坏部はほぼ完形。G. 覆土中。
21	石製模造品	A. 長さ7.5、幅2.5、厚さ0.7、重さ21g C. 全面研磨。D. 片岩。F. 完形。G. 覆土中。H. 上端部に穿孔あり。

第42号住居跡(第183図)

C地点の南端に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、比較的整った方形を呈するものと思われ、規模は北東～南西

方向が5.18m・北西～南東方向は5.24mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む貼床式で、全体に平坦である。住居中央部は堅くしまっているが、周辺部はやや軟弱である。ピットは、P1～P3の3箇所が検出されている。これらは、ほぼ住居の対角線上に位置していることから、主柱穴と考えられる。いずれも直径30cm前後の円形を呈し、深さは14cm～50cmを測る。

出土遺物は、土器が比較的多く出土している。これらの土器は、住居中央部のものは床面直上から出土しているが、周辺部のものは住居の壁際に近くなるほどその出土位置が高くなっている。土器以外ではP1西側の床面上より、自然石の平坦面をそのまま利用した砥石(No12)が出土している。



第183図 第42号住居跡

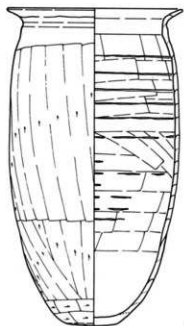
第42号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

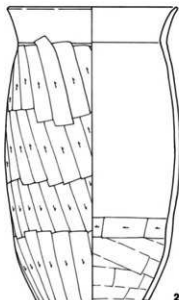


第42号住居跡出土遺物観察表

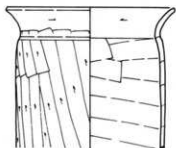
1	壺	A.口縁部径(18.6)、器高33.7、底径5.2 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリの後端なナデ、内面匱ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.床面上。H.外面に黒斑あり。
2	壺	A.口縁部径(18.0)、残存高31.3 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.1/4。G.覆土中。
3	壺	A.口縁部径17.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡茶褐色。F.1/2。G.床面付近。



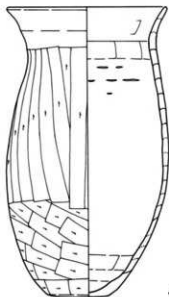
1



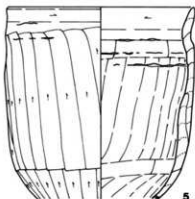
2



3



4



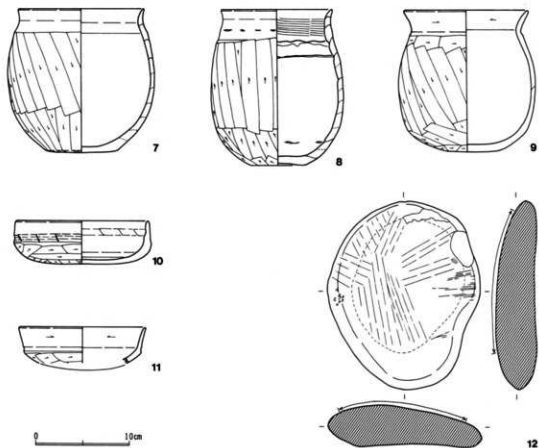
5

0 10cm



6

第184图 第42号住居跡出土遺物 (1)



第185図 第42号住居跡出土遺物 (2)

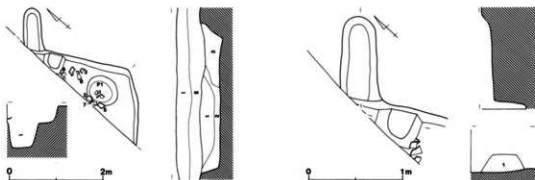
4	甕	A. 口縁部径17.0、器高30.9、底径6.4 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 4/5。G. 覆土中。H. 口縁部内外面は二次焼成により明橙褐色化している。
5	甕	A. 口縁部径18.4~21.0、残存高20.5 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面軟質ハケ状工具によるヨコナデ。胴部外面ケズリの後部分的なナデ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外—淡茶褐色、内—黒褐色。F. 3/4。G. 覆土中。H. 器形は歪んでいる。
6	須恵器 坏	A. 残存高1.9 B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転施ケズリ。D. 白色粒。E. 内外—淡灰色。F. 底部のみ。G. 覆土中。
7	小形甕	A. 口縁部径(13.4)、器高(15.2)、底径7.4 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 1/3。G. 床面上。H. 胴部上半と下半は接合しない。器形は図上復元。
8	小形甕	A. 口縁部径11.8、器高16.5、底径(5.6) B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケの後ナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外—淡橙褐色、内—暗茶褐色。F. 3/4。G. 床面上。H. 外面は二次焼成を受けている。
9	小形甕	A. 口縁部径(13.2)、器高15.0、底径5.6 B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 2/3。G. 覆土中。

10	坏	A. 口縁部径13.8、器高4.6 C. 口縁部内外面寛ナデの後ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 完形。G. 床面上。
11	坏	A. 口縁部径(13.4) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 1/5。G. 覆土中。
12	砥石	A. 長さ19.8、幅16.2、厚さ4.3、重さ1852g B. 自然石をそのまま利用。C. 表面中央部は良く磨かれて摩滅し、放射状に幅広く粗い擦痕がある。D. 砂岩。F. 完形。G. 床面上。H. 表面には一部複数の敲打痕と刃物による条痕(傷)が見られる。

第43号住居跡(第186図)

D地点の中央部に位置し、南側には第11号掘立柱建物跡と第44号住居跡がある。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。平面形は不明であるが、主軸方位はN-58°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む貼床式で、全体に平坦でしまっている。ピットは、1箇所検出されている。P1は、貯蔵穴と考えられるもので、東側コーナー部に位置している。形態は、70cm×60cmのやや楕円形に近い形態を呈し、深さは45cmで底面は平坦である。カマドは、住居の北東側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。袖は、先端部がすでに崩壊しているが、ロームブロックを均一に含む暗褐色土(カマド第1層)を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、あまり良く焼けていない。燃焼面は、床面とほぼ同じ高さで平坦である。煙道部は、ほぼ水平に住居の壁外に88cm程直線的に延びて立ち上がっている。

出土遺物は、覆土中を主体に土器が出土しているが、この内のNo5の小形短頸壺とNo7の坏は床面上から、No1の甕は貯蔵穴内から出土している。土器以外では、カマド右側の覆土中より土製支脚(No6)が出土している。



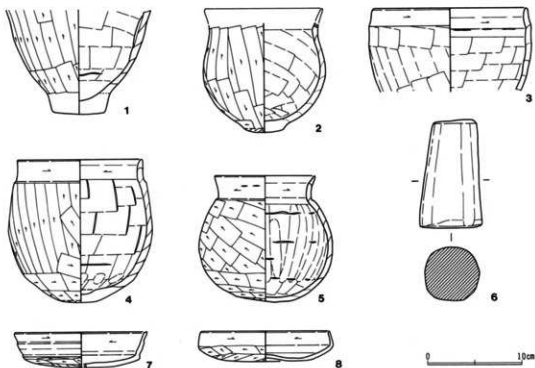
第186図 第43号住居跡

第43号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層(小石を多量に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第2層：黒褐色土層(小石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第3層：暗褐色土層(ロームブロック・焼土ブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。)



第187図 第43号住居跡出土遺物

第43号住居跡出土遺物観察表

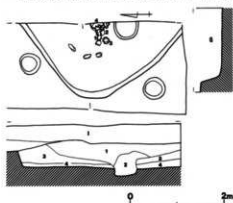
1	甕	A. 残存高11.0、底径5.4 B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒。E. 外—明茶褐色、内—淡褐色。F. 1/2。G. 貯蔵穴内。
2	小形甕	A. 残存高11.5、底径4.2 B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
3	鉢	A. 口縁部径(16.4) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面荒ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—淡茶褐色、内—黒褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
4	小形甕	A. 口縁部径13.2、器高15.0 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面荒ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—淡茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
5	小形短甕	A. 口縁部径10.6、器高13.3 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外—淡茶褐色、内—茶褐色。F. 1/2。G. 床面上。H. 外面黒斑あり。
6	土製支脚	A. 長さ11.4、最大幅6.6 C. 外面ケズリの後ナデ。D. 白色粒。E. 外—茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径14.0、器高3.7 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 1/2。G. 床面上。H. 口縁部外面に黒色附着物。
8	坏	A. 口縁部径(13.6)、器高3.1 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外—茶褐色。F. 1/4。G. 覆土中。

第44号住居跡 (第188図)

D地点の中央部に位置し、第11号掘立柱建物跡と重複している。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、直線的に傾斜し

て立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む貼床式で、全体に平坦でしまっている。ピットは、1箇所検出されているが、本住居跡に伴うものではない。

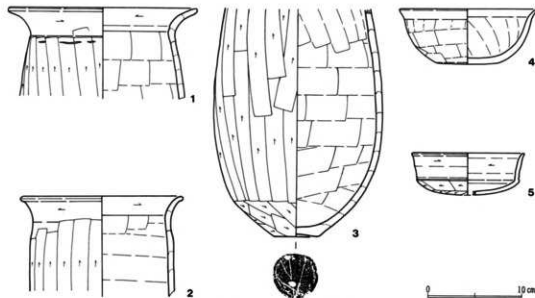
出土遺物は、覆土中より土器片と片岩がまとまって出土している。



第188図 第44号住居跡出土遺物

第44号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第189図 第44号住居跡出土遺物

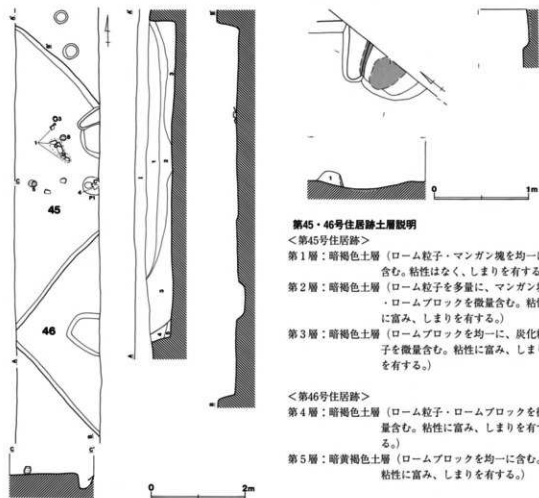
第44号住居跡出土遺物観察表

1	亮	A.口縁部径20.0 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面施ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.1/2。G.覆土中。
2	亮	A.口縁部径(17.2) B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一明茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
3	亮	A.残存高24.1、底径4.8 B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面施ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外一茶褐色。F.2/3。G.覆土中。H.底部外面木葉痕。

4	碗	A.口縁部(14.4)、器高5.8、底径6.4 B.粘土粗積み上げ。C.口縁部内外面ナデ。体部及び底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡茶褐色、内-明茶褐色。F.1/3。G.覆土中。
5	坏	A.口縁部(11.8)、器高4.4 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-淡茶褐色。F.1/4。G.覆土中。

第45号住居跡 (第190図)

D地点の中央部に位置し、重複する第46号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の東側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。平面形は、比較的整った方形か長方形を呈するものと思われ、主軸方位はN-50°-Eをとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは50cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、P1の1箇所が検出されているだけである。深さは30cmあり、位置的には主柱穴の可能性も考えられる。カマドは、住居北東側壁の東側コーナー部寄りに位置し、



第45・46号住居跡土層説明

<第45号住居跡>

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、マンガン塊・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

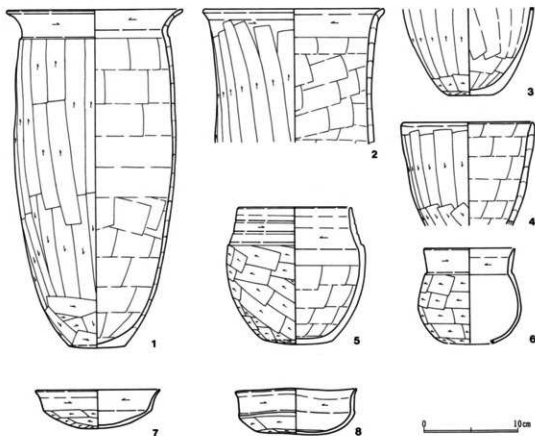
<第46号住居跡>

- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第190図 第45・46号住居跡

壁に対してほぼ直角に付設されているようである。カマドの東側半分は調査区外であるため、全容は不明である。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土(カマド第1層)を、壁に直接貼り付けて構築している。燃焼部は、比較的良く焼けている。燃焼面は、床面より若干低く平坦である。

出土遺物は、カマド全面の床面上を主体に、比較的多くの土器が出土している。



第191図 第45号住居跡出土遺物

第45号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径18.6、器高36.1、底径(6.0) B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一淡茶褐色。F. 1/2。G. 床面上。
2	甕	A. 口縁部径19.2 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 胴部上半のみ。G. 覆土中。
3	甕	A. 底径4.8 B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一茶褐色。F. 3/4。G. 覆土中。
4	鉢	A. 口縁部径(13.8)、残存高11.0 B. 粘土紐積み上げ。C. 外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/3。G. P1内。

5	鉢	A.口縁部径17.0、器高14.5、底径7.2 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面堯ナデ。底部外面ケズリ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.完形。G.床面上。
6	小形短頸壺	A.口縁部径(9.6)、器高10.1 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明橙褐色。F.1/2。G.覆土中。
7	坏	A.口縁部径13.2、器高4.1 C.口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外—明橙褐色。F.2/3。G.覆土中。
8	坏	A.口縁部径12.8、器高4.9 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明橙褐色。F.完形。G.床面上。

第46号住居跡（第190図）

D地点の中央部に位置し、重複する第45号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは40cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む貼床式で、全体に平坦でしまっている。ピットは、中央部より土壌状の規模の大きなものが1箇所検出されているが、本住居跡に伴うものではない。

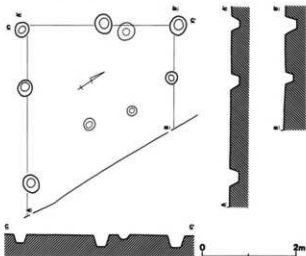
出土遺物は、覆土中より、鬼高式土器の破片がごく少量出土しただけである。



2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第192図)

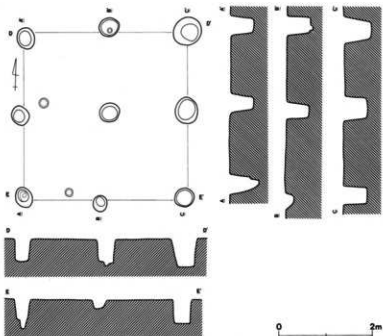
A地点の東端に位置する。調査区内で検出されたのは、建物跡の東側半分だけであるため、本建物跡の全容は不明である。形態は、北東から南西方向が2間・北西から南東方向は3間以上の側柱式で、長方形を呈するものと思われる。規模は、梁行が約3.20m・桁行は4.05mまで測れる。建物跡の長軸方位は、N-57°-Wをとる。柱通りは、桁行側がやや蛇行ぎみの配置をとるが、柱穴列の直線上から完全に外れるものはない。柱心間は、梁行が1.60mを測り、桁行は間隔が不揃いで1.20mと2.00mあり、建物の北西側の1間が狭くなっている。柱穴は、直径26cm~40cmのいずれも円形を呈し、深さは17cm~25cmある。柱穴覆土は、B軽石とローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。



第192図 第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第193図)

A地点の東側に位置し、重複する第14号住居跡を切っている。形態は、2間×2間の方形を呈し、真ん中に東柱をもっている。柱通りは比較的良い。規模は、東西方向・南北方向とも3.50mで、柱心間はほぼ1.75mの等間隔である。建物跡の向きは、N-2°-Wをとる。柱穴は、直径34cm~58cmのいずれも円形を呈し、深さは20cm~60cmあるが50cm程度のもので主体を占める。柱穴覆土は、ローム粒子とロームブロックを微量含む

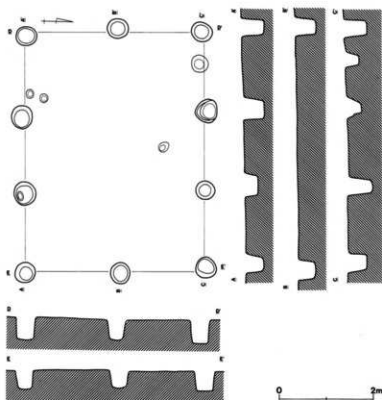


第193図 第2号掘立柱建物跡

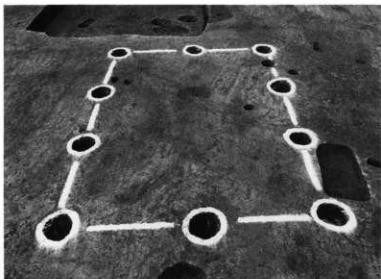
暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土が第3号掘立柱建物跡と類似することから、古墳時代後期の可能性が高いと考えられる。

第3号掘立柱建物跡 (第194図)

A地点の中央部に位置し、西側には第6号住居跡が、東側には第14号住居跡が近接している。形態は、南北方向が2間・東西方向が3間の長方形を呈する側柱式である。規模は、梁行が約3.80m・桁行が約5.10mある。建物跡の長軸方位は、ほぼN-90°-Wをとる。柱心間は、梁行がほぼ1.90m・桁行が1.70mで、梁行に比べて桁行の方が若干短くなっている。柱穴は、直径40cm～50cmのいずれも整った円形を呈し、深さは30cm～48cmで極端に深いものや浅いものはない。柱穴覆土は、ローム粒子とロームブロックを微量含む暗褐色土を主体とする。出土遺物は、柱穴覆土中より鬼高式土器の破片が少量出土しただけである。本建物跡の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代後期の可能性が高いと考えられる。

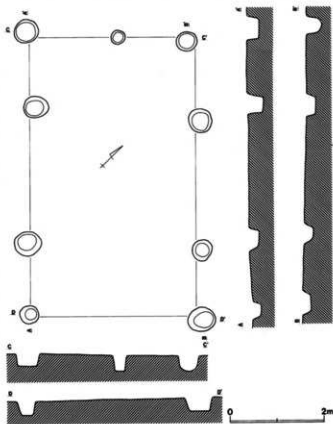


第194図 第3号掘立柱建物跡

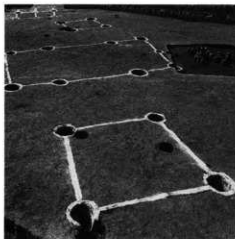
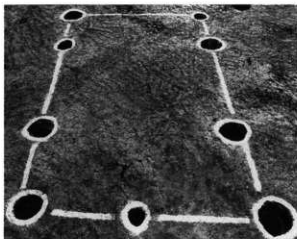


第4号掘立柱建物跡(第195図)

A地点の西側に位置し、北西側で重複する第41号住居跡を切っている。南東側で重複する第25号住居跡との新旧関係については不明である。形態は、北東から南西方向が2間・北西から南東方向が3間の長方形を呈する側柱式である。建物跡の長軸方位は、 $N-46^{\circ}-W$ を向いている。規模は、梁行が約3.50m・桁行が約6.00mある。柱通りはやや蛇行ぎみであり、建物南東側梁行には真ん中の柱穴は見られない。柱心間は、梁行・桁行とも等間隔ではなく、梁行側が1.70mと1.80m、桁行側は両端の1間が1.50mで真ん中の1間が3.00mと広くなっており、第1号掘立柱建物跡の形態に類似している。柱穴は、直径40cm～50cmの円形を主体とするが、建物北西側梁行の真ん中の柱穴は直径28cmで、他に比べて規模が小さい。深さは、20cm～32cmを測る。柱穴覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態より中世以降の所産と考えられる。

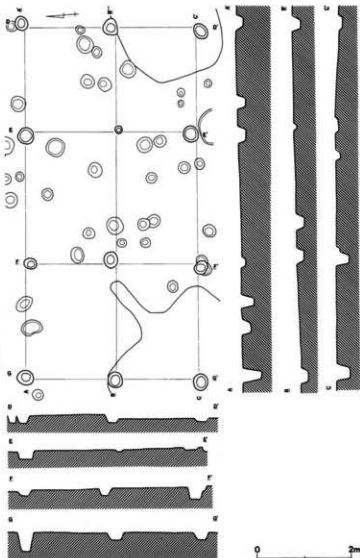


第195図 第4号掘立柱建物跡



第5号掘立柱建物跡 (第196図)

A地点の南東側に位置し、重複する第21号住居跡を切り、第10号土壌に切られている。本建物跡の中央部南側で重複している第6号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。形態は、南北方向が2間・東西方向が3間の長方形を呈し、中間に東柱をもつ総柱式の可能性が考えられるものである。建物跡の長軸方位は、 $N-87^{\circ}-W$ をとる。規模は、梁行が約3.70m・桁行が約7.40mある。柱通りは、若干蛇行ぎみである。柱心間は、梁行側はほぼ等間隔で1.85mあるが、桁行側は不揃いで、東側から2.20m・2.80m・2.40mと真ん中の1間がやや広がっている。柱穴は、直径30cm前後の円形を呈するものが主体であるが、東側の東柱は直径18cmと他に比べて極端に規模が小さい。深さは、10cm~40cmと様々である。柱穴覆土は、B軽石を均一にローム粒子を微量含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態より中世の所産と考えられる。



第196図 第5号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡 (第198図)

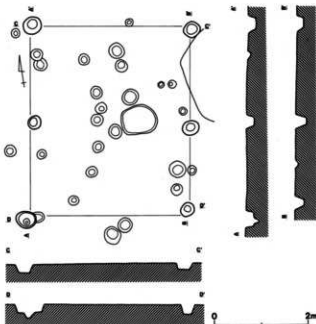
A地点の南東側に位置する。重複する第5号掘立柱建物跡や第10号土壌との新旧関係は不明である。形態は、南北方向がや



や長い長方形を呈し、南北方向は2間で、東西方向は中間に柱穴がないが、比較的広く2間に近い規模である。規模は、南北方向が約4.00mあり、柱心間は2.00mの等間隔で、東西方向は3.40mある。建物跡の長軸方位は、 $N-9^{\circ}-E$ をとる。柱穴は、直径30cm~40cmの円形を呈し、深さは15cm~30cmある。柱穴覆土は、B軽石を均一にローム粒子を微量含む暗褐色土である。出土遺物は、建物跡北西端の柱穴覆土中より、龍泉窯系青磁碗の底部破片(第197図)が1点出土しただけである。本建物跡の時期は、出土遺物や覆土の状態から中世の所産と考えられる。



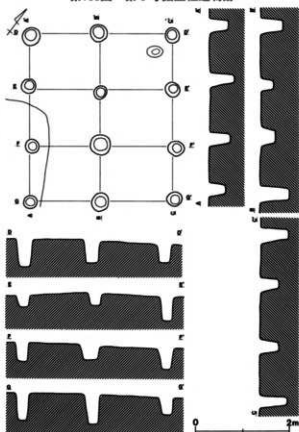
第197図 第6号掘立柱建物跡出土遺物



第198図 第6号掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡(第199図)

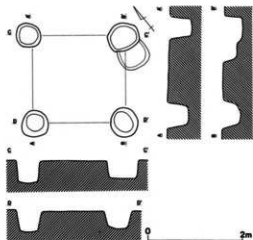
A地点の南西側に位置し、重複する第33号住居跡を切っている。形態は、北東から南西方向が2間・北西から南東方向が3間の長方形を呈し、東柱をもつ総柱式である。建物跡の長軸方位は、 $N-39^{\circ}-W$ をとる。規模は、梁行が約3.00m・桁行が約3.60mある。柱心間は、梁行1.50m・桁行1.20mのそれぞれ等間隔で、梁行側の1間の方が長くなっているが、一般的な建物跡に比べて、梁行・桁行とも1間の間隔がかなり狭い。柱穴は、直線上に良く並んでいる。いずれも直径30cm~40cmの円形を呈し、深さは30cm~60cmあるが、真ん中の2本の東柱は、やや浅くなっている。柱穴覆土は、B軽石とローム粒子を均一に含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態より中世以降の所産と考えられる。



第199図 第7号掘立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡(第200図)

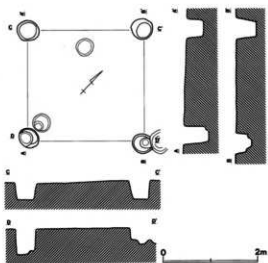
A地点の西端近くに位置し、南西側には第7号掘立柱建物跡が、北東側には第4号掘立柱建物跡が近接している。形態は、1間×1間の方形を呈し、規模はいずれも1.90mである。建物跡は、N-51°-Wの方向を向いている。柱穴は、いずれも直径50cm～65cmの比較的規模の大きな円形を呈している。深さは35cm～45cmあり、底面は広く平坦である。柱穴覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。



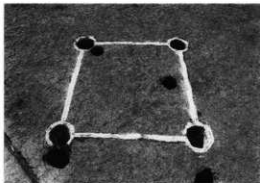
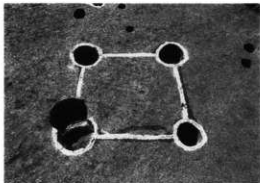
第200図 第8号掘立柱建物跡

第9号掘立柱建物跡(第201図)

A地点の西側に位置し、東側には第30号住居跡が、南西側には第4号掘立柱建物跡が近接している。形態は、第8号掘立柱建物跡と同じく1間×1間の方形を呈しているが、規模はいずれも2.40mあり、第8号掘立柱建物跡よりも一回り大きい。建物跡は、N-52°-Wの方向を向いている。柱穴は、いずれも直径40cm程度の円形を呈し、深さは35cm～55cmある。東側と南側の柱穴には、その底面の外側に寄った位置に柱痕が見られる。柱穴覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

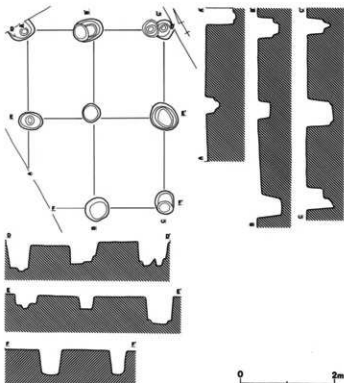


第201図 第9号掘立柱建物跡



第10号掘立柱建物跡（第202図）

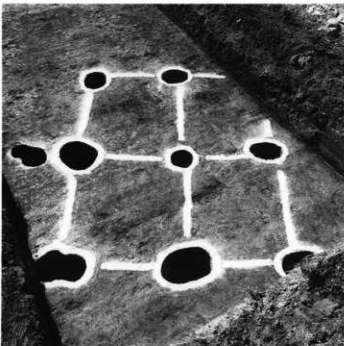
C地点の北端に位置し、南西側約50mには中世後半頃の毛無し屋敷跡(恋河内1995)がある。調査区内では、北西から南東方向2間、北東から南西方向2間が確認されているが、建物の北西側と北東側については、調査区外にさらに延びる可能性もある。形態は、北東から南西方向側が長い長方形を呈するものと思われ、真ん中に東柱をもつ総柱式の可能性が高い。建物跡の長軸方位は、 $N-60^{\circ}-W$ を向くものと思われる。柱心間は、北東から南西方向が1.85m・北西から南東方向が1.50mのそれぞれ等間隔で、北東から南西方向側の1間が北西から南東方向側の1間に比べて長くなっている。柱穴は、直径40cm～60cmの円形もしくは楕円形を呈している。深さは、25cm～55cmあるが、50cm前後のものが主体的で、真ん中の東柱は深さ25cmで他に比べて浅くなっている。側柱穴の多くには、その底面に柱痕が見られる。柱穴覆土は、B軽石とロームブロックを均一に含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。



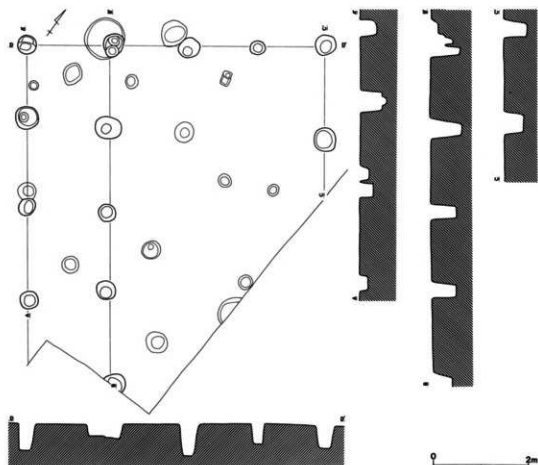
第202図 第10号掘立柱建物跡

第11号掘立柱建物跡（第203図）

D地点の中央部に位置し、重複する第21号土壌に切られている。調査区内で検出されたのは、建物



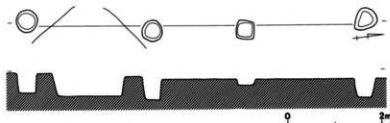
跡の北西側だけであるため、本建物跡の全容は不明である。形態は、北東から南西方向は3間で、その南西側に1間分の庇(縁)か下屋をもち、北西から南東方向は4間まで確認できる。建物跡は、北西から南東方向に長い長方形を呈する側柱式と思われ、長軸方位はN-35°-Wをとる。規模は、北東から南西方向が6.30m・北西から南東方向は7.20mまで測れる。柱通りは比較的良く、側柱穴はいずれも直線上にはば配列されている。柱心間は、梁行側に比べて桁行側がやや長く、1間×1間の形態が長方形を呈している。梁行側は、柱心間が1.50mの等間隔で、南西側の庇(縁)か下屋の部分は1.80mある。桁行側の側柱穴は、ほぼ1.80mの等間隔であるが、南西側の庇(縁)か下屋の柱穴は間隔が不揃いで、北西側から1.50m・1.90m・2.00mを測る。南西側の庇(縁)か下屋は、建物本体の側柱穴とあまり対応しないことから、新しく増築された部分である可能性が高い。柱穴は、直径30cm～50cmの円形か楕円形を呈し、深さは20cm～65cmと様々である。柱穴覆土は、B軽石とローム粒子を含む暗褐色土である。出土遺物は、柱穴覆土中から和泉式土器と鬼高式土器の破片が少量出土しているが、これらは本建物跡に直接伴うものではなく、周囲から混入したものと考えられる。本建物跡の時期は、覆土の状態から中世の所産と考えられる。



第203図 第11号掘立柱建物跡

第12号掘立柱建物跡（第204図）

D地点の中央部に位置し、第44号住居跡と重複している。調査区内で検出されたのは、建物跡を構成すると思われる1列に並ぶ4箇所の柱穴だけであるため、建物跡の全容は不明である。規模は、南北方向が3間で7.20mあり、柱心間は北側から2.60m・2.00m・2.60mで、真ん中の1間が狭くなっている。柱穴は、直径40cm前後の円形か方形を呈し、深さは15cm～45cmある。柱穴覆土は、B軽石とロームブロックを均一に含む暗褐色土である。本建物跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

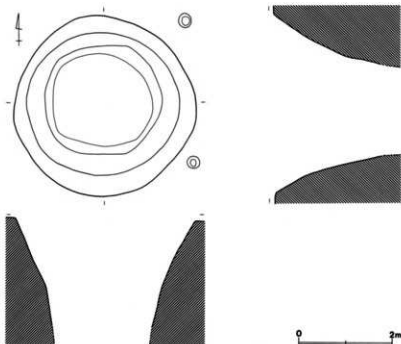


第204図 第12号掘立柱建物跡

3 井戸跡

第1号井戸跡（第205図）

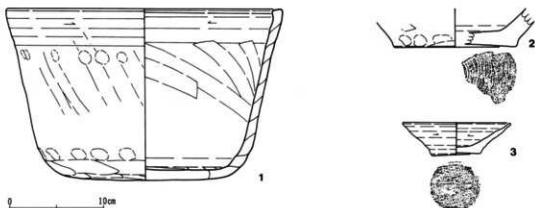
A地点の中央部やや東側寄りに位置し、北側には第14号住居跡が近接している。周囲には覆土中にB軽石を含む中世の小規模なピットが多く見られるが、本井戸跡との関係は不明である。検出されたのは井戸の掘り方だけであり、その規模から見て中には井筒が存在したと思われるが、井筒はすでに破壊されたか撤去されたらしく、



第205図 第1号井戸跡

その痕跡は認められなかった。掘り方の平面形は、上面が南北方向3.84m・東西方向3.90mの比較的大きな円形を呈している。深さは、全掘できなかったため不明であるが、3m以上はあるものと推測される。断面の形態は、上半部は緩やかに傾斜しながら窄まり、深さ1.50m位の所で方

向を変えて垂直ぎみになっている。出土遺物は、覆土中より内耳鍋(No 1)や鉢(No 2)の破片と完形の土師質土器皿(No 3)が出土している。No 1の内耳鍋は、口縁部があまり外反せずに内面が窪み、底面は平底で全体に器肉の厚いもので、平田氏の「内耳土器D類」(平田1989)や赤熊氏の「内耳鍋D類」(赤熊1994)に類似した形態を呈している。No 3の土師質土器皿は、平底の底部から体部が直線的に開き、口縁部先端が薄く仕上げられているものである。本井戸跡の時期は、これらの出土遺物から見て、概ね15世紀前半頃の所産と考えられる。



第206図 第1号井戸跡出土遺物

第1号井戸跡出土遺物観察表

1	内耳鍋	A. 口縁部径(29.2)、器高18.0 B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ナデの後雑な寛ナデ。底部内外面寛ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 外—黒灰色、内—淡灰色、肉—淡灰白色。F. 1/3。G. 覆土中。H. 胴部と底部は胎土が異なり、胴部は緻密であるが、底部は砂粒を多く含む。外面に煤の付着あり。
2	鉢	A. 底径(13.0) B. 粘土経積み上げ。C. 内外面ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外—淡灰色、肉—淡茶褐色。F. 1/5。G. 覆土中。H. 還元焙焼成。内面は良く擦れている。
3	土師質土器皿	A. 口縁部径11.5、器高3.5、底径5.4 B. ロクロ成形。C. 内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒、黒色粒。E. 内外—明茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。H. 底部内面に黒色付着物。

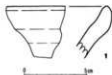
4 土 壌

第1号土壌 (第210図)

A地点の南東側に位置し、重複する第2号住居跡を切っている。北側には第2号土壌が、西側には第11号掘立柱建物跡があり、南西側には第10号土壌が近接している。平面形は、整った長方形を呈し、規模は東西方向1.80m・南北方向1.12mを測る。長軸方向は、ほぼ東西方向を向いている。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、深さは52cmある。底面は、広く平坦をなすがやや北西側に向かって傾斜している。覆土は、B軽石・ローム粒子・小石を微量含む暗褐色土を主体とするが、下半にはロームブロックを顕著に含んでいる。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第2号土壌 (第210図)

A地点の南東側に位置し、重複する第2号住居跡を切っている。北側には第4号土壌が、南側には第1号土壌がある。平面形は、整った長方形を呈し、規模は東西方向2.10m・南北方向1.77mを測る。長軸方向は、ほぼ東西方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは34cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石・ロームブロック・小石を含む暗褐色土である。出土遺物は、少数の鬼高式土器の破片とともに覆土中から片口鉢の口縁部破片(第207図No1)が出土している。本土壌の時期は、小破片であり混入の可能性もあるが、出土した片口鉢からは、一応14世紀末以降の所産と考えられる。

第207図 第2号土壌
出土遺物

第2号土壌出土遺物観察表

1	片口鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡灰褐色。F.小破片。G.覆土中。
---	-----	---

第3号土壌 (第210図)

A地点の南東側に位置し、重複する第1号住居跡を切っている。土壌内の北西側にピットが1箇所検出されているが、本土壌に伴うものではなく、土壌よりも古いものである。平面形は、南北方向に長い楕円形のような形態を呈している。規模は、南北方向1.04m・東西方向0.66mを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは10cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石を均一にローム粒子と小石を微量含む暗褐色土で、遺物は何も出土しなかった。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第4号土壌 (第210図)

A地点の南東側に位置し、北東側には第5号土壌が、南側には第2号土壌がある。土壌内の北東側にピットが1箇所検出されているが、本土壌に伴うものではなく、土壌よりも新しいものである。平面形は、直径90cmの円形を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは8cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗褐色土で、遺物は何も出土しなかった。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第5号土壌 (第210図)

A地点の東側に位置し、北東側には第1号掘立柱建物跡が、南西側には第4号土壌がある。土壌内の中央にピットが1箇所検出されているが、本土壌に伴うものか不明である。平面形は、南北方向に長い楕円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向96cm・東西方向60cmある。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは10cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とローム粒子を含む暗褐色土である。出土遺物は、覆土中より古銭(第208図No1)が1枚出土し

第208図 第5号
土壌出土遺物

ただけである。この古銭は、表裏面が非常に摩滅しており、古銭名は判読不明である。本土墳の時期は、覆土の状態や出土した古銭から中世の所産と考えられる。

第6号土墳(第210図)

A地点の中央部に位置し、北西側には第7号土墳が近接している。平面形は、76cm×70cmの円形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、深さは36cmある。底面は、平坦であるが中央部はピット状に1段深くなっている。覆土は、ローム粒子と焼土粒子を微量含む暗茶褐色土で、遺物は何も出土していない。本土墳の時期は、出土遺物がないため明確にできないが、覆土の状態からは、B軽石降下以前のものと考えられ、おそらく古墳時代の集落に係わるものと思われる。

第7号土墳(第210図)

A地点の中央部に位置し、北西側には第8号土墳があり、南東側には第6号土墳が近接している。平面形は、南北方向に長い楕円形のような形態を呈している。規模は、南北方向74cm・東西方向66cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、深さは20cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とローム粒子を含む暗褐色土である。本土墳の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第8号土墳(第210図)

A地点の中央部に位置し、南東側には第6号土墳と第7号土墳がある。平面形は、コーナー部の丸み強い長方形を呈し、長軸方向はほぼ東西方向を向いている。規模は、東西方向1.36m・南北方向0.66mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、深さは18cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とローム粒子を均一に含む暗褐色土である。本土墳の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第9号土墳(第210図)

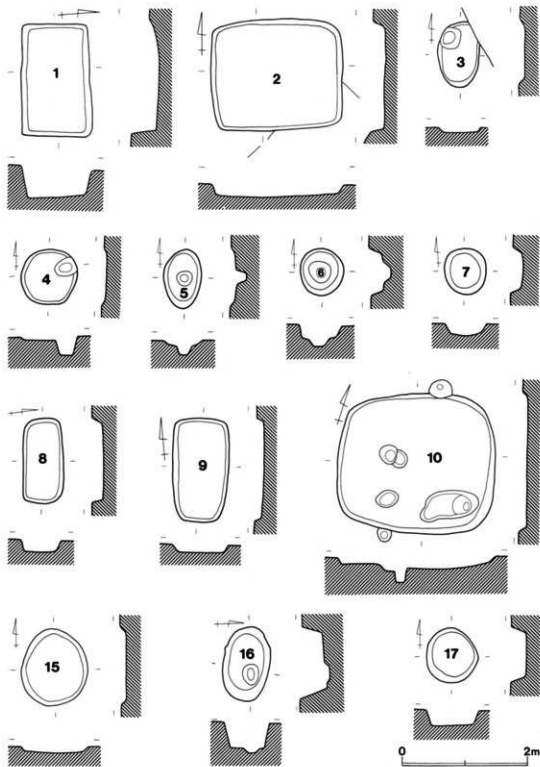
A地点の中央部南側寄りに位置し、北東側には第1号井戸跡がある。平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈し、長軸方向はほぼ南北方向を向いている。規模は、南北方向1.66m・東西方向0.90mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、深さは12cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とローム粒子を均一に焼土粒子と炭化粒子を微量含む暗褐色土である。出土遺物は、覆土中より片口鉢の口縁部破片(第209図No1)が1点出土しただけである。本土墳の時期は、出土した片口鉢や覆土の状態から、15世紀前半以降の所産と考えられる。



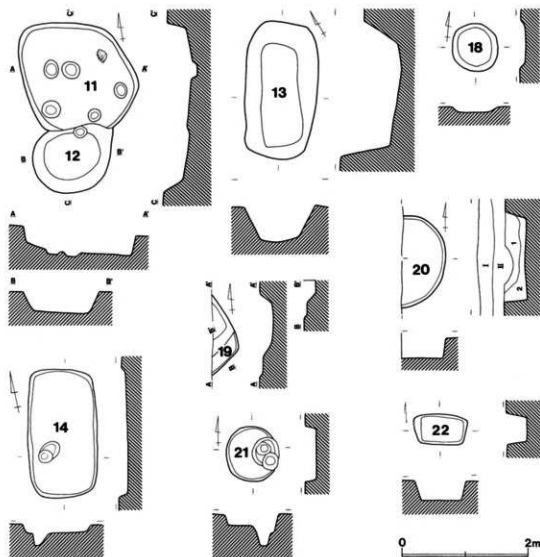
第209図 第9号土墳出土遺物

第9号土墳出土遺物観察表

1	片口鉢	A. 口縁部径(21.5) B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面回転ナデ。胴部外面ハケの後ナデ。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 口縁部1/7。G. 覆土中。H. 還元焰焼成(須恵貫)。
---	-----	--



第210圖 土 坑 (1)



第211図 土 坑 (2)

第10号土坑 (第210図)

A地点の南東側に位置し、重複する第5号掘立柱建物跡を切っている。平面形は、コーナー部の丸み強い長方形を呈し、長軸方向はほぼ東西方向を向いている。規模は、東西方向2.50m・南北方向2.22mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、深さは20cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石・ロームブロック・小石を含む暗褐色土である。出土遺物は、覆土中から少量の鬼高式土器の破片と渥美窯系の甕の破片(第212図No1)が1点出土しただけである。この渥美窯系の甕の破片は、第1号溝跡から出土したものと酷似し、おそらく13世紀中葉の時期に比定されるもの



第212図 第10号土坑出土遺物

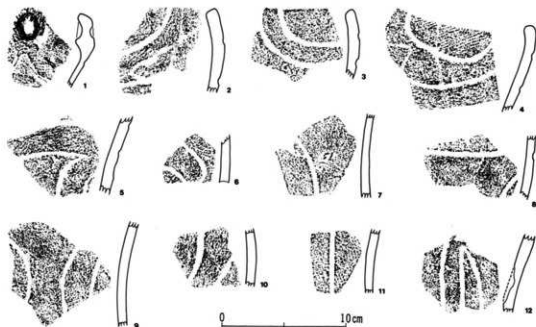
である。本土壤の時期は、覆土の状態や出土遺物から中世の所産と考えられるが、渥美窯系の甕の破片は、本土壤に直接伴うものではなく混入の疑いが強い。

第10号土壌出土遺物観察表

1	甕	B. 粘土経積み上げ。C. 内外面ともハケ。D. 白色粒。E. 内外—淡褐色。F 破片。G. 覆土中。H. 渥美窯系。
---	---	---

第11号土壌（第211図）

A地点の北東側に位置し、重複する第12号土壌を切り、第8号住居跡に切られている。平面形は不整形を呈し、規模は南北方向1.70m・東西方向2.02mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、深さは42cmある。底面は、広くやや丸みもち、小規模なピット状の浅い掘り込みが5箇所ある。覆土は、ローム粒子と炭化粒子を微量含む暗茶褐色土である。出土遺物は、覆土中から比較的多くの称名寺式土器の破片（第213図）が出土している。No 1 は、器内の薄い波状口縁の破片で、波頂部は楕円形の貼り付け文をもつ。口縁部は無文で屈曲し、口縁部下の沈線区画文内にはL Rの細縄文が施されている。No 2～No 11は、同一個体の破片で口縁部が緩やかに内湾する波状口縁を呈する。口唇部は無文で、口縁部から胴部の沈線区画文内にはL Rの細縄文が施されている。No 12は、沈線だけによる施文で、縄文は施されていない。土器以外では石器の剥片が1点覆土中より出土し、また長さ25cmの比較的大きな片岩が底面に置かれたような状態で出土している。本土壤の時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉の所産と考えられる。



第213図 第11号土壌出土遺物

第12号土壌（第211図）

A地点の北東側に位置し、重複する第11号土壌に切られている。平面形は、東西方向に長い楕円形のような形態を呈している。規模は、東西方向1.40m・南北方向1.16mを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは36cmある。底面は、広くやや北東側に向かって傾斜している。覆土は、ローム粒子を微量含む暗茶褐色土である。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、遺構の重複関係から縄文時代中期末～後期初頭頃の所産と考えられる。

第13号土壌（第211図）

A地点の北東側に位置し、重複する第38号住居跡を切り、第9号住居跡に切られている。平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形に類似した形態を呈している。規模は、北東から南西方向2.18m・北西から南東方向1.14mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、深さは76cmある。底面は、やや丸みをもち北に向かって緩やかに傾斜している。覆土は、焼土粒子とローム粒子を均一に含む暗茶褐色土である。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態や遺構の重複関係から古墳時代後期の所産と考えられる。

第14号土壌（第211図）

A地点の西側の南端に位置し、東側には第15号土壌がある。平面形は、コーナー部がやや丸みをもち長方形を呈し、長軸はほぼ南北方向に向いている。規模は、南北方向2.04m・東西方向1.10mを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、深さは14cmある。底面は、広く平坦をなしている。土壌内には小ビットが見られるが、本土壌に伴うものではない。覆土は、B軽石を多量に炭化粒子と焼土粒子を微量含む暗褐色土である。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第15号土壌（第210図）

A地点の西側の南端に位置し、西側には第15号土壌がある。平面形は、1.22cm×1.06cmの不整形円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、深さは8cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とロームブロックを多量に含む暗褐色土である。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第16号土壌（第210図）

A地点の中央部に位置し、重複する第27号住居跡を切っている。平面形は、東西方向に長い楕円形のような形態を呈している。規模は、東西方向1.18m・南北方向0.74mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、深さは40cmある。底面は、広く平坦をなし、浅い窪み状の小ビットを伴っている。覆土は、B軽石とロームブロックを含む暗褐色土である。本土壌の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第17号土坑（第210図）

A地点中央部の北東寄りに位置し、西側には第13号住居跡が、南側には第12号住居跡がある。平面形は、88cm×84cmの不整形円形を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、深さは26cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、ロームブロックとローム粒子を含む暗褐色土である。本土坑の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態からB軽石降下以前の所産と考えられ、古墳時代集落と拘わるものと思われる。

第18号土坑（第211図）

A地点の西側に位置し、北側には中世の第25号住居跡と第4号掘立柱建物跡が近接している。平面形は、76cm×72cmの円形に近い形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、深さは10cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とロームブロックを均一に含む暗褐色土である。本土坑の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第19号土坑（第211図）

A地点の西端に位置する。調査区内で検出されたのは、遺構の東側の一部だけであるため、厳密には土坑であるか明確ではない。形態は、2段に掘り込まれており、南東側に浅く平坦な段をもつ。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは20cmある。底面は、広く平坦をなすが若干丸みをもつ。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土である。本土坑の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態からはB軽石降下以前の所産と考えられる。

第20号土坑（第211図）

D地点の中央部北側寄りに位置し、南側には第43号住居跡がある。調査区内で検出されたのは、遺構の東側半分だけであるため、本土坑の全容は不明である。形態は、比較的整った円形を呈するものと思われ、規模は南北方向の直径が1.46mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、深さは36cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、焼土粒子と炭化粒子を均一に含む黒褐色土（第1層）と、ローム粒子と炭化粒子を微量含む暗褐色土（第2層）の2層に分かれる。出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が比較的多く出土している。本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代後期の所産と考えられる。



第214図 第20号土坑出土遺物

第20号土坑出土遺物観察表

1	坑	A. 口縁部径(12.8) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F 1/5。G. 覆土中。
---	---	--

第21号土坑（第211図）

D地点の中央部に位置し、重複する第11号掘立柱建物跡を切っている。平面形は、88cm×84cmの

円形を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、深さは16cmある。底面は、広く平坦をなしている。覆土は、B軽石とローム粒子を含む暗褐色土である。本土壤の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

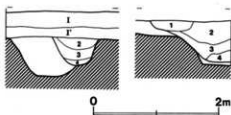
第22号土壌(第211図)

D地点の中央部の南側寄りに位置する。平面形は、長方形に近い形態を呈し、長軸方向をほぼ東西方向に向けている。規模は、東西方向が84cm・南北方向が50cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、深さは32cmある。壁面は、部分的に焼けて赤色化している。底面は、広く平坦をなし、底面上には薄く炭化粒子が被覆している。覆土は、B軽石を含む暗褐色土であるが、焼土粒子と炭化粒子を多量に含んでいる。本土壤の時期は、遺物が何も出土していないため明確にできないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。本土壤は、土壌内で火を焚いた痕跡が見られ、隣接する辻堂遺跡のA地点第1号土壌(本報告)とB地点第11号土壌(恋河内1996)に類似している。

5 溝 跡

第1号溝跡(第215図)

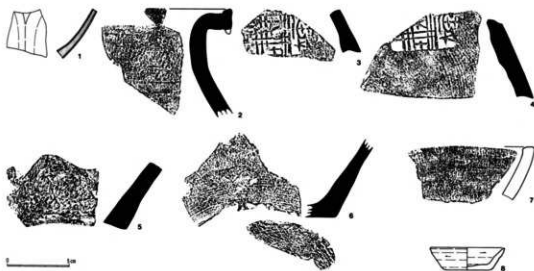
A地点の北端に位置し、重複する古墳時代の住居跡や第2号溝跡及び第5号溝跡を切っている。流路は、直線的では東西方向に向いている。規模は、地形的に最も高い調査区西側で上幅80cm・深さ70cmあり、最も低い東側で上幅50cm・深さ40cmあり、断面は逆台形に近い形態を呈している。覆土は、B軽石を含む暗灰褐色土を主体とするが、恒常的に水が流れていたような形跡が認められないことから、排水路としての性格が考えられる。出土遺物はあまり多くないが、覆土中より龍泉窯系青磁碗(No1)・常滑窯系甕(No2)・渥美窯系甕(No3～5)と在地産の鉢(No6)・内耳鍋(No7)・土師質土器皿(No8)などが出土している。これらの出土遺物は、青磁碗と渥美窯系甕が13世紀代、常滑窯系甕が13世紀後半、在地産の内耳鍋が15世紀前半、土師質土器皿が15世紀代と推測され、かなり時間差が見られる。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物から中世の所産と考えられるが、その掘削時期は第V章で述べるように13世紀代の遺物は混入の可能性が高く、新しい遺物相の15世紀前半頃と推測される。本溝跡は、条里形地割りの東西方向の坪線に沿うもので、遺跡周辺の現地表面に認められる条里形地割りの施工時期を知る上で注目されよう。



第215図 第1号溝跡断面図

第1号溝跡土層説明

- 第1層：暗灰色土層（A軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第216図 第1号溝跡出土遺物

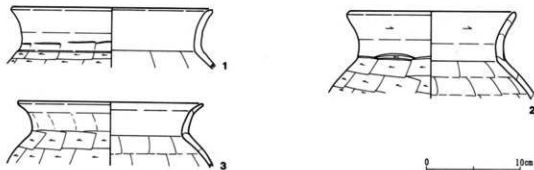
第1号溝跡出土遺物観察表

1	青磁碗	B. ロクロ成形。C. 内外面に淡緑色釉。D. 黒色粒、白色粒。E. 内外—淡緑色、内—淡灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に花卉模様をもつ。龍泉窯系。
2	甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 内外面とも回転ナデ。D. 白色粒。E. 外—淡灰色、内—黒茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に黄緑色軸がかかる。常滑窯系。
3	甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外—淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に押印文。No 4 と同一個体。渥美窯系。
4	甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外—淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 外面に押印文。No 3 と同一個体。渥美窯系。
5	甕	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外—淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No 3・4 と同一個体。渥美窯系。
6	鉢	B. 粘土紐積み上げ。C. 胴部外面ナデの後下端ハケ、内面ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 外—淡灰色、内—暗灰色。F. 破片。G. 覆土中。H. 還元焰焼成（須恵質）。
7	内耳鍋	B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外—黒灰褐色。G. 覆土中。
8	土師質土器皿	A. 口縁部径(6.0)、器高1.8、底径(3.6) B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 内外—暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。

第2号溝跡（第218図）

A地点の北東端に位置し、重複する第1号溝跡に切られている。流路は、調査区内では北西から南東方向に向いている。規模は、上幅が1.12mを測り、確認面からの深さは56cmある。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦であるがやや丸みを帯びる。断面は、逆台形に近い形態を呈している。覆土は6層に分かれるが、中位の第3層と最下層の第6層には細砂が顕著に見られることから、本溝跡にはある程度水が流れていたことが伺える。出土遺物は、覆土中や溝底面より和泉式土器と鬼高式土器の破片が比較的多く出土している。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物より古墳時代後期の所産と考えられる。本溝跡は、辻堂遺跡のA地点とC地点で検出された古墳時代後

期の水路である第16号溝跡(恋河内1996)と類似した規模や形態を呈しており、それと同じ流路方向を取っていることは注目されよう。



第217図 第2号溝跡出土遺物

第2号溝跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(21.4) B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/5。G. 覆土中。
2	甕	A. 口縁部径(18.0) B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一淡橙褐色、内一黒褐色。F. 1/3。G. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径(19.6) B. 粘土経積み上げ。C. 口縁部内外面匳ナデの後ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。D. 赤色粒、白色粒、黒色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/2。G. 覆土中。

第2号溝跡土層説明

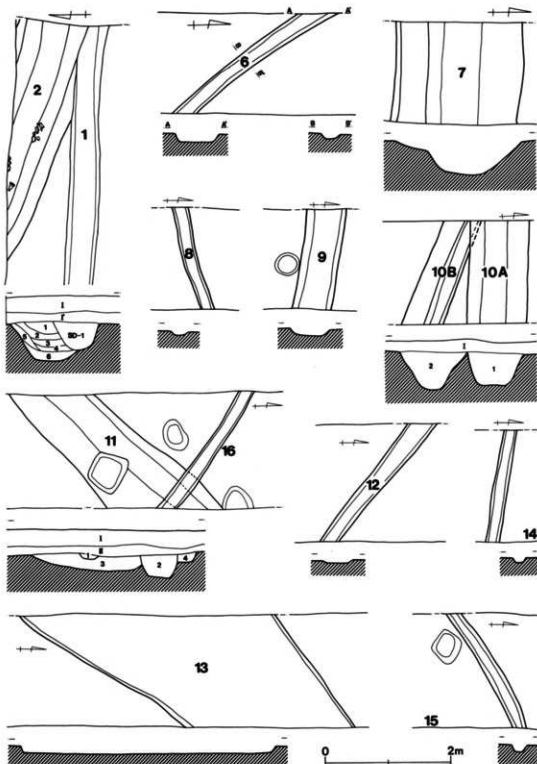
- 第1層：暗灰色土層（白色粒子・鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
 第2層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：暗灰褐色土層（鉄斑・細砂を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第4層：暗灰色土層（鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
 第6層：暗灰色土層（鉄斑・細砂を均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第10号溝跡土層説明

- 第1層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、マンガン塊・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第11号溝跡土層説明

- 第1層：淡灰褐色土層（A 軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
 第2層：淡茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：淡茶褐色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：暗茶褐色土層（マンガン塊・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第218図 溝 跡

第3号溝跡（第92図）

A地点の中央部や西寄りに位置し、重複する第26号住居跡を切っている。流路は、ほぼ南北方向に向いて若干蛇行しており、溝の北側は途切れている。規模は上幅約70cm・深さ15cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広くやや丸みをもっている。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色土で、畑から投げ込まれたと推測される拳大の自然石が比較的多く出土している。本溝跡の時期は、覆土にA軽石を含み、また流路が調査前の畑の境界と一致することから、近世後半以降でも比較的最近に近い時期と考えられる。

第4号溝跡（第92図）

A地点の南東端に位置し、重複する第24号住居跡を切っている。流路は、ほぼ東西方向に取っており、西側は途切れている。形態は全掘していないため不明であるが、覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色土である。本溝跡の時期は、第3号溝跡と同じく覆土にA軽石を含み、また流路が調査前の畑の境界と一致することから、近世後半以降でも比較的最近に近い時期と考えられる。

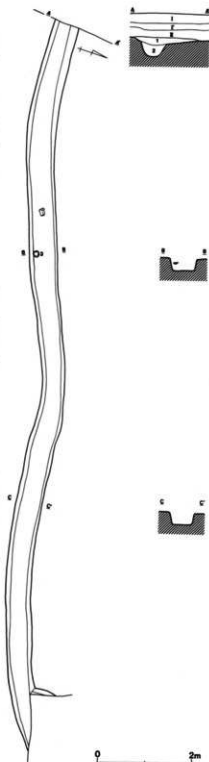
第5号溝跡（第219図）

A地点の北西側に位置し、重複する第29号住居跡と第31号住居跡を切り、中世の第1号溝跡に切られている。流路は、南西から北東方向に向かっているが、緩やかに蛇行している。規模は、上幅が60cmの比較的均一な形態を呈し、底面は広く平坦で深さは最高38cmある。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を微量含む暗茶褐色土で、恒常的に水が流れていたような痕跡は認められないことから、排水路としての機能が考えられる。出土遺物は、覆土中より鬼高式土器が比較的多く出土している。本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物より、古墳時代後期の所産と考えられる。

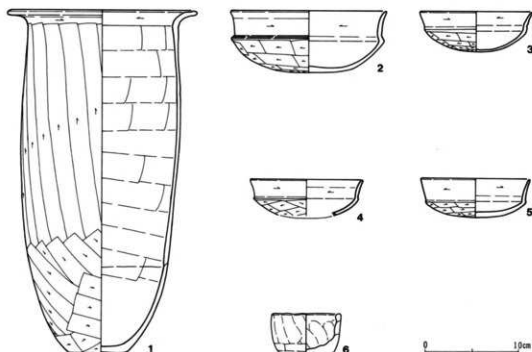
第5号溝跡土層説明

第1層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第219図 第5号溝跡



第220図 第5号溝跡出土遺物

第5号溝跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径20.2、器高36.2、底径6.1 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匳ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 4/5。G. 覆土中。H. 外面は二次焼成を受け、煤の付着あり。
2	坏	A. 口縁部径16.6、器高6.5 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 2/3。G. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径12.0、器高4.3 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一淡褐色。F. 4/5。G. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径(12.0) C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明褐色。F. 1/4。G. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径(11.6)、器高4.0 C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一明褐色。F. 1/2。G. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径(7.2)、器高4.2、底径5.8 B. 粘土紐巻き上げ。C. 外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 3/4。G. 覆土中。

第6号溝跡（第218図）

B地点の南側に位置し、北側約12mには第10号溝跡が、南側約7mには第7号溝跡がある。流路は、調査区内では直線的に北西から南東方向に向いている。規模は、上幅30cm・深さ12cmと比較的小規模で均一的な形態である。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、ローム粒子と鉄斑を微量含む暗褐色土の単一層である。本溝跡の時期は、遺物が何も出土しなかったため、不明である。

第7号溝跡（第218図）

B地点の南側に位置し、北側約7mには第6号溝跡が、南側約3mには第8号溝跡がある。本溝跡の南側上面は、後世の浅い溝と重複している。流路は、調査区内ではほぼ東西方向に向いている。規模は、上幅約1.60m・深さ54cmあり、本遺跡で検出された溝跡の中では比較的規模の大きなものである。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土はB軽石と鉄斑を均一に含む暗灰褐色土を主体にしている。本溝跡の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは中世以降の所産と考えられる。

第8号溝跡（第218図）

B地点の南側に位置し、北側約3mには第7号溝跡が、南側約4mには第9号溝跡がある。流路は、調査区内では若干南西から北東方向に向いている。規模は、上幅24cm・深さ5cmあり、比較的規模の小さな溝である。壁は、緩やかに立ち上がり、底面はやや丸をもつ。覆土は、ローム粒子と鉄斑を含む暗褐色土である。本溝跡の時期は、遺物が何も出土しなかったため、不明である。

第9号溝跡（第218図）

B地点の南側に位置し、北側約4mには第8号溝跡がある。流路は、調査区内では東西方向を取っているが、若干北西から南東方向に向いている。規模は、上幅62cm・深さ12cmある。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦をなしている。覆土は、ローム粒子と鉄斑を含む暗褐色土である。本溝跡の時期は、遺物が何も出土しなかったため、不明である。

第10号溝跡（第218図）

B地点の中央部に位置し、重複する第20号住居跡を切っている。本溝跡は、2本の溝跡が重複しており、北側の第10A号溝跡が第10B号溝跡を切っている。北側の第10A号溝跡は、調査区内ではほぼ東西方向に流路を取っており、規模は上幅約95cm・深さ54cmある。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦をなしている。南側の第10B号溝跡は、北西から南東方向に流路を取り、規模は上幅約98cm・深さ62cmある。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面はやや狭いが平坦である。覆土は、いずれも暗灰色土を主体にしているが、恒常的に水が流れていたような形跡は認められない。本溝跡の時期は、いずれも遺物が出土していないため明確ではないが、南側の第10B号溝跡は覆土の状態から古代の可能性が高いと推測される。北側の第10A号溝跡については、規模や形態が条里坪線に沿うA地点の第1号溝跡に類似しており、それとの南北方向の直線距離が110m強であることから、周辺の現地表面の地割りは不明瞭ではあるが、条里形地割りの東西方向の坪線に沿う溝である可能性も考えられ、おそらく第1号溝跡と近似した時期の所産と推測される。

第11号溝跡（第218図）

D地点の南側に位置し、重複する第16号溝跡に切られている。流路は、調査区内ではほぼ直線的に南西から北東方向に向いている。規模は、上幅0.95m～1.30m・深さ28cmある。壁は、非常にな

だらかに立ち上がり、底面は広く平坦であるがやや丸みをもっている。

覆土は、鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を含む淡茶褐色土(第3層)を主体とするが、細砂粒を顕著に含んでおり、ある程度水が流れていたことが伺える。出土遺物は、覆土中より鬼高式土器の破片が比較的多く



第221図 第11号溝跡出土遺物

出土している。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代後期の所産と考えられる。

第11号溝跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径12.0、器高3.8 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外一明橙褐色。F.3/4。G.覆土中。
---	---	---

第12号溝跡(第218図)

D地点の北側に位置し、南側約16mには第13号溝跡がある。流路は、調査区内ではほぼ直線的に北西から南東方向に向いている。規模は、上幅38cm・深さ4cmと比較的小規模である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、鉄斑やマンガン塊を含む暗褐色土である。本溝跡の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土の状態からは古代の所産と推測される。

第13号溝跡(第218図)

D地点の北側に位置し、北側約16mには第12号溝跡がある。流路は、調査区内では南西から北東方向に向いている。規模は、上幅2.30m・深さ14cmある。壁はやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、鉄斑やマンガン塊を含む暗褐色土である。本溝跡の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土の状態からは古代の所産と推測される。

第14号溝跡(第218図)

D地点の北側に位置する。流路は、調査区内ではほぼ東西方向に取っているが、若干北西から南東方向に傾いている。規模は、上幅22cm・深さ7cmと比較的小規模である。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。本溝跡の時期は、出土遺物がないため不明である。

第15号溝跡(第218図)

D地点の南側に位置し、南側約6mには第11号溝跡と第16号溝跡がある。流路は、調査区内ではほぼ直線的に南西から北東方向に向いている。規模は、上幅26cm・深さ10cmと比較的小規模である。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。本溝跡の時期は、出土遺物がないため不明である。

第16号溝跡(第218図)

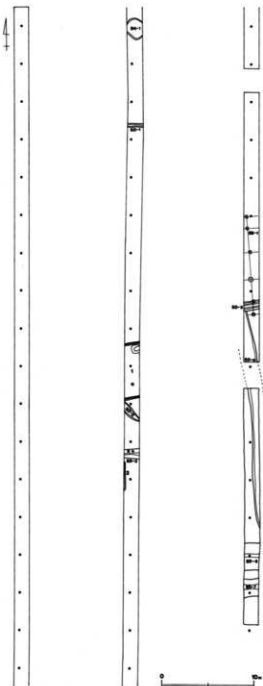
D地点の南側に位置し、重複する第11号溝跡を切っている。流路は、調査区内ではほぼ直線的に北西から南東方向に向いている。規模は、上幅24cm・深さ8cmある。本溝跡の時期は、覆土中にA軽石を含むことから近世後半以降の所産と考えられる。

第Ⅳ章 宮田遺跡の発掘調査

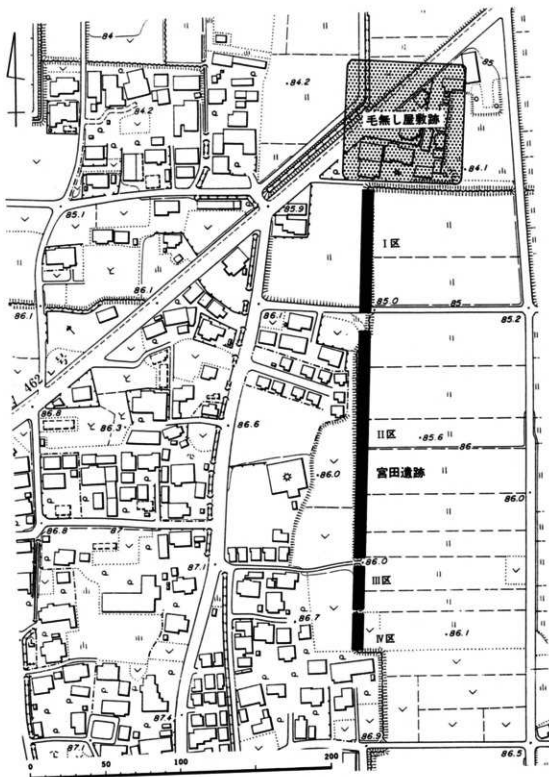
第1節 遺跡の概要

本遺跡は、児玉町大字吉田林字宮田に所在し、標高86mを測る現水田内に位置している。本遺跡の西側約400mには古墳時代中期の住居跡と溝跡が検出された高縄田遺跡（恋河内1995）があり、北側には室町時代以降の毛無し屋敷跡（恋河内1995）が近接している。本遺跡の立地場所は、地形的には現在吉田林の人家が密集する比較的広く平坦な微高地の東端部にあたり、生野山との間に形成された谷田との境に接しているように見える。しかし、遺跡が営まれていた当時は、この南北方向に延びる平坦で比較的広い微高地も、湧水によって開析された緩やかで小規模な開析谷により、複数の南北方向に延びる微高地に分断され、いまよりも起伏のある複雑な地形を呈していたようであり、本遺跡のすぐ西側も緩やかで浅い谷状の地形が入り込んでいることが、近隣の試掘調査によって明らかになっている。

発掘調査は、幅2mの南北に走る小排水路計画路線内の小規模な調査であるため、遺跡の具体的な様相や性格は不明であるが、古墳時代後期と中世の遺構が検出されている。検出された遺構は、竪穴式住居跡2軒（古墳時代後期1・時期不明1）、掘立柱建物跡1棟（中世）、土壇1基（中世）、溝跡7条（古代1・中世以降5・時期不明1）であるが、調査区の関係から遺構の全容が解るものはない。出土遺物は比較的少量で、第1号住居跡から鬼高Ⅰ式前半の土器の良好な資料が出土しただけであり、他の遺構では遺物はまったく出土していない。この他では、第1号住居跡の覆土中より、縄文時代の打製石斧と横刃型石器*が1点ずつ出土している。



第222図 宮田遺跡Ⅱ～Ⅳ区全体図



第223図 宮田遺跡調査位置図

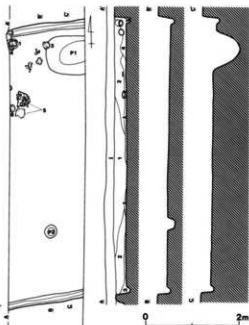
第2節 検出された遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡(第224図)

調査区中央部に位置し、南側約6mには第2号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の中央部だけであるため本住居跡の全容は不明である。規模は南北方向が5.90mあるが、東西方向は不明である。主軸方位は、 $N-10^{\circ}-W$ をとるものと思われる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。調査区内で検出された南北両側の壁下には、幅15cm・深さ5cm程度の壁溝がある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、全体に平坦で堅くしまっている。ピットは、2箇所検出されている。P1は、貯蔵穴と考えられるもので、おそらくカマド右側の北東側コーナー部付近に位置するものと思われる。比較的規模が大きなコーナー部の丸い長方形に近い形態を呈し、底面は丸みを帯び深さは55cmある。P2は、直径25cmの円形を呈し、深さは15cmと浅いものであるが、その性格は不明である。カマドは、調査区内では検出されていないが、北側壁の西側調査区断面にロームブロックを多量に含むカマド袖がその崩壊土と考えられる淡黄褐色土(第4層)が見られることから、その調査区外にカマドが存在するものと推測される。

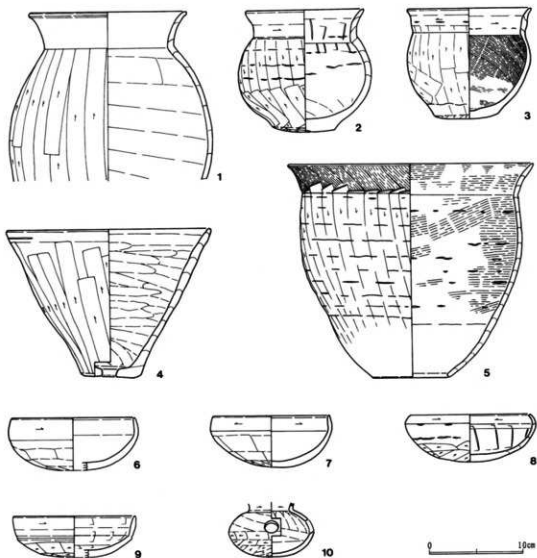
出土遺物は、カマド周辺の床面付近から完形に近い土器が比較的多く出土している。これらの土器は、その出土状態から住居の廃絶に伴って遺棄されたものと考えられる。



第224図 第1号住居跡

第1号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：淡黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第225図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物観察表

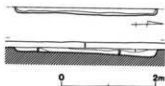
1	甕	A. 口縁部径16.8 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面莚ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 4/5。G. 床面付近。
2	小形甕	A. 口縁部径12.6、器高13.0、底径6.6 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒、小石。E. 内外一暗茶褐色。F. 完形。G. 覆土中。
3	小形甕	A. 口縁部径13.2、器高11.7、底径6.8 B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ハケの後ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 3/4。G. 床面上。

4	小形瓶	A.口縁径21.8、器高15.8、底径6.4 B.粘土経積み上げ。C.外面ナデの後ケズリ、内面上半指ナデ下半指ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒、小石。E.内外—黒茶褐色。F.1/2。G.床面付近。
5	大形瓶	A.口縁径24.4~26.0、器高22.6、底径8.0 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ハケの後ナデ。胴部外面ケズリの後下半ナデ、内面ハケの後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—淡茶褐色。F.ほぼ完形。G.床面上。
6	坏	A.口縁径(13.0)、器高5.5 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明茶褐色。F.1/4。G.覆土中。
7	坏	A.口縁径(12.4)、器高5.4 C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上半丁寧なナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—茶褐色。F.1/2。G.床面上。
8	坏	A.口縁径12.3、器高5.0 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面寛ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外—淡茶褐色、内—暗褐色。F.完形。G.床面上。
9	坏	A.口縁径(12.8)、器高4.4 C.口縁部内外面寛ナデ。体部外面ケズリ、内面寛ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外—暗橙褐色。F.1/2。G.覆土中。
10	甕	A.残存高5.8 B.粘土経積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面上半指ナデ下半ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外—明橙褐色。F.1/2。G.覆土中。H.穿孔は焼成前。

第2号住居跡（第226図）

調査区中央部に位置し、北側約6mには第1号住居跡が近接している。調査区内で検出されたのは、住居の東側壁だけであるため本住居跡の全容は不明である。規模は南北方向が3.02mあり、住居東側壁はほぼ真北を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち

上がり、確認面からの深さは10cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、壁際のため軟弱である。床面直上の覆土(第2層)には焼土粒子が多量に見られることから、本住居跡は焼失により廃絶された可能性も考えられる。遺物が何も出土していないため、本住居跡の時期は不明である。



第226図 第2号住居跡

第2号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

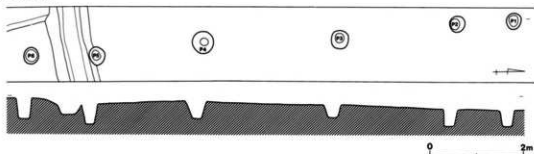
2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第227図）

調査区南側に位置し、建物跡の南側を重複する第5号溝跡に切られている。調査区内で検出されたのは、南北方向の直線上に並ぶ柱穴列の1列だけであるため、本建物跡の全容は不明である。建物跡の形態は、南北方向が3間で建物の南北両側に下屋か庇(縁)をもつと考えられる。規模は、南北方向の長さが10.40mあるが、3間の柱間距離は不揃いである。柱間距離は、P2～P3間が2.30m、P3～P4間が2.90m、P4～P5間が2.50mを測り、真ん中のP3～P4の1間が他に比べて広がっている。下屋か庇にあたる北側のP1～P2の柱間距離は1.40m、南側のP5～

P 6の柱の間は1.30mである。柱通りは、ややずれが見られ若干蛇行きみであるが、柱穴列の直線上からはずれものはない。柱穴は、直径35cm～45cmの円形を呈し、深さはP 3が27cmで最も浅いが、他はいずれも38cm前後で比較的揃っている。覆土は、B軽石を均一に、ローム粒子やロームブロックを微量含む暗褐色土で、遺物は何も出土しなかった。

本建物跡の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土の観察からは中世以降のものと考えられる。



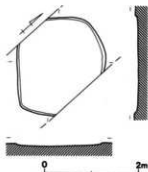
第227図 第1号掘立柱建物跡

3 土 塙

第1号土塙(第228図)

調査区北側に位置し、南側約9mには第1号溝跡がある。土塙の東西両側のコーナー部は調査区外に位置している。形態は、北側コーナー部の丸みが強いが、長方形に類似した形態を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向が2.06m・北東～南西方向が1.88mあり、確認面からの深さは5cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、B軽石とロームブロックを均一に含む黒褐色土で、遺物は何も出土しなかった。

本土塙の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土の観察からは中世以降のものと考えられる。



第228図 第1号土塙

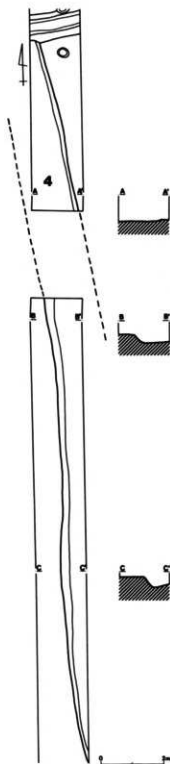
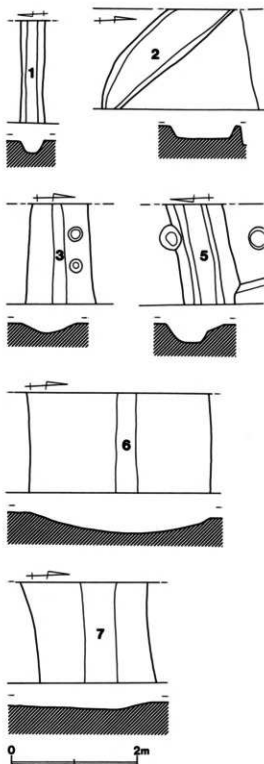
4 溝 跡

第1号溝跡(第229図)

調査区北側に位置し、北側約9mには第1号土塙がある。流路は、ほぼ東西方向にとり、調査区を直線的に横断している。規模は、上幅40cm・深さは18cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みをもつ。出土遺物はなく、時期は不明である。

第2号溝跡(第229図)

調査区中央部に位置し、北側は第1号住居跡と近接している。流路は、北西～南東方向に向いて



第229図 溝 跡

おり、やや湾曲するようである。規模は、上幅25cm～74cmで東側に向かって狭くなっている。深さは、東端で11cm・西端で20cmあり、東から西に向かって緩やかに傾斜している。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、ローム粒子や鉄斑を微量含む暗茶褐色土で、遺物は何も出土しなかった。本溝跡の時期は、遺物がなため明確ではないが、覆土の観察からは古代以前の可能性が高いと考えられる。

第3号溝跡（第229図）

調査区中央部に位置し、南側には第2号住居跡が近接している。流路は、ほぼ東西方向にとり、調査区を直線的に横断している。規模は、上幅90cm～108cm・深さは20cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みをもつ。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色土で、遺物は何も出土しなかった。本溝跡の時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第4号溝跡（第229図）

調査区南側に位置し、北端で重複する第5号溝跡を切っている。流路は、北西～南東方向に直線的な形態をとっている。規模は、上幅が約170cm程度あるものと思われ、深さは10cmと比較的浅い。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色土で、遺物は何も出土しなかった。本溝跡の時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第5号溝跡（第229図）

調査区南側に位置し、重複する第5号溝跡に切られ、第1号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。流路は、ほぼ東西方向にとり、調査区を直線的に横断している。規模は、上幅90cm・深さは30cmある。壁は下半は直線的にやや傾斜しているが、上半は立ち上がりの方向を変えてかなり緩やかになっている。底面は幅30cmで平坦である。遺物は何も出土していないが、覆土の状態より中世～近世の所産と推測される。

第6号溝跡（第229図）

調査区南端付近に位置し、北側には第4号溝跡が、南側には第7号溝跡が近接している。流路は、東西方向にとり、調査区を直線的に横断している。規模は、上幅290cm・深さは30cmある。壁は緩やかに立ち上がり、底面は狭く丸みをもつ。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色で、遺物は何も出土しなかった。本溝跡の時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第7号溝跡（第229図）

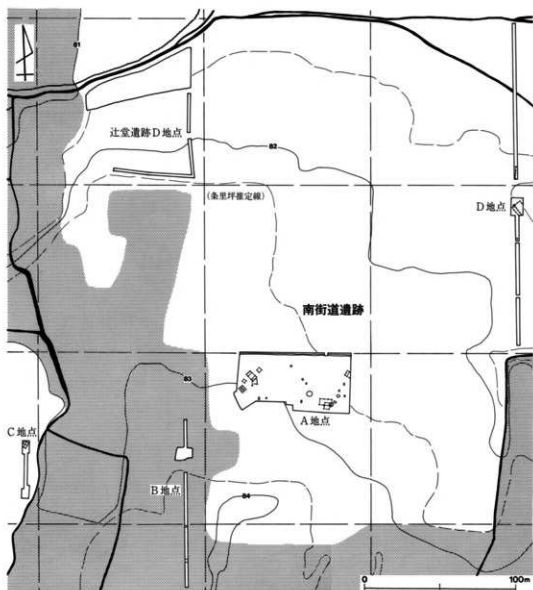
調査区南端付近に位置し、北側には第6号溝跡が近接している。流路は、東西方向にとり、調査区を直線的に横断している。規模は、上幅177cm～200cm・深さは10cmと比較的浅く、断面は皿状を呈している。覆土は、A軽石を均一に含む淡灰褐色で、遺物は何も出土しなかった。本溝跡の時期は、覆土の状態から近世後半以降と考えられる。

第V章 ま と め

—南街道遺跡の中世集落と条里の施工について—

今回報告した辻堂遺跡・南街道遺跡・宮田遺跡からは、古墳時代と中世を主体とする集落跡が検出されている。古墳時代の集落については別途報告の『辻堂遺跡Ⅰ』(恋河内1996)で簡単にではあるが述べているので、ここでは南街道遺跡の中世集落について、所見を述べてまとめた。したい。

南街道遺跡では、A地点で掘立柱建物跡7棟・竪穴式住居跡1軒・井戸跡1基・土壇13基・溝跡1条、B地点で溝跡2条、C地点で掘立柱建物跡1棟、D地点で掘立柱建物跡2棟・土壇1基と、



第230図 南街道遺跡中世遺構分布図

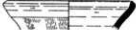
比較的多くの中世遺構が検出されている(第230図)。このA～D地点は相互にやや距離を置いて離れており、比較的広範囲にわたって中世の遺構が展開しているようであるが、A地点以外の地点では調査範囲が狭いため、遺構の全容や配置は不明である。また、西側のC地点については、B地点との間にある周囲より一段低い幅約50mの北に向かって帯状に延びる水田によって、A地点やD地点が立地する微高地と分離されているため、地形的には別遺跡として扱うべきであろう。

本遺跡の中世集落は、A地点から出土した遺物の年代から、現時点では概ね13世紀中葉～後半と14世紀末～15世紀前半の2時期を主体とした集落と推測される(第232図、注1)。しかしながら、本遺跡も中世集落の一般的特徴に漏れず、出土遺物が極めて少ないことから、個々の遺構についてはその時期を出土遺物から直接特定できないものが大半である。そのため、同時期に存在した遺構の把握には、遺構の形態やその配置を中心にして推測するしかなく、特に複数の建物によって構成される中世の屋敷においては、地割りの区画方向にある程度規制された合理的な建物配置を取るのであるという推測を前提にせざるおえない。以上の前提条件により、ここでは遺構の配置関係がある程度伺えるA地点(第231図)を中心にして検討する。

A地点の中世遺構の配置でまず注目すべき点は、掘立柱建物跡において建物の軸を北西～南東方向に向けるもの(A群)と、東西あるいは南北方向に向けるもの(B群)の二者が見られることである。前者のA群の建物は、5棟(第1・4・7・8・9号掘立)あり、やや離れたC地点やD地点でもそれぞれ1棟ずつ(第10・11号掘立)検出されている。後者のB群の建物は、調査区の南東側で2棟(第5・6号掘立)検出されているが、この2棟の建物は重複しているため同時に存在したものではない。これらの建物の形態や規模は様々で、出土遺物により時期が特定できるものも皆無であるが(注2)、B群の建物の柱穴は比較的小規模で、掘り込みも浅いものが多いのに対して、A群の建物の柱穴はB群の建物の柱穴より一回り大きく、掘り込みもやや深くしっかりしているものが多いという特徴が見られる。このA群とB群は、相互に重複せずやや離れて位置しているが、建物の軸方向や柱穴



第231図 南街道遺跡A地点中世遺構

時期 遺構	13世紀	14世紀	15世紀
6号掘立	青磁碗 (混入) 		
1号溝	青磁碗 (混入)   渥美甕 (混入)    常滑甕 (混入)   在地産鉢 (混入)  		 内耳鍋？  土師質土器皿
10号溝	渥美甕 (混入)  		
2号土塋		 片口鉢	
9号土塋			 片口鉢
1号井戸			 内耳鍋  鉢  土師質土器皿

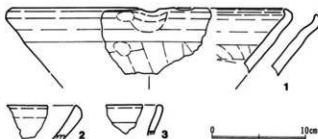
第232図 南街道遺跡A地点出土遺物の年代

形態の差異を考慮すると、同時に存在したのではなく、時期差と考えるのが妥当であろう(注3)。

さて、このA群とB群の具体的な時期であるが、それを考える上で一つの手掛かりとなるのが、それぞれの建物の軸方向や配置を規制する要因である。その要因には、日当たりや風向きや微地形などの自然条件も考えられるが、中世の屋敷内における建物の配置に、屋敷地の地割り区画の方向にある程度規制されたものが多いことを重視すれば、本遺跡が立地する微高地上やその周辺にやや変形しながらも連続的にその痕跡を残している条里形地割りととの関係が注目されよう。本遺跡のA地点は、周囲の地割りの様相から条里の坪内に位置していたと考えられ、調査区北端に位置する中世の第1号溝跡は、現地表面に見られる東西方向の坪界線にほぼ一致している。調査区内では、この他に坪内の屋敷地を区画するような中世の溝や橋等の具体的な遺構は検出されていないが(注4)、建物や出土遺物の貧弱性から見て、A群やB群の建物群が調査区域以上の広い屋敷地を有していたとは考え難く、また坪内の区画が坪縁方向に規制されない無秩序的な区画であったとも思えない。このことからA群は、坪界線の地割り方向に規制されていない建物配置として捉えられ、本遺跡周辺の条里形地割り施工以前の集落と推測される。これに対してB群は、坪界線の地割り方向に規制された建物配置であると考えられ、条里形地割り施工後の集落と推測される。

この本遺跡周辺の条里形地割りの施工は、これまでの周辺遺跡の発掘調査でも、古代に遡る痕跡は認められていない。A地点の第1号溝跡では、少量ながら13世紀中葉～後半(第216図No1～6)と15世紀前半(第216図No7～8)の2時期の遺物が出土しているが、いずれも覆土中から出土した破片であるため、どちらの時期の掘削か判断するのは困難である。しかしながら、平成元年度工区に伴う発掘調査では、A地点の坪から4坪西側の坪で、南北方向の坪界線にほぼ一致する中世の溝(A1区第1号溝跡、未報告)が検出されており、その出土遺物(第233図)は14世紀末～15世紀前半の時期と考えられることから、本遺跡A地点の第1号溝跡も現状では出土遺物の新しい時期の方をとって、15世紀前半の掘削と考えるのが妥当であり、古い13世紀中葉～後半の遺物は第1号溝跡掘削以前の条里形地割り施工前の集落から混入したものと推測される。つまり、本遺跡上や周辺の現地表面に見られる条里形地割りの施工は、概ね15世紀前半を中心とする時期であることが伺えよう。このことから、本遺跡A地点のB群の建物は、第1号溝跡掘削後の15世紀以降と推測され、B群の建物に伴うと推測される第1号井戸跡や周辺土壌の出土遺物の時期からは15世紀前半に位置付けられ、第1号溝跡の掘削時期に比較的近い時期とすることができよう。A群の建物については、明確な時期は不明であるが、本遺跡の出土遺物の時期様相から、一応13世紀中葉～後半の時期に比定しておきたい。そして、条里坪界線に一致する第1号溝跡の掘削以前と推測される中世の遺構群をⅠ期、掘削以後と推測される中世の遺構群をⅡ期に大別して、時期別の様相を概観してみたい。

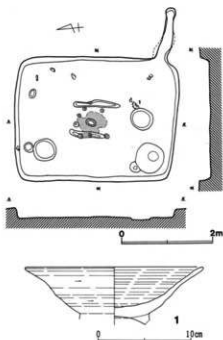
Ⅰ期には、A群の建物群の他に、



第233図 児玉条里遺跡(児玉南部平成元年度工区)A1区
第1号溝跡出土遺物

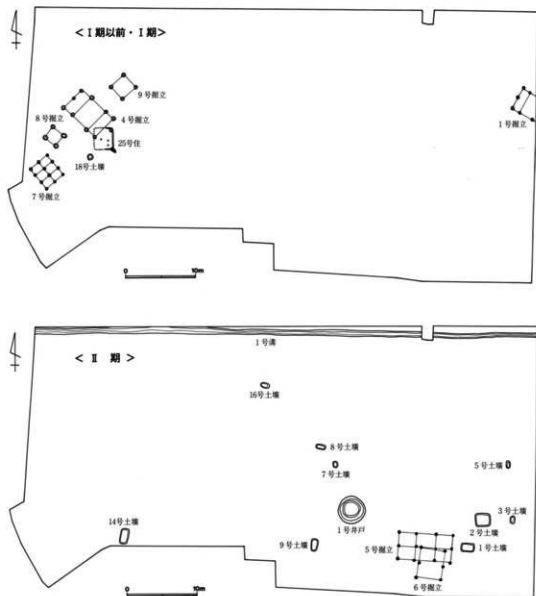
調査区西側の第25号住居跡と第18号土壌が、該期の可能性が高いものとして上げられる。第18号土壌は、出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、覆土が近接する掘立柱建物跡の柱穴覆土と類似していることから、建物群に伴うものと考えてよいであろう。第25号住居跡は第4号掘立柱建物跡と重複しており、新旧関係は不明であるが同時に存在したものではない。この第25号住居跡は、覆土中にB軽石を多量に含んでいることから、12世紀以降のものであることはほぼ間違いないであろうが、住居南東側のコーナー部にはカマドが付設されている。10世紀以降の竪穴式住居跡のカマドの位置が、住居のコーナー部側はかなり寄ってくる傾向から見て、古代の竪穴式住居跡の系譜上に連なるものと考えられるが、同様の住居跡はA地点の北側約500mに位置する蛭川坊田遺跡(注5)でも2軒検出されている。このうちの第4号住居跡(第234図)は、覆土中に多量のB軽石を含んでいることや、床面から出土した土器から、B軽石の降下時期(1108年)に非常に近い11世紀末～12世紀初頭の時期と考えられるものである。この住居跡は、本遺跡の第25号住居跡と住居の形態や規模が類似し、住居の向きやカマドの位置まで同一であることは注目され、恐らく本遺跡の第25号住居跡も蛭川坊田遺跡第4号住居跡に近時した時期と思われ、B軽石降下直後の12世紀初頭頃の所産と考えてよいであろう。そのためこの第25号住居跡は、重複するA群の建物群より古い時期の可能性が高いことから、I期以前の段階に位置付けておきたい。蛭川坊田遺跡の11世紀末～12世紀初頭段階と推測される屋敷跡では、屋敷を構成する建物の主体は掘立柱建物跡となり、それに1軒程度の竪穴式住居跡が付随するような形態になっている。蛭川坊田遺跡の第4号住居跡は、住居中央部に何だかの構造物を伴った炉があり、居住施設よりは工房的性格の強いものである。恐らくこの頃には、居住施設の主体は掘立柱建物に移り、竪穴式住居は竈屋や工房等の付属屋として機能していたか、あるいはほとんど作られなくなったのではないと思われる。本遺跡の第25号住居跡も、蛭川坊田遺跡の第4号住居跡と同じく、住居中央部に炉の痕跡が認められることから何だかの工房的な性格も推測され、A地点の調査区外に居住施設としての掘立柱建物(群)が存在する可能性もあろう。

I期の主体としたA群の建物群は、調査区の東西両端に別れて位置している(第235図上)。両者とも調査区の端にあるため、屋敷の全容は不明であるが、両者はかなり離れて位置していることから、別々の屋敷を構成する建物と思われる。西側の4棟は、相互に重複せずほぼ列状に並んでおり、ほぼ同一時期のものと考えられる。これらの建物群は、付属屋か小規模な主屋の建物か判断できないが、建物の長軸方向の両側に庇の構造をもつ第4号掘立柱建物跡を中心に、1間×1間の性格不明



第234図 蛭川坊田遺跡第4号住居跡
及び出土遺物

の小さな構造物を2棟(第8・9号掘立柱建物跡)と、2間×3間ではあるが1間の間隔がかなり狭い総柱の倉庫(第7号掘立柱建物跡)1棟によって構成されている。建物群の周囲には、溝等による明確な屋敷地の地割りの痕跡は見られないが、建物群が列状に並ぶ配置をとっていることから、恐らくその東側には、生け垣などの簡単な構造による建物群に沿った北東～南西方向の地割り区画が存在したものと思われる。この調査区西側の建物群によって構成される屋敷は、溝等による比較的しっかりした屋敷地の地割りをもたないことや、調査区内から出土した該期の遺物が量的に貧弱であることから見て、農民層の屋敷の一部と推測されるが、屋敷内に倉庫を有していることは注目され、農民層の中でも集落内で中核的立場に位置する農民の屋敷の一部ではないかと思われる。そのよう



第235図 南街道遺跡A地点中世遺構時期別配置図

に考えられるとすれば、調査区内で検出されている第4号掘立柱建物跡を、屋敷の主屋と考えるにはかなり貧弱であり、屋敷地が西側の調査区外に広がることも予想され、調査区外に第4号掘立柱建物跡よりも規模の大きな主屋と井戸などの施設がさらにあるのではないかと考えられ、群馬県新田町の東田遺跡(須田1989)で検出された屋敷跡のような建物配置が想像される。

東側の第1号掘立柱建物跡は、その位置から西側の建物群によって構成される屋敷とは別の屋敷の一部と推測されるものである。西側の第4号掘立柱建物跡と構造的に類似した建物と思われるが、調査区内では建物の一部が検出されただけであるため、明細は不明である。この他に、D地点で検出された建物の南西側に底をもつ主屋の建物の第11号掘立柱建物跡も、恐らく数棟の建物によって屋敷を構成しているものと思われる。このD地点の屋敷は、同じA群の建物であることから、A地点の屋敷との関連性を伺うことはできるが、調査区内からも時期を推測できるような出土遺物がなく、また地点も離れているため、A地点の屋敷との同時性について推測するのは困難である。

Ⅱ期は、B群の建物2棟と第1号溝跡及び第1号井戸跡があり、この他に長方形や長楕円形の形態を呈する土壌も、該期の可能性が高いものとして上げられる(第235図下)。A地点から検出された中世の土壌には、平面形が円形を呈するものと長方形もしくは長楕円形に近い形態を呈するものがある。このうちの後者は、いずれもその長軸方向を条里形地割りの方向にほぼ合う東西か南北方向に向いている。土壌の長軸方向を規定する要因については、単に周囲の地割りと関係だけでなく、土壌の性格によって様々なことが考えられるが、第2号土壌や第9号土壌の出土遺物の時期から見ても、これらの土壌の多くは該期以降の可能性が高いと推測され、該期の屋敷との関係で形成されたのではないと思われる。また、前者の円形土壌については、その時期や性格が明確なものはないが、後者の長方形土壌との形態差が時期差と想定されれば、Ⅰ期に属す可能性もあろう(注6)。

B群の建物は、調査区の南東側で2棟が重複して検出されている。そのため、該期はさらに小期が認められるが、新旧関係が不明であるため、これ以上の時期区分は困難である。B群の建物や第1号井戸跡によって構成される屋敷も、溝等による屋敷地の地割りの痕跡は見られないが、調査区南東側の建物や井戸の周辺には、屋敷内での活動の痕跡と推測される多数の中世の小ビットが比較的集中して見られることから、その分布がある程度屋敷地の広さを表しているのではないかと考えられる。該期の屋敷は、遺構の位置から見て、南側の調査区外にさらに広がるものと思われるため、屋敷地内の具体的な構成は不明であるが、この屋敷も溝等による比較的しっかりした屋敷地を区画する地割りをもたないことから、一般農民層の屋敷跡と考えてよいであろう。

以上のように、南街道遺跡のA地点で検出された中世の屋敷跡について、屋敷地の形態に規制されると推測した建物の配置と、条里坪内に位置する屋敷地を規制すると思われる周辺の条里形地割りと関係から、条里施工以前と条里施工後の大きく2時期に分けて考えた。しかしながら、前述したように、憶測の上に立って検討せざるおえないため、かなり想像的になってしまったと思われる。本遺跡の中世屋敷の具体的な展開については、未調査区域の今後の意識的な発掘調査の積み重ねによって、実証的に明らかにしていかなければならないであろう。

また、本遺跡が立地する比較的広大な微高地の畠地帯や、その西側縁辺の水田部の現地表面に見られる条里形地割りは、現在までの発掘調査の成果では、中世の15世紀前後までしか溯り得ないこ

とを述べた。本遺跡や辻堂遺跡では、8世紀初頭～11世紀の遺構や遺物が皆無であることから、条里内の再開発とするのはやや困難と思われるが、この条里形地割りが女堀川流域に広がる条里の地割りと一致していることは、古代条里周辺部の地割り延長や拡張による中世的開発の一形態としてみることができよう(金田1993)。中世農業の特質は、水田や畠における二毛作の全国的な普及による集約的農業の展開とされており、特に畠作物及び畠地の経済的価値の高まりによる積極的な畠地開発が指摘されている(黒田1984、木村1992)。おそらく、本遺跡上や周辺部の条里形地割りを拡張したと推測される開発も、このような中世的農業の特質を反映した、畠地とその周辺部の乾田の開発を目的としたものと考えられる。その開発規模は現状では明確にできないが、あるいは数十町に及ぶ可能性もあり、特に乾田の開発には灌漑用水の掘削が不可欠であるため、水利権を掌握する在地土豪層の主導による開発であったことも予想される。この当地域の中世における開発の様相については、毛無し屋敷跡(恋河内1995)の關係とともに、改めて具体的に検討してみたいと思う。

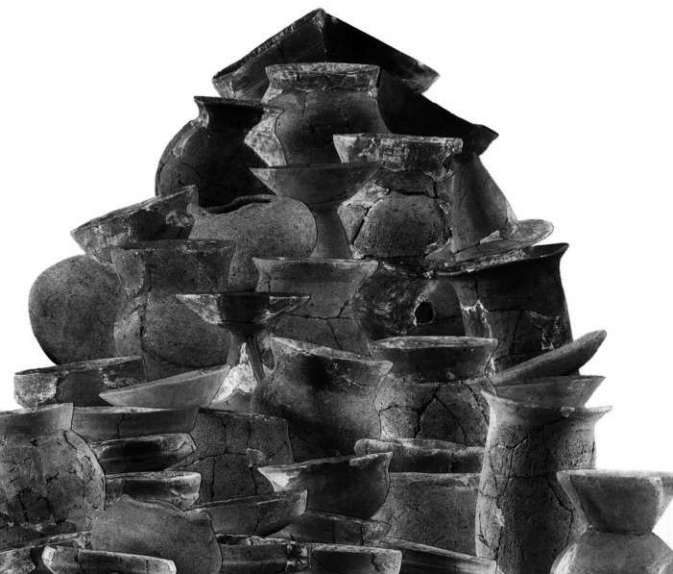
注

- (注1) 南街道遺跡や周辺遺跡の中世遺物については、浅野晴樹・荒川正夫の両氏から多くの御教示を受けた。この場を借りて両氏に感謝します。
- (注2) 第6号掘立柱建物の柱穴覆土からは、唯一13世紀代の龍泉窯系青磁碗の小破片(第197図)が出土しているが、剥落が顕著な破片で混入の可能性が高く、建物跡の時期を特定できるものではない。
- (注3) 建物群に見られる個々の建物の柱穴の形態や規模の差異は、建物の機能や性格の違いを反映している場合が多く、それだけでは時期差として考えることはできないが、ここではA地点の建物に見られる柱穴形態の差異が建物の軸方向の差異と対応することに注目しておきたい。
- (注4) 当然ながら、生け垣や浅い資弱な溝など、現在の遺構確認面まで達しない後の耕作などにより破壊されてしまうような区画が存在したと思われる。
- (注5) 堀川坊田遺跡は、1990年に見玉町遺跡調査会が発掘調査を実施したもので、10世紀～12世紀前半頃の集落跡と屋敷跡が検出されている(未報告)。
- (注6) この他、やや規模の大きな第10号土壌があるが、これは重複関係や覆土の状態から第5号掘立柱建物跡や第6号掘立柱建物跡よりも新しいと考えられ、明らかにB群の建物とは同時に存在しないものであるため、ここでの対象から除外している。

【参考文献】

- 赤 熊 浩 一 (1994) 『金井遺跡B区』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第146集
- 浅 野 晴 樹 (1988) 『関東における中世在地産土器について』『研究紀要』 第4号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 浅野晴樹・服部実喜(1995)『関東』『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 荒 川 正 夫 (1993) 『大久保山Ⅱ』 早稲田大学本庄校地文化財調査室
- (1995) 『大久保山Ⅲ』 早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 木 村 茂 光 (1992) 『古代・中世畠作史の研究』 校倉書房
- 金 田 章 裕 (1993) 『古代日本の景観』 吉川弘文館
- (1993) 『微地形と中世村落』 吉川弘文館
- 黒田日出男 (1984) 『日本中世開発史の研究』 校倉書房
- 恋河内昭彦 (1995) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・鶴越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』 見玉町文化財調査報告書第17集
- (1996) 『辻堂遺跡Ⅰ』 見玉町文化財調査報告書第19集
- 須 田 茂 (1989) 『有力農民の屋敷—新田荘・東田遺跡—「よみがえる中世Ⅴ—浅間火山山灰と中世の東国—」 平凡社
- 平 田 重 之 (1989) 『豊野原・檜下遺跡Ⅰ—中世編—』 豊野原・檜下遺跡調査会報告書第1集
- 峰 岸 純 夫 (1973) 『十五世紀後半の土地制度』『土地制度史Ⅰ』 体系日本史叢書6 山川出版社
- 山 川 守 男 (1995) 『城北遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第150集

写真図版





辻堂遺跡C地点全景



辻堂遺跡A地点中央部北側全景



辻堂遺跡D地点南端部西側全景



辻堂遺跡D地点南側全景



辻堂遺跡A地点中央部全景（西より）



辻堂遺跡A地点中央部全景（北より）



第2号住居跡

辻堂遺跡



第1号住居跡



第5・6号住居跡



第3・4号住居跡



土倉遺跡

第5号住居跡カマド支脚出土状態



第5号住居跡カマド裏出土状態



第8号住居跡遺物出土状態



第8号住居跡



第9号住居跡遺物出土状態



第9号住居跡



第11号住居跡カマド



第12号住居跡



第10、12号住居跡



第10号住居跡



第28号住居跡



第32号住居跡



第27号住居跡



第28号住居跡カマド



第35号住居跡



第33号住居跡



第40、42号住居跡



第36、39号住居跡



第46、48号住居跡

第44号住居跡



第51号住居跡

第49号住居跡





第54号住居跡



第56号住居跡



第50号住居跡



第55号住居跡



第3号土坑



第2号土坑



辻堂遺跡

辻堂遺跡D地点北端西側遺構確認調査風景



第16号溝跡